仙台市文化財調查報告書第70集

戸ノ内遺跡

——発掘調査報告書——

1984年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調查報告書第70集

デノ 内遺跡

——発掘調査報告書——

1984年3月

仙台市教育委員会

名取川南北両岸流域は仙台平野のなかでも大小さまざまな遺跡群が高密度に分布し、遠い原始・古代のひとびとの生活の証しを知るところとなっています。

今回の発掘調査地域も名取川の下流南岸にあって「四郎丸」と云う地名からも中世時代の舘跡のある所と古記にみる所でもあって、その開発の古さを偲ばせてくれます。調査成果の内容をみてもそれと関連する遺構も発見されています。なかでも特筆すべき成果として「方形周溝墓」の発見があります。県内七例目の発見でありますが規模の点では最大級のものであること、また埋納施設をもつ供献用の土師器壺は、その形状・特徴から古墳時代初頭のものと判断され、東北最古のものであること等は、古墳文化の萠芽を示すものとして注目に価するものであります。

こうした沖積地に展開する遺跡群の発掘調査は近年市街地の拡大 に伴い頻繁に行なわれており、年毎に先人の生活文化の様相が少し ずつ解明されつつあることはよろこばしい反面、遺跡の保存に関す る諸問題も露呈していることも事実であり、文化財保護の課題とな っていることも否定できないことです。

さて、本書は戸ノ内遺跡の発掘調査の結果を詳細にまとめ公開するものであります。文化財の保護・保存・継承・活用に寄与することを切に念じてやみません。

最後に本報告書の刊行並びに調査に際しては多くの方々の御協力 御指導・助言を賜わりましたこと深く感謝を申し上げ序とする次第 であります。

昭和59年3月

仙台市教育委員会 教育長 藤 井 黎

例 言

- 1. 本書は宅地造成工事に伴う戸ノ内遺跡の発掘調査報告書である。
- 2. 戸ノ内遺跡は本来戸ノ内 I 遺跡として登録されていたが、調査の結果戸ノ内 II 遺跡を含む 広範囲なものと判断され、戸ノ内遺跡として大きく把え名称・範囲を修正した。
- 3. 動物遺体の馬骨に関しては獨協医科大学 茂原信生氏に御教授をいただいた。
- 4. 本書の文章・実測図中の方位は磁北で統一してある。
- 5. 本書に掲載した第4図は国土地理院発行の2万5千分の1「仙台西南部」「仙台東南部」「岩沼」「仙台空港」を使用したものである。
- 6. 本書中の土色は「新版標準土色帖」(小山・竹原:1973) を使用した。
- 7. 本書を作成するにあたり、いわき市教育文化事業団樫村友延、福島県文化センター遺跡調査課石本弘両氏から協力を得た。
- 8. 本報告の執筆は I ~ № 1. を主浜光朗が、 № 2.~ IX を渡部弘美が分担し、編集は渡部・主浜が行なった。
- 9. 本遺跡の出土遺物は仙台市教育委員会が一括保管している。

本 文 目 次

1	3	*
	\neg	•

/ I	_
4771	=
121	

Ι.	調査に至る経過1
$ {\rm I\hspace{1em}I} .$	調査要項1
	遺跡の位置と環境・・・・・・3
\mathbb{N} .	調査の方法と経過・・・・・8
V .	基本層位
VI .	発見遺構と出土遺物・・・・・・・10
	I 期······12
	Ⅱ期(住居跡・方形周溝墓・焼土遺構・小溝)・・・・・・・・12
	Ⅲ期(溝跡・小溝)31
	Ⅳ期 (溝跡)35
	V期 (溝跡・小溝)40
	VI期 (溝跡) ·······42
	Ⅷ期(溝跡・ピット)45
	土壙
	その他の遺構62
\mathbb{W} .	出土遺物について64
	1. 弥生土器64
	2. 古代の土器
	3. 陶磁器······77
	4. 土製品78
	5. 木製品78
	6. 金属製品78
	7. 石製品79
	8. 動・植物遺体・・・・・・79
₩.	発見遺構について79
	1. 住居跡79
	2. 方形周溝墓80
	3. 溝跡82
IX.	まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

I. 調査に至る経過

戸ノ内遺跡は、仙台市の南東部、名取川右岸の沖積面の自然堤防上に位置し、土師器や須恵器を出土する遺跡として知られていた。遺跡の所在する地区周辺は、近年急速に宅地化が進みつつある地域であるが、田畑が多く残っており、太平洋側及び南方には広大な田園風景がみられる。その中にあって戸ノ内遺跡は畑地として遺跡の現状を保っていた。

1981年8月、三和住宅産業㈱から、仙台市四郎丸字戸ノ内12-1、2において、宅地造成に伴う発掘届が提出された。仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係では、開発地が遺跡の範囲内に位置していることから、三和住宅産業㈱と協議の上、試掘調査を経て、記録保存を目的とした発掘調査を1983年5月9日から同年12月23日の間で実施した。なお、調査終了後三和住宅産業㈱から㈱ホクサン住宅へ開発に係る一切の地位の承継が行なわれている。

Ⅱ.調 杳 要 項

遺跡の名称: 戸り内遺跡 (仙台市文化財登録番号 C-213、宮城県遺跡登録番号01280)

所 在 地:仙台市四郎丸字戸ノ内12-1外

調 查 主 体:仙台市教育委員会

調 查 担 当:仙台市教育委員会社会教育課文化財調查係

担当職員:試掘調查 加藤正範 佐藤甲二

本調 杳 渡部弘美 主浜光朗

調 査 期 間:試掘調査 1982年9月28・29日

本 調 査 自1983年5月9日 至1983年12月23日

調查対象面積:約7100m²(発掘面積:約3500m²)

調 査 参 加 者:相沢史子、伊藤 司、岩淵信博、佐々田弥生(以上整理も含む)

阿部栄子、荒木多利蔵、荒木みつ、故石垣信一、石垣英子、伊藤貞子、角田里志、角田千代野、片寄はる子、黒田きよみ、酒井トクエ、菅井あや子、菅井勝子、菅井かつの、菅井絹子、菅井きみ子、菅井ちよの、菅井 昇、菅井やすみ菅井よね子、菅野みやの、高砂 進、高橋みや子、牧 かね子、山沢豊正

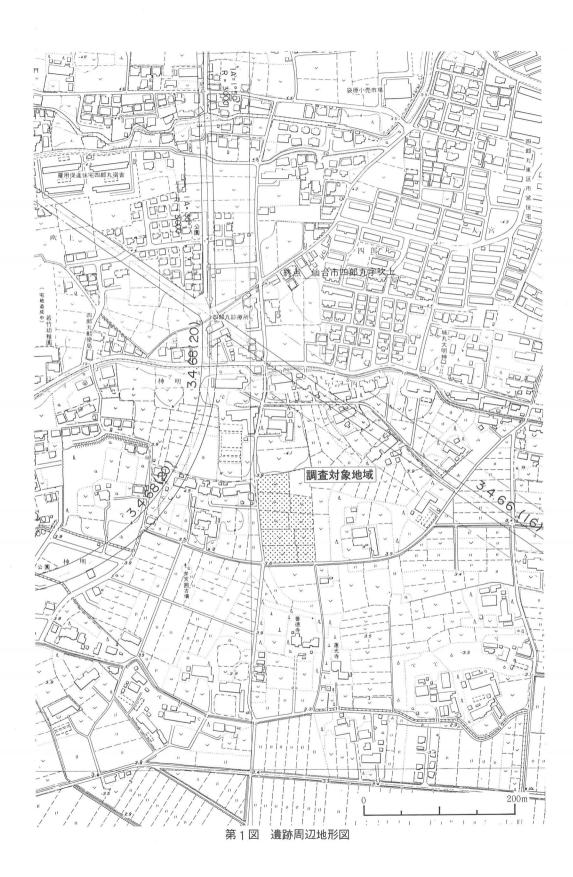
山沢ふゆ子、渡辺洋子

整 理 参 加 者:大友 透、宮本昌俊、吉田秀享、阿部多津子、菅原恵美子、吉田康子

安喰真由美、鈴木勝彦、鈴木和子、高橋綾子、高橋りえ、三浦秀樹、谷津妙子

調 査 協 力:株式会社ホクサン住宅、三和住宅産業株式会社、菅野次郎、伊藤 勇

株式会社マップ・システム・カンパニー (M.S.C)



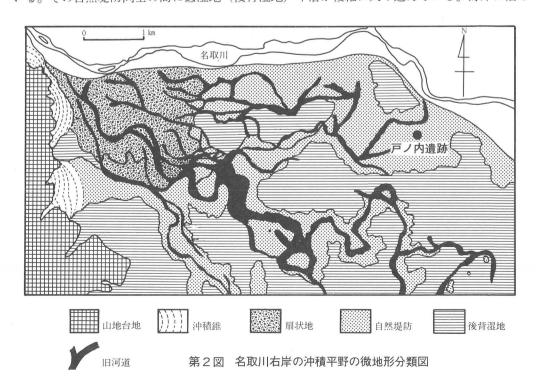
Ⅲ.遺跡の位置と環境

遺跡の位置

戸ノ内遺跡は、国鉄東北本線南仙台駅より東へ約3kmの地点、仙台市四郎丸字戸ノ内地内に所在する。本遺跡の北方約1.2kmには名取川が、東方約4kmには太平洋が望める所で、南方約300mからは名取市になる。遺跡の範囲は、東西約350m、南北約450mで、面積は、およそ157,500m。というかなり広大なものであると推定される。

地理的環境

戸ノ内遺跡周辺の地形を概観すると、西側及び北側が奥州山脈東麓から延びる七北田丘陵 (標高 500 m 前後)、青葉山丘陵 (最高標高 212 m)、高館丘陵 (標高 200 m 前後)の丘陵地帯、また東側及び南側が太平洋及び太平洋につながる平野部という対称的な地形から成り立っている。平野部は名取川以北を宮城野平野、以南が名取平野と呼ばれる。また、七北田丘陵と青葉山丘陵を開析しながら広瀬川が東流し、青葉山丘陵と高館丘陵を開析しながら東流する名取川と合流し、名取川一本となって太平洋に注いでいる。名取川は、名取郡秋保町の二口峠を源とし、青葉山丘陵、高館丘陵が平野部と接するところで、流れの幅を広げ、扇状地性沖積地を形成している。また、氾濫による旧河道沿い、あるいは現在の流路に沿って自然堤防が発達している。その自然堤防同士の間に低湿地(後背湿地)や沼が複雑に入り込んでいる。海岸に沿っ



ては、沿岸州やそれに平行する何列かの浜堤や潟湖性低地がみられる。

本遺跡は、これらの自然堤防上に立地し、標高は4m前後である。本遺跡周辺は、近年まで 水田及び畑地として利用されてきたが、開発が進み住宅地へと変貌しつつあるところである。



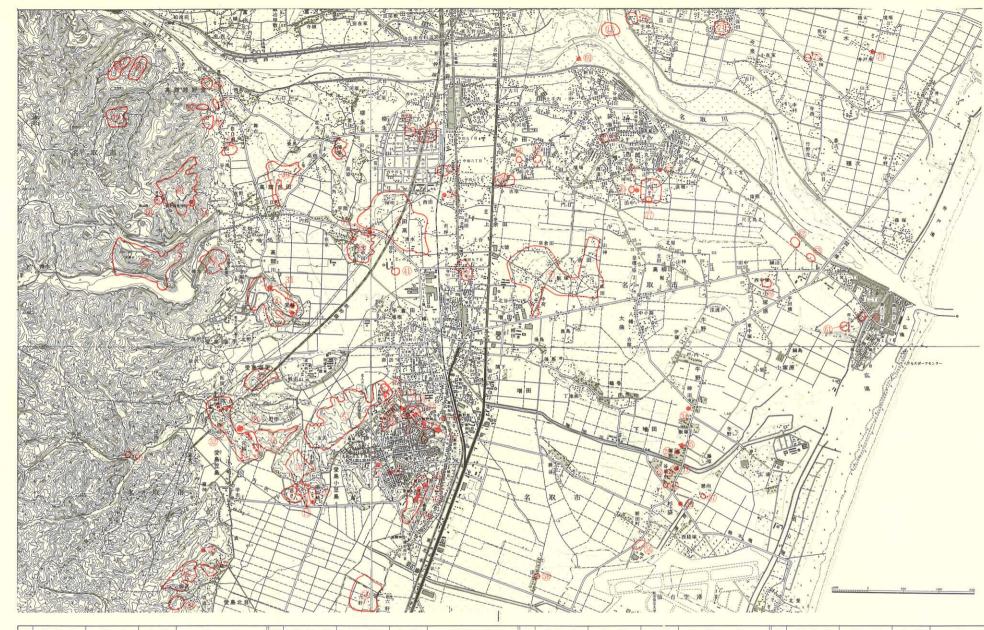
第3図 宮城県南部の地形分類図

歴史的環境

本遺跡は名取川によって形成された標高4m前後の自然堤防上に立地している。本遺跡付近は、自然堤防、後背湿地、旧河道が入り組んでいるが周辺の丘陵部も含めた名取平野の北側地域には数多くの遺跡が分布している。

最も時代が遡る約3万年以上前と考えられる前期旧石器時代のものから、後期旧石器時代、 縄文時代、弥生時代の各時代に亘って数多くの遺跡が存在しており、極めて古くから人間生活 が営まれていたことが知られている。

古墳時代になると、それまでより遺跡の数が増加し、自然堤防上から海岸線近くまで分布す



第4図 周辺の古墳時代・中・ 遺跡分布図

Na	遺跡名	種 別	立地	年 代	No.	遺跡名	種別	立地	年 代	No.	遺跡名	種別	立地	年 代	Na	遺跡名	種別	立 地	年 代
1	戸ノ内遺跡	集落·城舘跡	自然堤防	古墳・平安・中世	24	北小塚古墳	円墳?	丘陵中腹	古墳(中)	47	関場遺跡	包含地	自然堤防	古墳・奈良・平安	70	三本塚古墳	前方後円墳?	自然堤防	古墳
2	安久東遺跡	集落跡·古墳群	自然堤防	古墳・奈良・平安・中世	25	名取大塚山古墳	前方後円墳	台 地	古墳(中)	48	前沖中遺跡	包含地	沖積平野	古墳・奈良・平安	71	天文塚古墳	円墳	丘陵	古墳
3	中田畑中遺跡	集落跡	自然堤防	古墳・奈良・平安	26	天神塚古墳	方 墳	自然堤防	古墳(中)	49	前沖北遺跡	包含地	自然堤防	古墳・奈良・平安	72	清水古墳	古 墳	自然堤防	古墳
4	今熊野遺跡	集落跡・貝塚	丘陵	縄文(早·前)弥生·古墳·奈良·平安	27	観音塚古墳	前方後方墳	丘陵中腹	古墳(中)	50	神明遺跡	包含地	自然堤防	古墳・奈良・平安	73	前田舘跡	城館	自然堤防	中世
5	十三塚遺跡	貝塚・集落跡	丘陵	縄文·弥生·古墳·奈良·平安	28	塚根の塚古墳	円墳	砂堆	古墳(中・後)	51	西南泥遗跡	包含地	丘陵麓	古墳・奈良・平安	74	今泉城 跡	城 舘	自然堤防	中世
6	西野田遺跡	集落跡	丘陵	旧石器·繩文·弥生·古墳·奈良·平安	29	窪 古 墳	円墳	丘陵斜面	古墳(中)	52	五郎市遺跡	包含地	丘陵	古墳・平安	75	二木館跡	城館	自然堤防	安土桃山
7	宮下遺跡	集落跡	丘陵斜面	縄文・古墳・弥生・奈良・平安	30	一本杉古墳	方 墳	丘陵	古墳(中)	53	岩口上遗跡	包含地	台地	古墳・奈良・平安	76	日辺舘跡	城 舘	自然堤防	室町(後)
8	清水遺跡	集落跡	自然堤防	弥生・古墳・奈良・平安	31	箕輪占墳群A地区	古 墳	台 地	古墳(中)	54	山下遺跡	包含地	砂堆	古墳・奈良・平安	77	四郎丸舘跡	城 舘	自然堤防	鎌倉
9	下余田遺跡	集落跡	自然堤防	古墳(中)・奈良・平安	32	賽ノ窪古墳群	前方後円墳・円墳	丘陵頂	古墳(中)	55	西六軒遺跡	包含地	砂堆	古墳・奈良・平安	78	箱崎舘跡	城 舘	丘 陵	中世
10	飯野坂遺跡	包含地	丘陵	弥生(中)・古墳(中・後)	33	箱塚古墳群	円墳	丘陵	古墳(中)	56	川前遺跡	包含地	砂堆	古墳・奈良・平安	79	熊野堂大舘跡	城 舘	丘陵	中世
11	日辺遺跡	包含地	河川敷	古墳(中)	34	兵糧塚古墳	円墳	丘陵	古墳(中・後)	57	懸向遺跡	包含地	砂堆	古墳・奈良・平安	80	高舘城跡	城 舘	丘 陵	中世
12	安久遺跡	包含地	自然堤防	縄文(晩)・古墳・平安・中世	35	雷神塚古墳	円墳	砂堆	古墳(中・後)	58	下札前遺跡	包含地	砂堆	古墳・平安	81	小舘(古舘)跡	城館	丘 陵	中世
13	宇賀崎古墳群	円墳・方墳	丘陵	古墳(中・後)	36	泉 遺 跡	包含地	丘陵	縄文·弥生·古墳·奈良·平安	59	毘沙門堂南遺跡	包含地	砂堆	古墳・奈良・平安	82	大舘山舘跡	城 舘	丘陵	中世
14	高舘山古墳	前方後方墳	丘陵中腹	古墳(中)	37	松崎遺跡	包含地	丘陵	弥生・古墳・奈良・平安	60	汐入東場遺跡	包含地	自然堤防	古墳・奈良・平安	83	桑島舘跡	城 舘	丘 陵	中世
15	薬師堂古墳	前方後方墳	丘陵麓	古墳(中)	38	飯野坂西遺跡	包含地	丘陵	弥生・古墳・奈良・平安	61	東場遺跡	包含地·	自然堤防	古墳・奈良・平安	84	北目城跡	城 舘	丘陵	中世
16	雷神山古墳	前方後円墳	丘陵頂	古墳(中)	39	舘 腰 遺 跡	包含地	丘陵	弥生・古墳	62	大塚遺跡	集落跡	自然堤防	古墳・奈良・平安	85	黒 崎 城 跡	城 舘	丘陵	中世
17	毘沙門堂古墳	円墳	砂堆	古墳(中)	40	高畑遺跡	包含地	沖積平野	弥生・古墳・奈良・平安	63	明神堂遺跡	集落跡	自然堤防	古墳・奈良・平安	86	熊野那智神社	神社跡	丘陵中腹	中世・近世
18	宮山古墳	前方後方墳	丘陵中腹	古墳(中)	41	原 遺 跡	包含地	沖積平野	縄文·弥生·古墳·奈良·平安	64	岩口南遺跡	包含地	自然堤防	古墳・奈良・平安	87	大門山板碑群	経塚	丘陵斜面	中世
19	観音堂北古墳	方 墳	丘陵	古墳(中)	42	田高遺跡	包含地	自然堤防	弥生・古墳・奈良・平安	65	岩口中遺跡	包含地	自然堤防	古墳・奈良・平安	88	後河原遺跡	水田跡	自然堤防	奈良・平安・中世・近世
20	山居北古墳	前方後方墳	丘陵	古墳(中)	43	宿前遗跡	包含地	丘陵麓	弥生・古墳・奈良・平安	66	岩口下遺跡	包含地	自然堤防	古墳・奈良・平安	89	寺田遺跡	包含地	自然堤防	中世
21	山居古墳	前方後方墳	丘陵項	古墳(中)	44	柳沢遺跡	包含地	丘 陵	縄文・古墳・奈良・平安	67	城丸古墳	円墳	自然堤防	古墳					
22.	経の塚古墳	円墳	砂堆	古墳(中)	45	沢目遺跡	包含地	自然堤防	古墳・弥生・奈良・平安	68	弁天囲古墳	円墳	自然堤防	古墳					
23	小塚古墳	円墳	丘陵中腹	古墳(中)	46	前沖遺跡	包含地	砂堆	古墳	69	仙台大塚山古墳	円墳	河川敷	古墳					

第1表 周辺の古墳時代・中世 遺跡地名表

るようになる。また、集落の形成ばかりではなく、大規模な古墳の造築が行なわれるようになる。比較的古い時期に造築されたと考えられている古墳には、4世紀代と考えられている宇賀崎1号墳や5世紀前半と考えられている高館山古墳、薬師堂古墳がある。それにつづくものとして、東北地方第一の規模を誇る雷神山古墳や毘沙門堂古墳、山居北古墳など種々の形態の古墳がみられる。

また、弥生時代から存在する墓制形態である方形周溝墓が丘陵上に立地する今熊野遺跡から 9 基発見されている他、自然堤防上に立地する安久東遺跡からは、前方後方形の周溝墓が検出 (註 5) されている。古墳時代前期から中期の集落跡としては、本遺跡と近隣している中田畑中遺跡や (註 6) (註 7) 前述の今熊野遺跡の他、清水遺跡、宮下遺跡等があげられる。本遺跡に近接して、仙台大塚山 古墳、城丸古墳、弁天囲古墳等の古墳や神明遺跡などの包含地が分布している。

古墳時代後期から奈良・平安時代の遺跡も数多く分布している。

平安時代末期には、文治の役(1189年)で平泉藤原氏と源頼朝が、広瀬川・名取川をはさんで相対峠したところである。本遺跡と密接な関連が考えられる四郎丸館跡は、藤原秀衝の家臣名取四郎の居館であったと考えられており、現在の善徳寺付近といわれている。また、熊野堂地区には熊野神社が、高館山に熊野那智神社が建てられ、中世にかけて信仰を集めていた。熊野那智神社には、多数の和鏡・懸仏が残されており、平安時代末期から鎌倉時代にかけてのものが多い。中世になると、高館城跡など高館丘陵の頂上部に多くの城館が建てられ、平野部でも前田館跡や名取川の北岸に今泉城跡などがみられる。また、中世の生産遺跡として、後河原遺跡から水田跡が検出されている。

室町時代末期には、四郎丸の地に、伊達家臣菅井和泉守実国が入った。同時に天台宗の善応寺を改め、曹洞宗の善徳寺を開いた。大永元年(1521年)のことであったという。以来菅井氏がこの地に権勢をふるっていたことが、善徳寺の墓地に残る天正17年(1598年)、元和3年(1617年)などの墓石からもうかがわれる。

以上のように戸ノ内遺跡周辺では、古くは前旧石器時代から、近世にかけて連綿と続いて、 多くの遺跡が存在している。

註

註1 宮城県教育委員会 「宇賀崎1号墳」 宮城県文化財調査報告書第67集 1980年

註 2 名取市 「名取市史」 1977年

註 3 宮城県教育委員会 「今熊野遺跡調査概報」 宮城県文化財調査報告書第33集 1973年

註 4 宮城県教育委員会 「安久東遺跡」 宮城県文化財調査報告書 第72集 1980年

註 5 仙台市教育委員会 「中田畑中遺跡」 仙台市文化財調査報告書 第53集 1983年

註 6 宮城県教育委員会 「清水遺跡」 宮城県文化財調査報告書 第77集 1981年

註7 名取市教育委員会 「宮下遺跡」 名取市文化財調査報告書 第1集 1980年

註8 仙台市教育委員会 「後河原遺跡」 仙台市文化財調査報告書 第71集として1984年刊行予定

註9 紫桃正隆 「仙台領内古城·館」 1974年

N.調査の方法と経過

戸ノ内遺跡は、これまで発掘調査が行なわれたことがなかったため、土層観察及び遺構確認面までの深さを観察するために試掘調査を行なった。その結果、地表から70~80cmで遺構確認面を検出した。また、開発地北半部では、畑地の耕作による天地返しが地表から1 m 50cmほどの深さまで達している部分もあり、かなりの攪乱を受けていることが判明した。

本調査では、開発地南東コーナー付近の境界杭を原点として、南北(磁北線)に基準線を設け、6m×6mを1単位としたグリットを設定した。南北軸にアラビア数字、東西軸にアルファベット文字で表わし、両者の組み合わせでグリット名を表わした。

調査対象面積は、7100㎡あり、攪乱及び排土等を考慮して、約3200㎡を発掘区とし、重機で表土層を排除し、人手によって遺構確認を行なった。検出された遺構は、住居跡 4 軒、溝跡 9 条、土壙16基、小溝跡 9 条、小溝状遺構、ピット多数等である。この結果、調査区外及び遺跡推定範囲より外側へ延びると考えられる遺構が検出され、遺跡南側に隣接する四郎丸館跡(仙台市文化財登録番号 C - 536)との強い関連が考えられる溝跡(=堀跡)が検出されたこと、南東約50mと極めて近い所に所在する戸ノ内 II 遺跡(仙台市文化財登録番号 C - 284)とも強い関連が考えられることから、従来戸ノ内 I 遺跡と呼称されていた本遺跡は、前の 2 遺跡を含む東西約 350 m、南北約 450 mにおよぶ範囲を持つ遺跡と考えられるに至った。

また、調査期間中、方形周溝墓と思われる方形に巡る溝跡が、調査区内に全体の約½が検出され、全体を確認するために、開発者である三和住宅産業㈱と協議し、約450㎡を拡張し、方形周溝墓の全体を検出した。

調査中、遺構測量の際に遣り方測量を用い、縮尺%の平面図を作成した。土層断面図、エレベーション図に関しても縮尺%を用いた。さらに遺物の出土状況等、必要に応じて縮尺%の詳細な実測図を作成した。

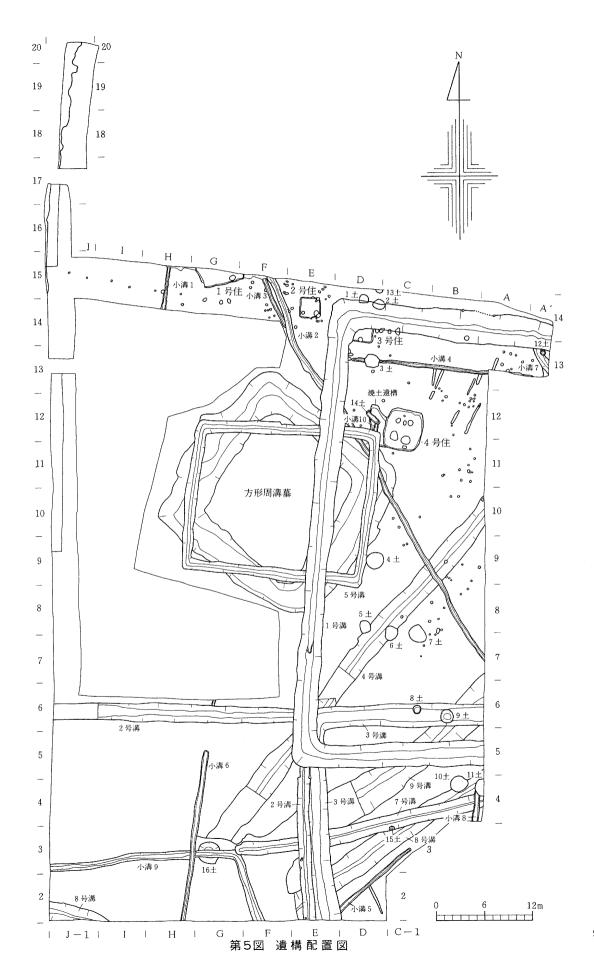
調査も終了に近づいた1983年12月1日(村)には、報道機関への発表を行ない、12月3日(土)には現地説明会を開催し、一般に公開した。屋外調査は12月23日に終了した。

なお、仙台市文化財分布地図における戸ノ内 I 遺跡及び戸ノ内 II 遺跡は、「戸ノ内遺跡」として、遺跡名称・範囲の修正を行なった。

Ⅴ.基本層位

表土から遺構確認面までは5層確認され、V層上面が遺構確認面である。

I・Ⅱ層は耕作土で、厚さがそれぞれ15cmであるが、耕作による天地返しが行なわれている部分では1m50cmを起える厚さを計る。褐色及び暗褐色シルトである。少量の遺物を含んでい



る。

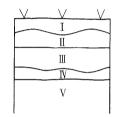
Ⅲ層は厚さ25cm前後、黒褐色シルトである。調査区の南部及び南西部を中心に確認される。

Ⅳ層は厚さ15cm前後、にぶい黄褐色シルトである。V層への漸移層であると考えられる。この面で確認された遺構もある。遺物を含んでいる。調査区の南部に多く確認される。

Ⅲ・Ⅳ層は、調査区5ライン以北では、大部分が天地返しによる攪乱を受けているために検出されなかった部分が多かった。

V層は、黄褐色砂質シルトの地山面である。ほとんどの遺構がこの面で確認された。表土からの深さは60~70cmであるが、調査区5ライン以北では、天地返しによる攪乱が1 m 50cm以上の深さに及んでおり、遺構の保存状態が極めて悪い部分がある。

V層以下は深掘りの結果では、V層上面から3m以上にわたって砂質シルト〜砂が堆積しており、遺構・遺物は検出されなかった。



東壁セクション(D-2区)

層位	色	調	土 性	備考
Ι.	祕	(10 Y R 1/4)	シルト	耕作土、遺物を少量含む。
Π	暗 褐	(10 Y R ¾)	シルト	(旧)耕作土、炭化物を若干含む。
Ш	黒 裀	(10 Y R ⅔)	シルト	炭化物を若干含む。
IV	にぶい黄樹	(10 Y R 1/3)	シルト	炭化物を若干含む。
V	黄 裫	(10 Y R 5/8)	砂質シルト	地山

第6図 基本層位模式図

Ⅵ. 発見遺構と出土遺物

今回の調査で検出された遺構は、住居跡 4 軒、方形周溝墓 1 基、焼土遺構 1 基、溝跡 8 条、小溝10条、小溝状遺構、土壙16基、ピット多数がある。遺構は全て基本層位 V 層上面で確認された。調査区内は、かなりの深度まで耕作のための天地返しが行なわれており、完全に削平されてしまった遺構があったことが考えられる。

遺物は整理用平箱にして40箱程の出土量である。弥生土器、土師器、須恵器、陶器、磁器、 硯、瓦、石製品、金属製品、木製品、獣骨、植物遺体などである。

これらの遺構及び出土遺物は、重複関係・出土遺物などから次のⅠ~Ⅲ期に分けられる。 土壙を除いて、それぞれの時期毎に記述し、土壙は一括して記述する。なお、調査中小溝 6 号 としたものは、耕作土中から掘り込まれたものであることが確認されたため、記述から除いた。

I期……弥生時代

V期……平安時代後半

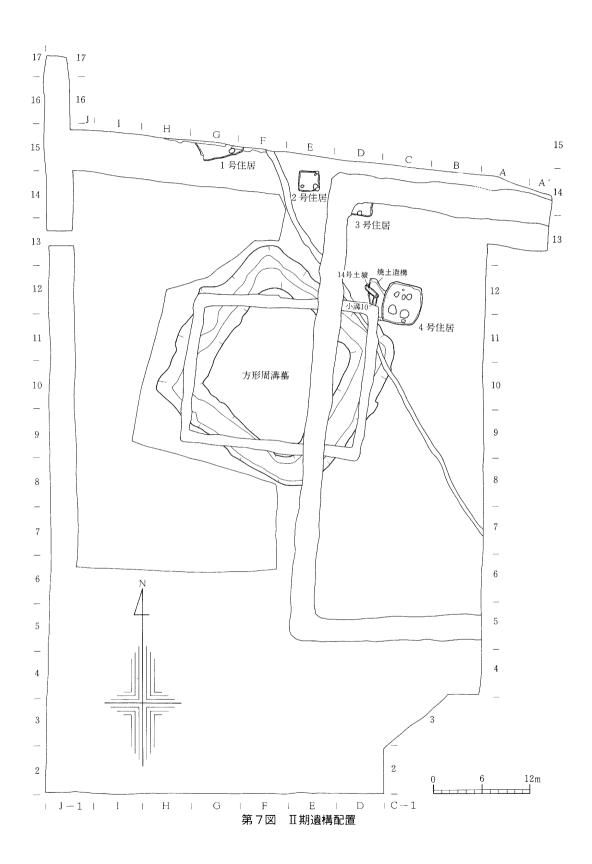
Ⅱ期……古墳時代前期

VI期·······鎌倉時代~南北朝時代

Ⅲ期……古墳時代後期~平安時代前期

₩期……南北朝時代~室町時代前半

Ⅳ期……平安時代前半



T期

今回の調査では遺構は検出されなかった。僅かに弥生土器片が36点出土したのみである。弥生土器については後述する。

Ⅱ期

今回の調査で検出された遺構のうち、最も古い時期のものである。住居跡 4 軒、方形周溝墓 1 基、焼土遺構 1 基、土壙 1 基、小溝 1 条がある。

1号住居跡

遺構の確認: 調査区北側、F・G-15グリットで住居跡南半部が確認された。住居跡北半部 は調査区外へ延びているが、作物栽培中のため拡張はできなかった。

遺構の重複:耕作による攪乱が数条にわたって床面近く、あるいは床面下まで及んでいる。

平面形・規模: 正確な平面形・規模は不明である。調査を行なった部分では南壁と西壁の一部が検出され、東西軸が5.0 m程である。南北軸は不明であるが、検出部分の形状から、平面形は隅丸の方形を基調としたものであると思われる。南北軸の方向はN−30℃Wである。

堆積土: 堆積土は残存状況が悪く1層である。

壁: V層を直接壁としている。壁高は最高残存部分で20cm程を計る。西壁の床面からの 立ち上がりはゆるやかである。

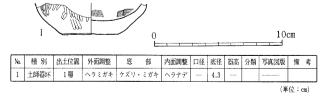
床面 : 住居跡掘り方埋土上面を床としている。堅くしまっている部分もみられるが全体的に柔らかい。

周溝 : 調査部分では検出されなかった。

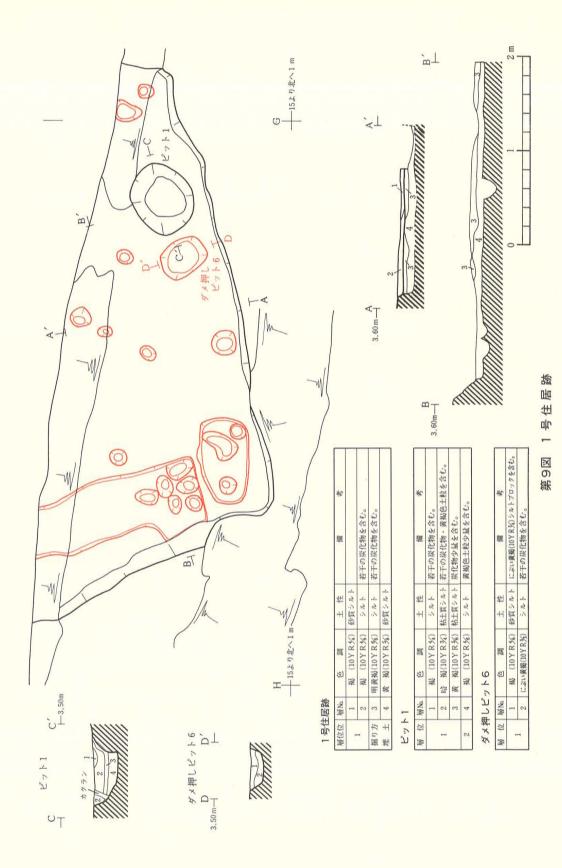
柱穴 : 調査部分床面ではピットが1個しか検出されず、位置も壁際であり、柱穴とは考えられず、住居掘り方埋土中、床面から多数のピットが検出されたが、全て柱穴と考えられない。 炉・カマド: 調査部分では検出されなかった。

遺物の出土状況: 調査部分が狭く、また攪乱が激しいため、住居内堆積土、床面からの遺物の出土は少ない。

出土遺物: 1層下部より土師器坏底部の実測資料1点の他、壺口縁部、甕口縁部・体部、丹塗り土器の破片がある。



第8図 1号住居跡出土遺物



2号住居跡

遺構の確認: 調査区北側、 $E-14\cdot15$ グリットで確認された。

遺構の重複:9個のピットと重複関係にあり、全てのピットに切られており、それらより古い。

平面形々規模: 東西軸2.6m×南北軸2.6mのやや台形に近い隅丸方形を呈する。南北軸の方向はN-3°-Eである。

堆積土: 堆積土は削平のため、残存状況は悪い。部分的に変化はあるが基本的に1層である。 自然堆積であると思われる。層No.4・5焼土・炭化物が含まれている。 基本的に1層である。

壁 : V層を直接壁としている。壁高は西壁の最高残存部分で6cm程度である。床面から 急角度で立ち上がる。

床面 : 住居東側及び西側で掘り方埋土上面を床とし、中央部分はV層を直接床ととしている。 床面は全体的に堅いが、特に中央部~北西部は堅くしまっている。東側に向かってやや傾斜し ているが、削平のためとも考えられる。

周溝 : 検出されなかった。

柱穴 : 床面で検出されたピットは2個あるが、柱痕跡も認められず、柱穴であるかは不明である。

炉・カマド: 住居北側中央部に焼土及び炭化物が東西0.6m×南北0.8m程の不正楕円形の範囲で検出された。床面はあまり火熱を受けた痕跡は見られなかった。

遺物出土状況: 堆積土中よりの遺物の出土はない。床面から若干の出土が見られる。弥生土 器片が含まれているが床面まで削平が及んでおり、そのために混入したものであると思われる。

出土遺物: 実測資料はない。ロクロ不使用の土師器片2点、不明遺物1点のみである。

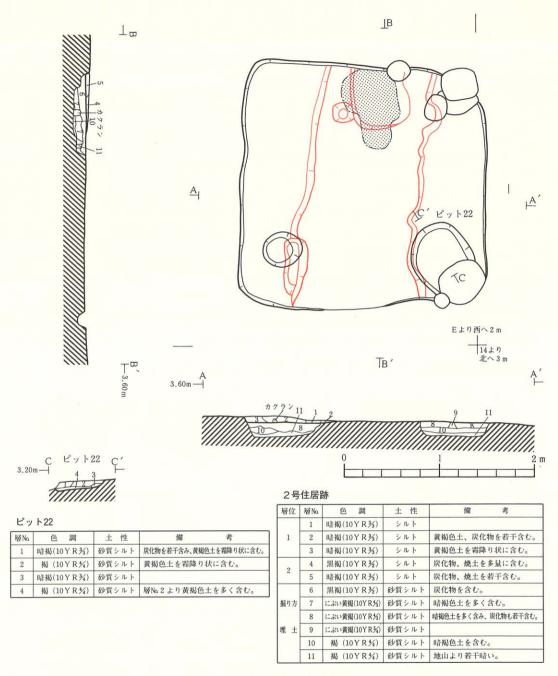
3号住居跡

遺構の確認: 調査区北寄り、D-4グリットで確認した。

遺構の重複: 1号溝と重複関係にあり、1号溝に切られていることにより、1号溝より古い。 平面形・規模: 正確な正面形・規模は不明である。南壁、東壁の一部が検出されているのみ である。残存部分で東西軸2.5m×南北軸1.75mを計る。残存部の形状から平面形は、隅丸の方 形を基調としたものであると思われる。南北軸の方向はN-14-Eである。

堆積土 : 住居跡中央部分は表土排除の際に誤って削平してしまい、壁周辺のみにしか残存しなかった。2層に大別される。いずれも自然堆積であると思われる。1.層は住居跡全面を覆っていたものと思われる。2層は床面に貼り付いた状態で部分的に検出された。

壁 : V層を直接壁としている。壁高は南東隅付近の最高残存部分で15cm程を計る。床面



第10図 2号住居跡

からの立ち上がりはかなり急角度である。

床面 : 住居床面のほとんど全面に貼り床がされていたと考えられる。中央部は削平のため 貼り床は検出できなかった。東南隅から東壁際は、掘り方埋土上面を床としている。貼り床部 分は堅くしまっているが他の部分は柔かい。

周溝 : 残存部分では検出されなかった。

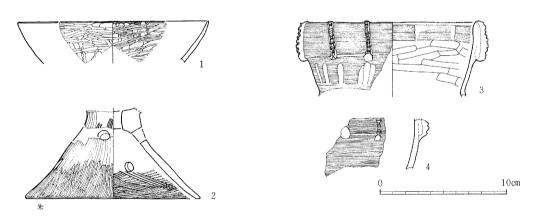
柱穴: 床面から検出されたピットは8個ある。このうち柱穴と考えられるのは、Pit 2とPit 7である。その他のピットは柱穴とは考え難い。

炉・カマド: 残存部分では検出されなかった。

その他の施設: ピット1は、堆積土Na.8が壁に貼り付けられた状態で検出されている。貯蔵 穴などの機能を持っていた可能性がある。

遺物出土状況: 削平が激しく、堆積土中の遺物量は少ない。床面から器台、棒状浮文の施された壺口縁部などの一括遺物がある。

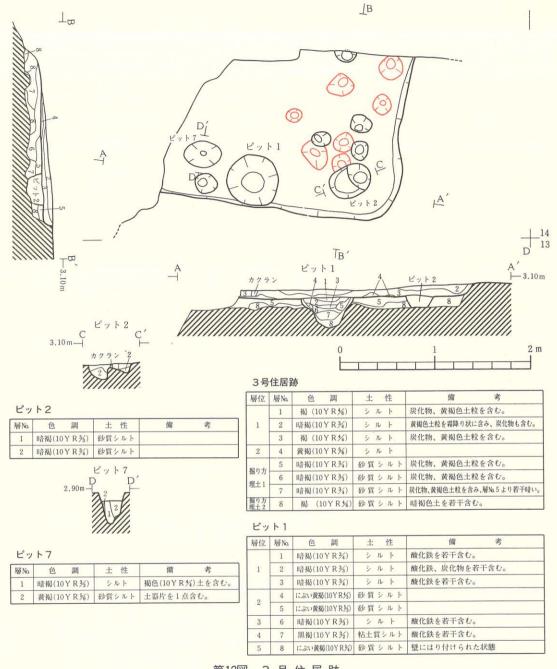
出土遺物: 土器は全て土師器である。床面より、器台脚部1点、棒状浮文の施された壺口縁部1点の実測資料の他に、壺あるいは甕の体部片、軽石が出土し、ピットより、高坏と考えられる口縁部実測資料1点の他、甕の体部片、堆積土より甕の体部片が出土している。



No.	種別	出土位置	外面調整	底部	内面調整	口径	底 径	器學	分類	写真図版	備考
1	土師器高坏?	ピットコ	ミガキ・ナデ		横ナデ・ナデ・ミガキ	(15.0)			11 ?		
2	土師器器台	床 面	刷毛目・ミガキ		刷毛目		13.8*			57-8	円窓2段6個有
3	土師器 壺	床 面	横ナデ・ミガキ刻目のある棒状浮文		ヘラナデ・ナデ	13.4			Пb	58-2	複合口縁
4	土師器 壺	不 明	横ナデ・刻目のある棒状浮文		ナデ					58 2	3 と同一個体

※器台は裾部径 (単位:cm)

第11図 3号住居跡出土遺物



第12図 3号住居跡

4号住居跡

遺構の確認: 調査区中央やや東寄り、C・D-11・12グリットで確認した。

遺構の重複: 2個のピット及び焼土遺構と重複関係にあり、2個のピットに切られているこ

とによりピットより古く、焼土遺構を切っていることにより本住居跡が新しい。

平面形・規模: 東西軸4.8m ×南北軸5.2m のやや東側に張り出した隅丸方形を呈する。南北軸の方向はN-13℃ E である。

堆積土 : 5層に大別される。レンズ状の堆積状況を示し、いずれも自然堆積であると思われる。1層は住居跡中央部に分布している。2層は住居跡北側及び南側の床面上に分布し、3層は東側から西側にかけて分布している。4層は壁の崩壊土であると思われる。5層は、住居跡東側の床面上に貼り付いた状態で検出された。層No15は炭化物の層である。

壁 : V層を直接壁としている。壁高は、西壁及び北壁の最高残存部分で30cm程を計る。 床面からの立ち上がりは、かなり急角度であり、垂直に近い部分もある。

床面 : 住居の大部分は掘り方埋土上面を床面としているが、南壁際及び東壁際では V 層を 床面としている。床面には若干の凸凹がみられるが、中央部が壁際よりやや高くなっている。 中央部は堅くしまっている。

周溝 : 検出されなかった。

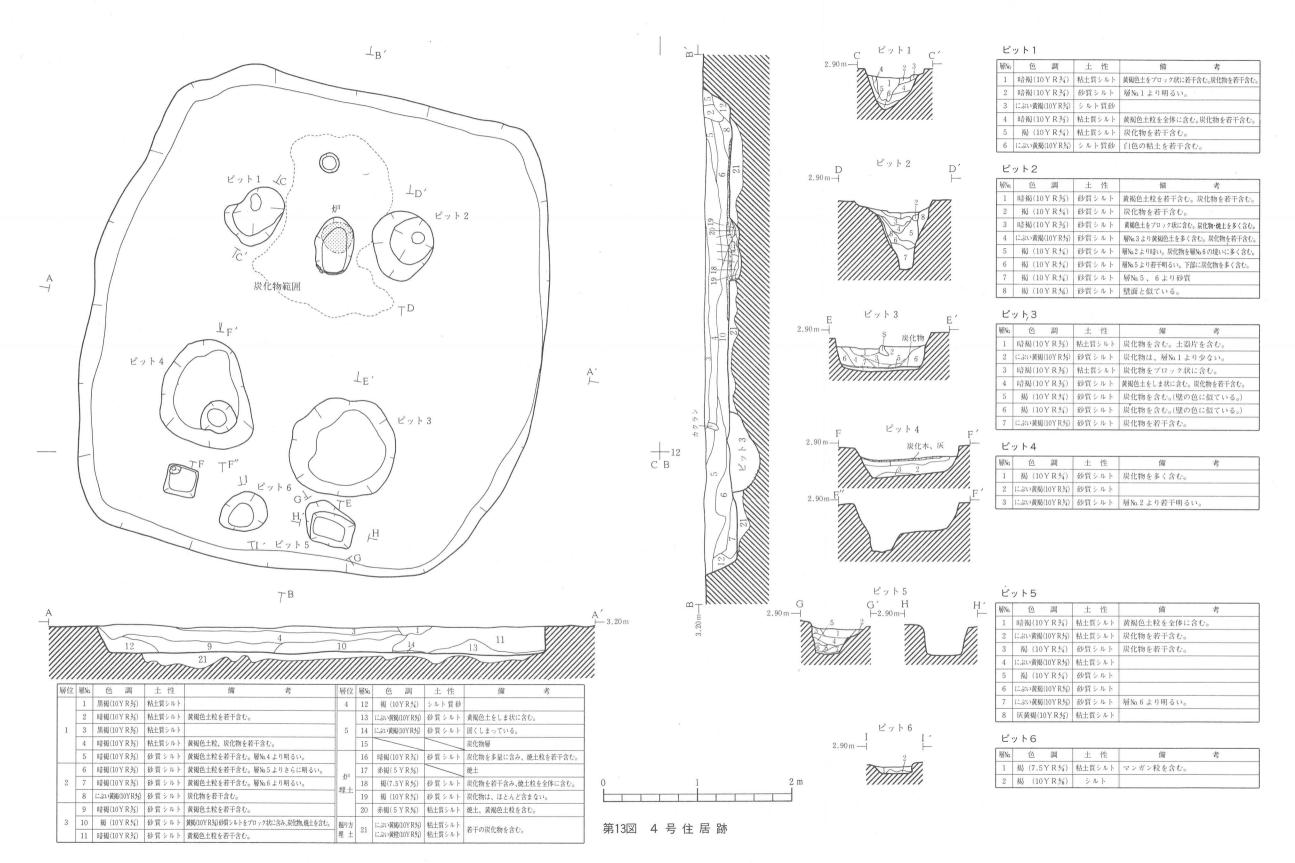
柱穴: 床面から検出されたピットは8個ある。このうちピットの規模、深さ等から、ピット 1、ピット2は柱穴と考えられる。これらは住居の対角線上にあり、これらに対応する部分には ピット3、ピット4があり、配置から柱穴とも考えられるが、埋土の状態や遺物の出土状況から柱 穴とは考え難く、南壁際に並ぶピットが柱穴になる可能性がある。

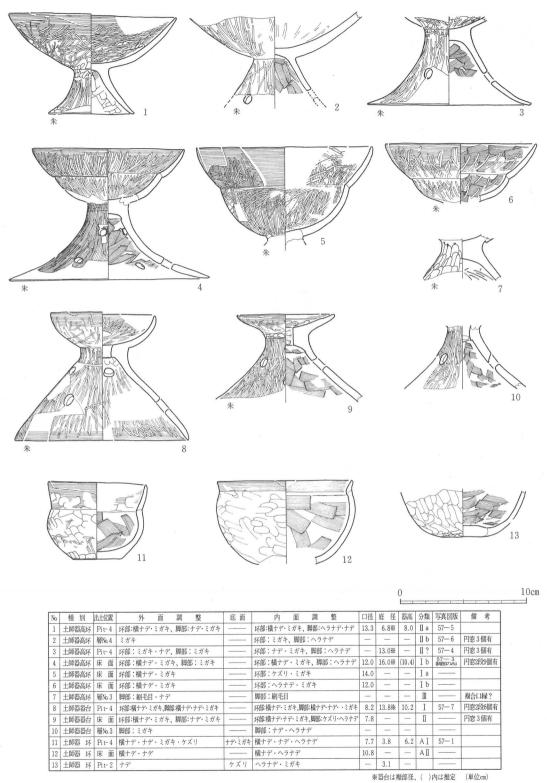
炉・カマド: 住居中央部やや北寄り、ピット1、ピット2の間で炉が検出された。平面形態・規模は、長軸0.65m×短軸0.40mの南北に長い楕円形を呈する。炉南壁では、土師器の壺の体部片を埋設して炉壁としていた。堆積土は焼土が炉の北側にのみ検出されており、他の堆積土中には炭化物、焼土粒が含まれている。底面は中央部がやや盛り上がっている。壁は10cm程の高さで、底面からなだらかに立ち上がっており、断面形は皿状を呈している。底面や壁面はほとんど火熱を受けた痕跡は認められない。

その他の施設: 床面で検出されたピット3では、底面を覆う層の上面に、炭化物の層が検出され、堆積土中にも多量の炭化物が含まれている。また、ピット4においては、堆積土中位に炭化物層が検出され、ピット確認面から炭化物層上面にかけて多数の土器が出土しており、貯蔵穴的な機能を持ったピットである可能性がある。

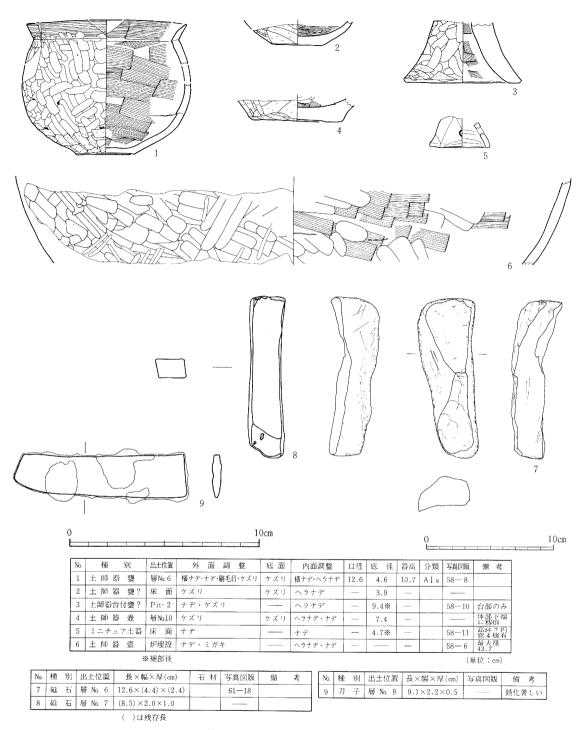
遺物出土状況: 住居跡確認面で一括遺物が出土し、住居跡堆積土 2 層・ 3 層・ 5 層から多量の土器片が出土している。また、床面及びピット2、ピット4から一括遺物がまとまって出土している。

出土遺物: 出土した土器は全て土師器である。床面から高坏3点、器台1点、坏1点、甕1点、ミニチュア土器1点、ピット2から坏1点、台付甕の台部1点、ピット4から高坏1点、器台 1点、坏1点の実測資料が出土している。また、堆積土中から高坏2点、器台・甕・壺各1点、





第14図 4号住居跡出土遺物 I



第15図 4号住居跡出土遺物 Ⅱ

砥石 2 点、刀子 1 点、炉埋設壺 1 点の実測資料が出土している。その他に高坏、器台、甕、壺の破片、軽石が出土している。

方形周溝墓 (6号溝)

遺構の確認: 調査区のほぼ中央部、 $C\sim H-8\sim 12$ グリットのV層上面で確認した。

遺構の重複: 1号溝、5号溝、小溝2と重複する。いずれも本遺構を切っている。また、耕作によってかなり攪乱されている。

平面形・規模: 平面形態は、長軸約26m、短軸約24.5mの隅丸の方形を呈する。周溝は途切れることなく全周し、台状部が形成されている。周溝西辺の方向は、N−45⁻Wである。

周溝の形態・規模: 周溝部の各辺は、ほぼ直線的である。周溝の幅は、東辺で $5\sim6\,\mathrm{m}$ 、西辺で $4\sim6\,\mathrm{m}$ 、南辺では $3.5\sim5\,\mathrm{m}$ 、北辺で $4\,\mathrm{m}$ 程を計り、東辺・西辺に比して南辺・北辺の幅が若干狭くなっている。底面幅は、北辺で $0.75\,\mathrm{m}$ と最も狭く、東辺及び南辺の最も広い部分で $2.5\,\mathrm{m}$ を計る。底面はほぼ平坦であり、大きな凸凹はみられない。

周溝の深さは、耕作による攪乱のため、正確に把握するのは困難であるが、比較的残存状況の良い北辺で1.2mを計り、東辺の最も広い部分では0.8mの深さを計る。

壁は底面からゆるやかに立ち上がっており、断面形は皿状を呈している。北辺及び西辺の北側では壁の角度がやや急角度になっている。

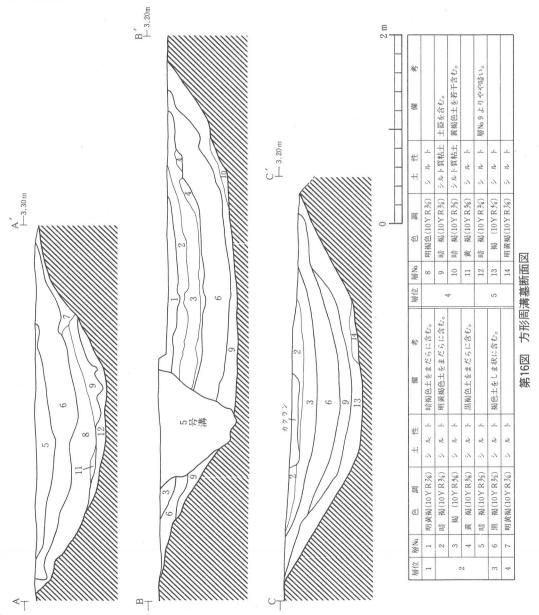
周溝内堆積土: 周溝内堆積土は、5層に大別される。1層は東辺にのみ確認されているが、 2層以下は各層とも各辺にゆるやかなレンズ状に堆積している。埋まり方は各辺によって若干 異なっているが大きな違いはみられない。3層の上面において古墳時代後期のものと考えられ る須恵器提瓶等が出土しており、上述の時期には中程まで埋まりかかっていたと思われる。5 層面下部は地山崩壊土であると思われる。

台状部 : 平面形態は長軸約17m、短軸約15mを計る。西辺が他の辺よりやや長く、菱形に近い形態を呈している。耕作による攪乱が著しく、台状部上面からは盛土の痕跡や、土壙などの施設は検出されなかった。

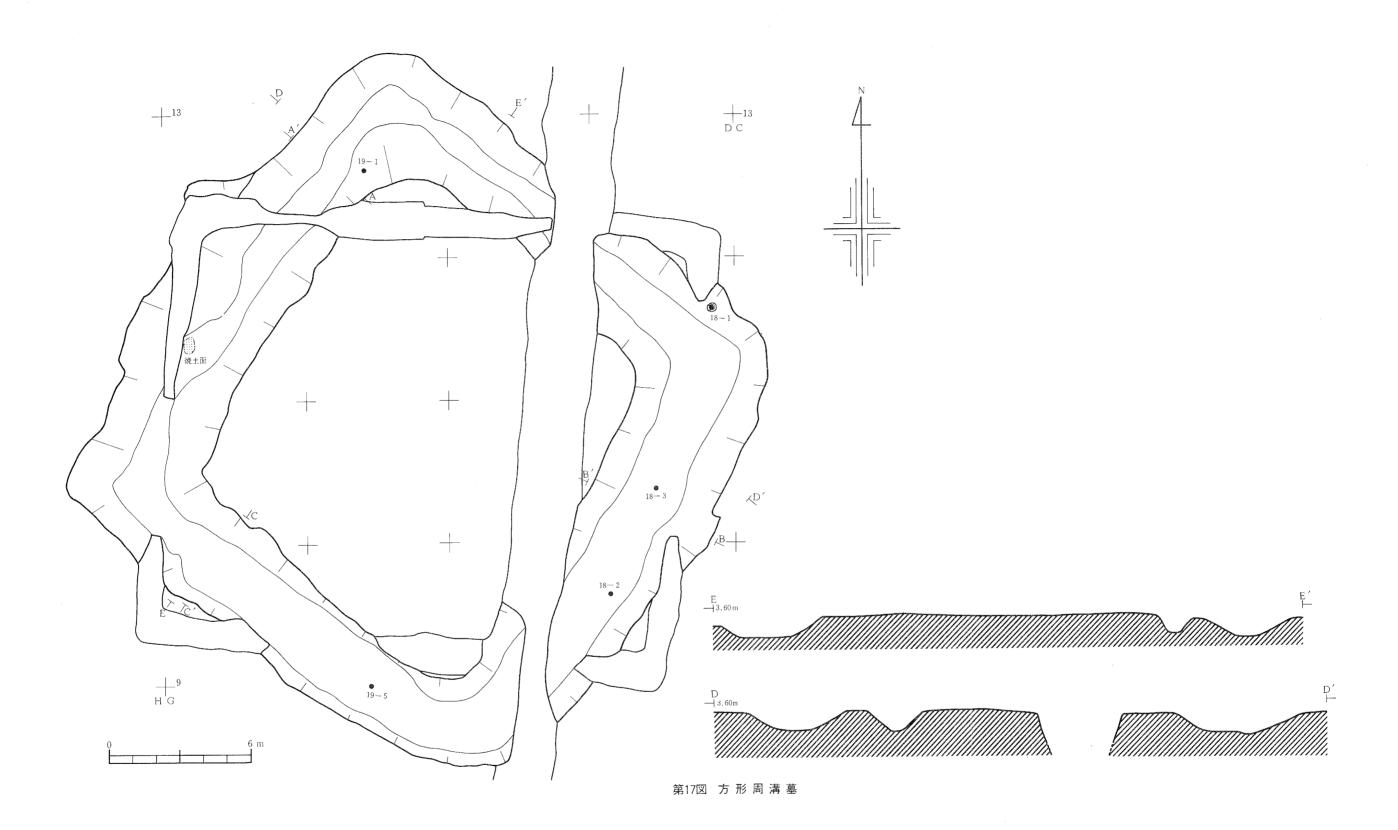
遺構に伴う施設: 周溝の西辺南寄りの底面において、焼土面が検出された。0.5m×0.7mの 楕円形を呈している。焼土の厚さは2cm程しか残存せず、炭化物以外の遺物は検出されなかった。また、特異な施設として、北辺の東コーナー寄りの外側壁面の中位において土壙が検出された。この土壙は土器を据えるためのものであると考えられ、土壙内に土師器壺が壁面に密着するように正立した形で出土している。壺の口縁部が内側に重なり合った状態で検出され、体部内は空洞となっていた。土壙は壺とほぼ同じ規模である。

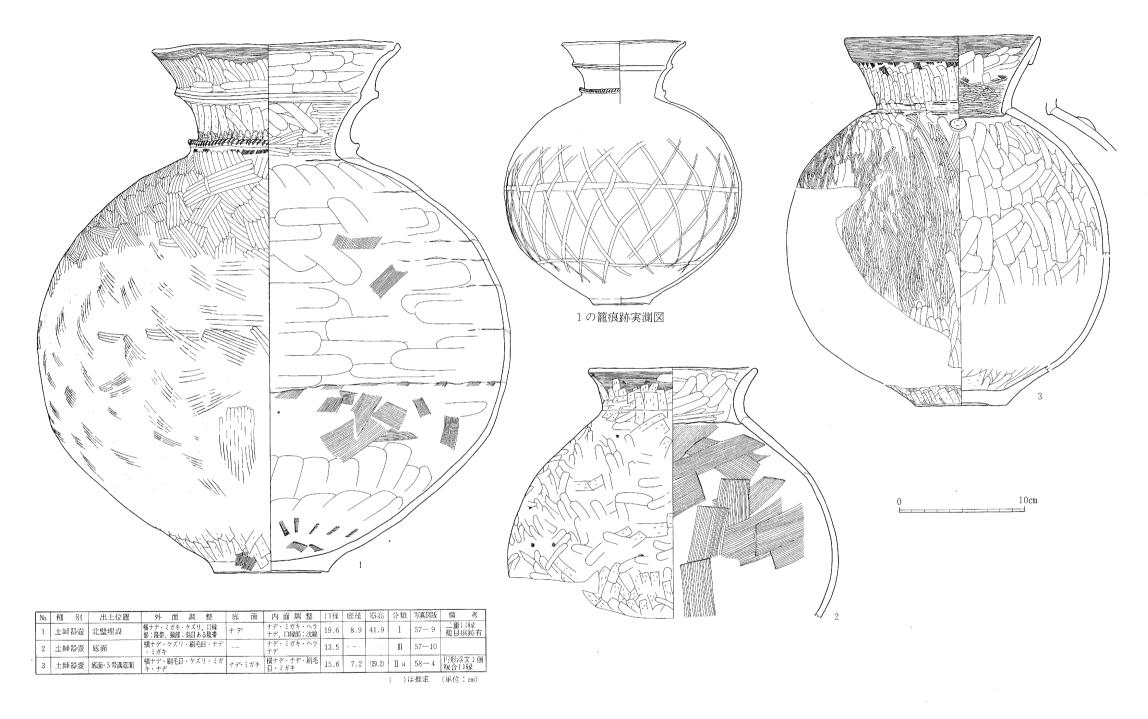
遺物の出土状況: 3層(層№6)上面から前述の須恵器が出土している。以下の堆積土及び 周溝底面・台状部から出土した遺物は全て土師器である。周溝堆積土から壺、甕、高坏などが 出土し、底面から壺が出土している。台状部中央付近からは、壺、甕、高坏などの小破片が多 量にまとまって出土しており、何らかの施設が耕作による攪乱を受けたため、遺構は残存せず 遺物のみが残存した可能性がある。また、周溝壁面の土壙から大形の壺が出土しており、周溝 底面出土の土器とともに、遺構の年代決定資料になる。

出土遺物: 須恵器と土師器が多い。須恵器は、提瓶と丸底の壺と考えられる底部が出土している。土師器では、壺、甕、高坏がある。壺には大形、中形、小形のものがあり、甕は小形のもののみである。また、壺には頸部に刻目の施された隆帯をもつ二重口縁のもの、円形浮文の施された複合口縁のものがある。底部に穿孔された土器はみられない。また、2層中から鉄鏃が1点出土している。

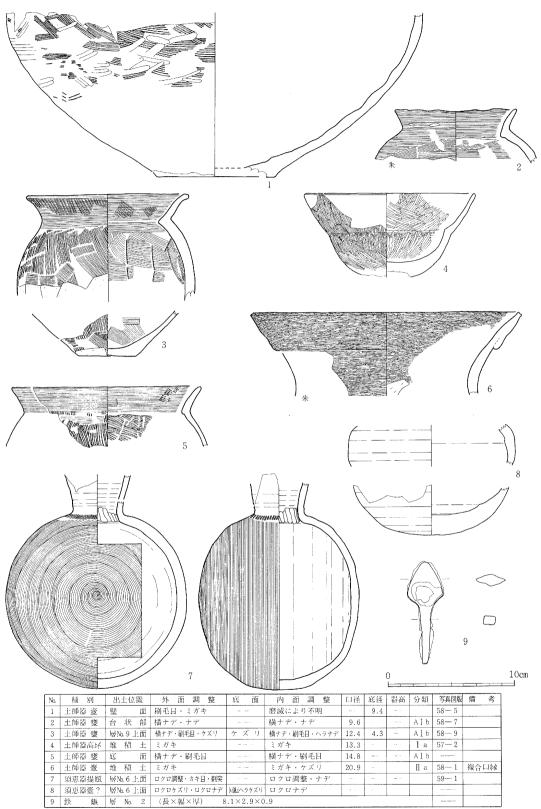


24





第18図 方形周溝墓出土遺物 [



第19図 方形周溝墓出土遺物 Ⅱ

焼土遺構

遺構の確認: 調査区ほぼ中央部、C-11・12グリットで確認された。

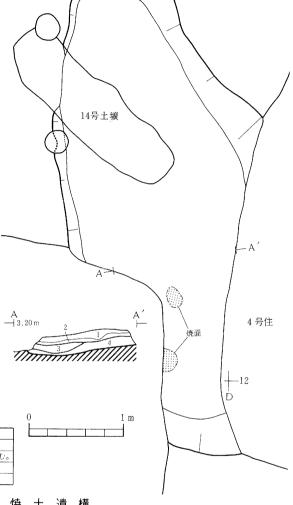
遺構の重複: 4号住居跡・14号土壙・ 小溝10号・5号溝・ピットと重複関係に あり、全ての遺構に切られており、本遺 構が最も古い。

形態・規模: 遺構の重複により正確な 形態・規模は不明であるが、台形を基調 とした平面形を呈すると考えられる。

堆積土 : 4層に分けられる。層№3 には多量の焼土が含まれている。

壁・底面の状況: 壁高は、南壁の最高 残存部分で17cm程を計り、底面からゆる やかに立ち上がる。底面は、ほぼ平坦で あり、数ヶ所に焼け面が認められる。

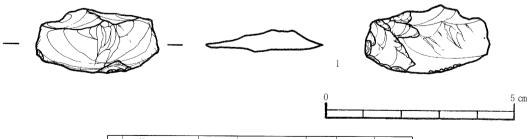
遺物の出土状況: 底面より剝片が1点 出土しているのみである。



焼土遺構

層位	層Na	色 調	土性	備考
,	1	视 (10 Y R ⅓)	シルト	焼土を少量含む。
1	2	视 (7.5YR%)	シルト	焼土、炭化物を少量含む。
2	3	明赤褐(5 Y R %)	シルト	焼土を多量に含む。
3	4	黄 褐(10YR%)	シルト	炭化物粒を含む。

第20図 焼 土 遺 構



No.	種	別	出土	地点	長×幅×厚(cm)	石	材	写真図版	備	考
1	微細剝離痕	ある刹片	底	面	3.15×1.7×0.55	水	Ha Ha	61-13		

第21図 焼土遺構出土遺物

小溝10号

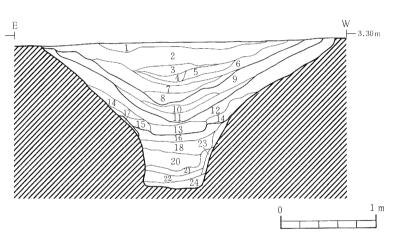
D-12グリット、焼土遺構堆積土上面で検出された。5 号溝、14号土壙、焼土遺構と重複関係にあり、5 号溝、14号土壙より古く、焼土遺構より新しい。上幅は $40\sim50\,\mathrm{cm}$ 、底面幅は $20\sim35\,\mathrm{cm}$ 、深さは $15\sim21\,\mathrm{cm}$ である。断面形は、ゆるやかな「U」字形を呈している。堆積土は単層であり、 $10\,\mathrm{Y}\,\mathrm{R}\,^{1}\!\!\!\!/\, 2$ ・にぶい黄褐色シルトである。遺物の出土はない。

Ⅲ期

古墳時代後期~平安時代前期と考えられるものである。溝跡1条、小溝跡4条、小溝状遺構 群がある。

4号溝

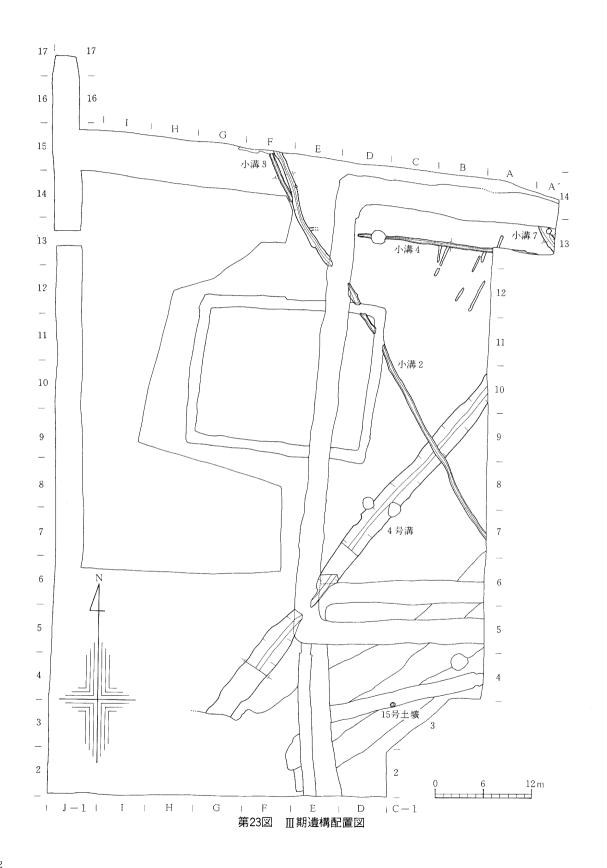
B−10グリットからG - 3 グリットにかけて調 査区を北東から南西に斜 めに延びている。方向は、 N-43⁻Eである。小溝 2 ・ 1 号溝・ 2 号溝・ 3 号溝・5号土壙・6号土 塘と重複関係にあり、全 てに切られていることに より、本遺構が最も古い。 上幅は、2.3m~3.2m、 底面幅は45~65cm、深さ は1.5 m程を計る。底面 のレベルはほぼ同一であ り、傾斜は認められない。 断面形は基本的には逆台 形を呈しているが、壁が 底面から約50cm程まで、 ほぼ垂直に立ち上がり、 そこから上端まで広がり ながら立ち上がっている



4号溝

層位	層No	色 調	土性	備考
	1	暗 楊(10YR¾)	シルト	褐(10YR%)粘土質シルトを精降り状に含む。
	2	暗 褐(10YR¾)	シルト	酸化鉄、炭化物を含む。
	3	黒 祝(10 Y R ⅔)	シルト	黄褐色土粒、炭化物を含む。
1	4	にぶい黄椒(10YR%) にぶい黄松(10YR%)	シルト	炭化物を若干含む。
1	5	にぶい黄褐(10YR%)	シルト	炭化物を若干含む。
	6	初 (10 Y R ¼)	シルト	黄褐色土粒を若干含む。
	7	にぶい黄褐(10YR髯)	シルト	炭化物、マンガン、黄褐色土粒を含む。
	8	オリーブ樹(2.5Y%)	砂質シルト	炭化物を多量に層状に含む。
	9	暗 褐(10 Y R ¾)	シルト	黄褐色土粒、炭化物を層状に含む。
2	10	黒 褐(2.5Y¾)	粘土質シルト	黄楊(2.5Y%)粘土質シルトプロックを含む。
	11	暗 枞(7.5 Y R ¾)	粘土質シルト、	多量の炭化物、マンガンを含む。
	12	灰 褐(7.5YR½)	シルト	尿黄褐(10Y R½) 砂質シルトプロックを含む。
3	13	枞 (10 Y R 1/6)	粗砂	黄褐(2.5Y%)粘土質シルト層
1 3	14	暗 級(10 Y R 系) にぶい黄枫(10 Y R 系)	粘土質シルト	
	15	灰 黄 褐(10YR%)	シルト	酸化鉄、マンガンを含む。
4	16	暗 灰 黄 (2.5 Y ½)	シルト	マンガンを含む。
	17	黄 松(10YR%)	シルト	マンガンを含む。
İ	18	暗 裼(10YR¾)	粘土質シルト	黄褐(2.5Y%)粗砂ブロックを含む。
	19	黄 枞 (2.5 Y ¾)	粘土質シルト	マンガンを含む。
5	20	養 数 (5:5 4 美)	砂質シルト	酸化鉄、マンガンを含む。
1	21	オリーブ禍 (2.5Y%)	粘土質シルト	酸化鉄、マンガン、炭化物を含む。
	22	黒 枞(10YR¾)	シルト	酸化鉄、マンガンを含む。
	23	黄 祸(10YR%)	シルト	マンガン、酸化鉄を含む。
	24	型 :: い 数(10 Y R 系)	整質シルト	マンガン、酸化鉄を含む。

第22図 4号溝断面



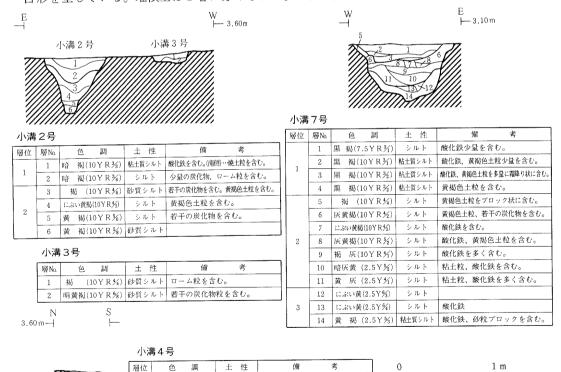
部分もみられる。堆積土は、4層に大別される。遺物の出土はみられなかった。

小溝2号

F-15グリットからB-7グリットにかけて確認され、調査区北側中央部から南東方向に斜めに延びている。方向は、N-30ーWである。方形周溝墓・1 号溝・4 号溝・5 号溝・小溝 3 号・小溝 4 号と重複関係にあり、1 号溝、5 号溝に切られ、他の遺構を切っていることから、本遺構は、1 号溝・5 号溝より古く、他の遺構より新しい。上幅は45~100cm、底面幅は10~35 cm、深さは30~65cmで、底面のレベルはほぼ同一である。上面のレベルは、耕作等のため、南に向かってやや傾斜している。断面形は、北側では「V」字形を呈し、南側では「U」字形を呈する。堆積土は、6 層に分けられる。出土遺物は、土師器の摩小片がみられるのみである。

小溝3号

 $F-14\cdot 15$ グリットで確認された。小溝 2と重複関係にあり、本遺構を切っていることから、本遺構が古い。上幅は $40\sim 50$ cm、底面幅は $30\sim 35$ cm、深さは $10\sim 15$ cmを呈する。断面形は、逆台形を呈している。堆積土は 2 層に分けられる。遺物の出土はなかった。



第24図 小溝2・3・4・7号断面

视 (10YR%)

シルト

炭化物粒, 黄褐色土粒を含む。

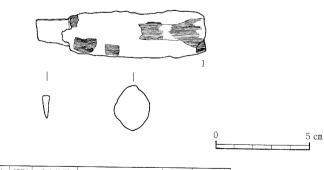
小溝4号

A'-13グリットからE-13グリットにかけて、調査区を東西に横断するように延びている。 方向は、 $W-5^\circ-N$ である。 1 号溝・ 3 号土壙・小溝 2 号・小溝状遺構群と重複関係にあり、小溝状遺構群を切り、他の遺構に切られていることから、本遺構は小溝状遺構群より新しく、他の遺構より新しい。上幅 $30\sim50$ cm、底面幅 $15\sim40$ cm、深さ $3\sim10$ cm程で、北壁が削平のために残存状況がよくない。断面形は、ゆるやかな「U」字形を呈している。堆積土は単層である。遺物の出土はない。

小溝 7号

A′—13グリットで確認された。方向はN−40°—Wである。1号溝・12号土壙・ピットと重複関係にあり、全ての遺構に切られており、本遺構が最も古い。1号溝と調査区東壁の間で約3mしか検出されなかった。上幅約110 cm、底面幅30~50cm、深さ30~65cm程を計る。断面形は「U」字形を呈している。底面は、北側から南側に向かって、三段の段が形成されており、二段目の底面は大きく凹んでいる。堆積土は3層に大別される。出土遺物は、土師器の摩小片が数点のみである。

小溝状遺構群



	No.	種別	出土位置	長×幅×厚(cm)	写真図版	備考
	1 7	刀子	小溝状遺構	(刈部) -×1.4×0.35	62-3	柄木質部
l				(柄) -×2.4×1.85		残存

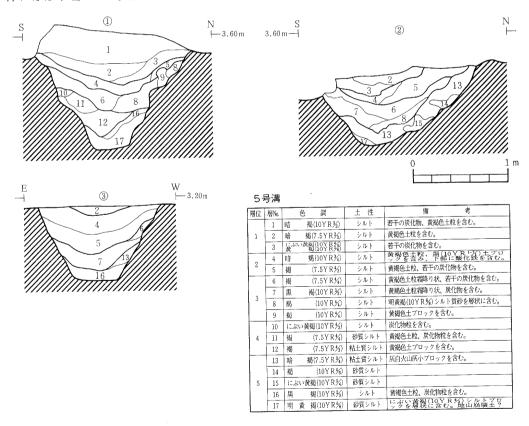
第25図 小溝状遺構群出土遺物

₩期

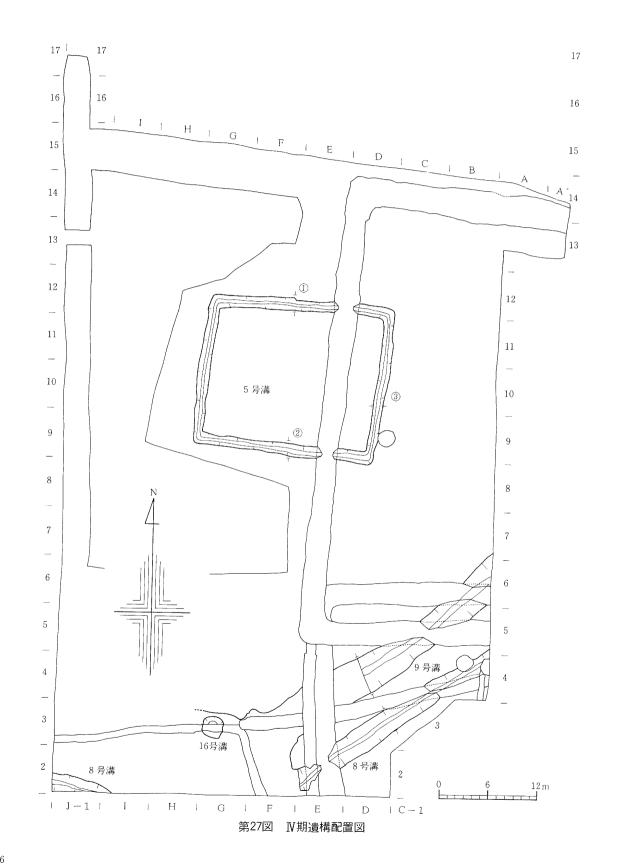
平安時代前半と考えられるものである。遺構内堆積土に灰白色火山灰が含まれている。溝跡3 条、土壙1基がある。

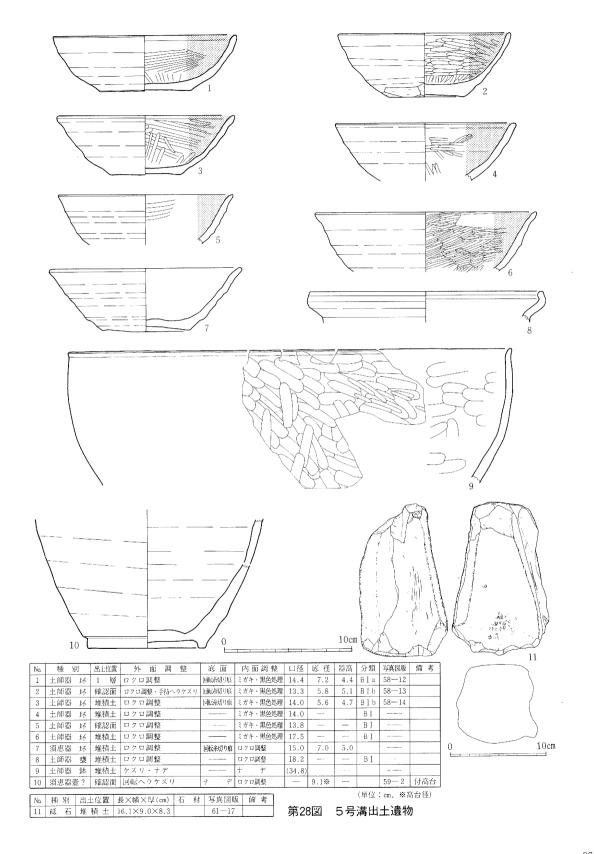
5号溝(方形遺構)

 $D\sim H\cdot 18\sim 12$ グリットで検出された。方形周溝墓・焼土遺構・1号溝・4号土壙・小溝2 小溝10と重複関係にあり、1号溝・4号土壙に切られ、他の遺構を切っていることから、本遺構は、1号溝・4号土壙より古く、他の遺構より新しい。また、耕作によってかなり攪乱を受けている。東西軸×南北軸が約22.8m×約18.8mの方形に巡る平面形を呈する。北・南辺の方向は、ほぼ $N-90^{\circ}$ Eである。各辺の溝は直線的である。溝の上幅は、 $1.1\sim 1.7$ mで北辺の幅が他の辺に比べて広くなっている。底面の幅は $0.25\sim 0.5$ mで西辺が狭く、北辺がやや広くなっている。溝の深さは $40\sim 85$ cmを計る。壁は一部を除いて底面から急角度で立ち上がっており、断面形はほぼ逆台形を呈する。底面のレベルは、南東コーナー付近がやや低くなっているが、全体にほぼ平坦である。溝に囲まれた内部には、溝と関連した遺構は検出されなかった。堆積土



第26図 5号溝断面



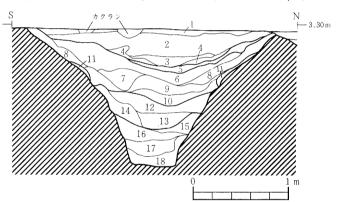


は、5層に大別され、層№13中に灰白火山灰が含まれている。遺物は、堆積土各層から出土している。土師器坏7点・須恵器坏1点・土師器饔1点・土師器鉢1点・須恵器壺1点・砥石1点の実測資料が出土している。その他には、土師器片・須恵器片が出土しているが、特に土師器片が圧倒的に多い。

8号溝

 $B-4\cdot 5$ グリットから J-2 グリットにかけて検出され、調査区外へ延びている。 2 号溝 3 号溝 $\cdot 7$ 号溝 $\cdot 9$ 号溝 $\cdot 10$ 号土擴 $\cdot 11$ 号土擴 $\cdot 15$ 号土擴 $\cdot 15$ 号土擴 $\cdot 15$ 号土擴 $\cdot 15$ 号土擴 $\cdot 16$ 号 一次 16 号

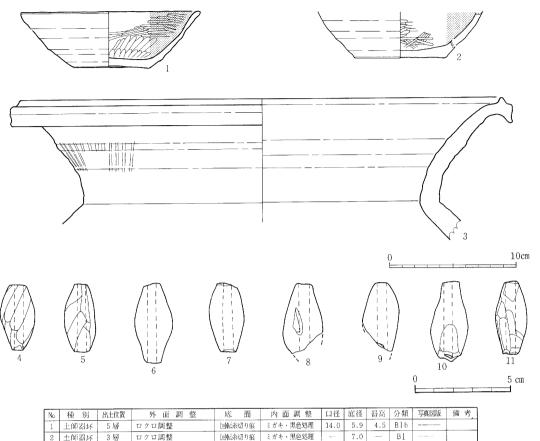
るやかなカーブをえがき、F~Iグリットでは調査区南側外へ延び、調査区南西隅で再び検出される。上幅は約3m、底面幅40~50cm、深さは110~140cmを計る。断面形は逆台形を呈している。底面のレベルは、D一3グリット中央部付近で若干高くなっており、調査区東壁方向及び西方に向かってゆるやかな傾斜が認められる。堆積土は5層に大別され、2層が灰白火山灰層である。出土遺物は、堆積土3層及び4層下部から土師器坏各1点の実測資料が出土し、3層から土錘が8点まとまって出土している。



8号溝

層位	層Na	色 調	土性	備考
	1	₩ (10 Y R 1/4)	シルト	炭化物粒、焼土粒含む。
١,	2	暗 楊(10YR¾)	シルト	炭化物、灰臼火山灰粒を含む。
"	3	黑 裼(10YR¾)	粘土質シルト	炭化物、灰白火山灰粒、黄褐色土粒を含む。
	4	にぶい黄褐(10YR%)	シルト	灰臼火山灰粒を含む。
2	5	灰 黄 (2.5 Y ½)	シルト	火山灰純層、二次堆積
	6	₩ (7.5YR¼)	シルト	黄褐色土粒、灰白火山灰粒を含む。
	7	祝 (7.5 Y R ⅓)	シルト	黄褐色土粒、炭化物粒を含む。
3	8	黄 褐(10YR%)	シルト	炭化物粒を含む。
	9	初 (10 Y R ¾)	シルト	炭化物、酸化鉄、灰臼火山灰粒を含む。
	10	灰黄褐(10YR%)	粘土質シルト	黄褐色土粒、酸化鉄を含む。
4	11	枞 (10 Y R ⅓)	シルト	地山崩壞土?
	12	灰黄褐(10YR%)	シルト質粘土	炭化物粒、灰臼火山灰粒、酸化鉄、マンガン粒を含む。
5	13	黄 灰 (2.5 Y ¾)	シルト質粘土	炭化物粒、酸化鉄、マンガン粒 明黄褐(2.5Y%)粘土プロックを含む。
	14	祝 灰(10YR¾)	シルト質粘土	炭化物粒、マンガン粒 黄褐(10Y R %)粘土を鞘降り状に含む。
	15	暗灰黄(2.5Y½)	シルト質粘土	炭化物粒、酸化鉄、 にぶい黄(2.5Y系)砂質シルトブロックを含む。
6	16	灰黄褐(10YR%)	粘土質シルト	炭化物粒、マンガン粒 にぶい黄(2.5Y%)砂質シルトブロックを含む。
0	17	黄 褐 (2.5 Y ¾)	粘土質シルト	酸化鉄、マンガン粒 にぶい糞(2.5Y躬)粘土質シルトブロックを含む。
	18	黄 褐 (2.5 Y ¾)	粘土	マンガン粒を多く含む。

第29図 8号溝断面



No.	種別	出土位置	外面調整	底 面	内 面 調 整	口径	底径	器高	分類	写真図版	備考
1	土師器环	5 層	ロクロ調整	回転糸切り痕	ミガキ・黒色処理	14.0	5.9	4.5	B]b		
2	土師器坏	3 暦	ロクロ調整	回転糸切り痕	ミガキ・黒色処理		7.0		ΒI		
3	須惠器甕	2 層	ロクロ調整・平行叩き目		ロクロ調整	38.2				59 3	
_										7 181 45	om)

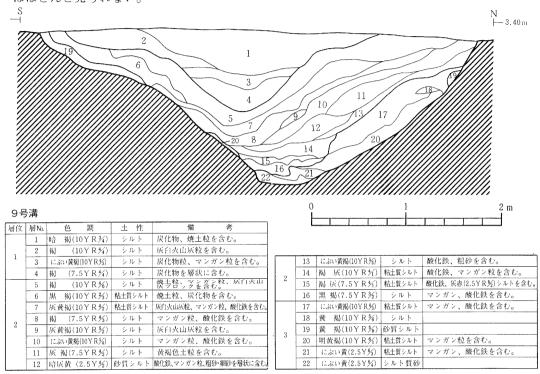
No.	種	别	出土	位置	長×径×孔径(cm)	写真図版
4	1:	錘	3	層	3.4 ×1.8 ×0.45	61-2
5	± :	錘	3	層	3.55×1.6 ×0.4	- 3
6	土	錘	3	層	4.2 ×2.0 ×0.45	 4
7	1:	錘	3	層	3.65×1.8 ×0.5	— 5
8	土	錘	3	層	-· ×2.0 ×0.55	— 6
9	1:	錘	3	層	×1.8 ×0.5	— 7
10	土	錘	3	λή	×1.85×0.4	— 8
11	土	錐	3	層	3.4 ×1.6 ×0.5	— 9

第30図 8号溝出土遺物

9号溝

B-6グリットからH-2・3グリットにかけて検出され、調査区外へ延びている。2号溝 ・3号溝・4号溝・7号溝・8号溝・16号土壙・小溝9号と重複関係にあり、4号溝を切り、 8号溝を除く他の遺構に切られていることから、本遺構は4号溝より新しく、8号溝以外の他 の遺構より古い。8号溝との新旧関係は不明である。B-6グリットからF-3グリットまで 平行している。また、D-4グリット以西については完掘しておらず詳細は不明である。溝の 上幅は $4\sim4.8\,$ m、底面幅は $30\sim90$ cm、深さは $90\sim160$ cmを計る。断面形はゆるやかな「V」

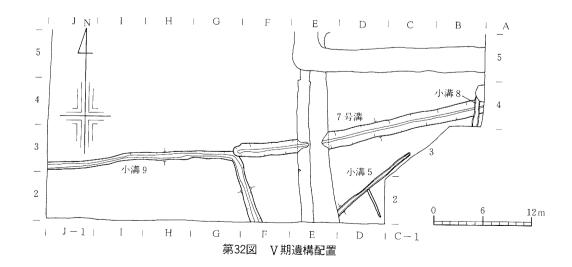
字形を呈しており、壁の中位に段のつく部分も見られる。底面のレベルはほぼ一定しており、 大きな傾斜は見られない。堆積土は3層に大別され、1層・2層中に灰白火山灰を含む。遺物 はほとんど見られない。



第31図 9号溝断面

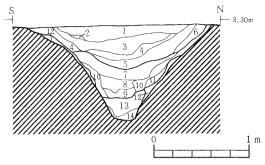
V期

平安時代後半と考えられるものである。溝跡1条、小溝3条、小溝状遺構がある。



7号溝

G-3グリットからB-4グリットにかけて検出され、調査区外へ延びている。 2 号溝・3号溝・8号溝・9号溝・11号土壙・15号土壙・小溝8と重複関係にあり、8 号溝・9号溝・15号土壙を切り、他の遺構に切られていることから、本遺構は、8号溝・9号溝・15号土壙より新しく、他の遺構より古い。G-3グリットから掘り込まれ、N-80°-Eとほぼ東方向に延びている。溝の上幅は、1.6~2.0m、底面幅は15~40cm、深さは90~120cmを計る。断面形は「V」字形に近い逆台形を呈している。底面のレベルは、小さな凸凹はみられるが、ほぼ平坦である。堆積土は3層に大別される。出土遺物はない。



7号溝

層位	層Na	色 調	土 性	備 考
	1	黒 褐(10 Y R ¾) 1	シルト	焼土粒、炭化物粒を含む。
	2	明黄枞(10YR%)	シルト	
١.	3	暗 初(10YR¾)	シルト	・黄褐色土粒を霜降り状に含む。
1	4	にぶい黄褐(10Y R%)	シルト	黄褐色土粒を含む。
	5	褐 (10YR%)	シルト	黒褐(10YR%)シルト土粒を含む。
	6	初 (7.5 Y R ¼)	シルト	黄褐色土粒を霜降り状に含む。
	7	灰黄褐(10YR½)	シルト	黄褐色土粒、炭化物粒、マンガン粒を含む。
l	8	暗灰黄 (2.5Y%)	シルト	酸化鉄、マンガン粒を含む。
2	9	オリーブ裕 (2.5 Y ½)	粘土質シルト	黄褐色土粒、マンガン粒を含む。
Ì	10	初 (10YR%)	シルト	黄褐色土粒、マンガン粒を含む。
	11	初 (10YR¼)	粘土質シルト	黄褐色土粒を含む。
3	12	オリーブ褐 (2.5Y%)	砂質シルト	地山崩壊上?
	13	灰黄褐(10YR%)	シルト質粘土	黄褐色土粒、酸化鉄、マンガン粒を含む。
4	14	黄 褐 (2.5 Y ¾)	粘土質シルト	酸化鉄を含む。

第33図 7号溝断面

小溝5号

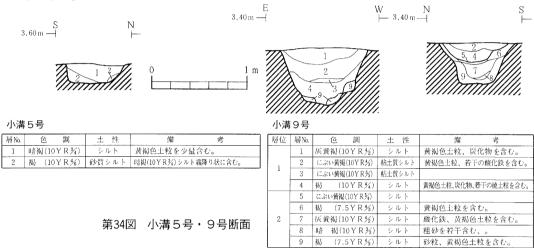
C-3グリットからD-2グリットにかけて、8号溝と平行して検出された。3号溝・小溝 状遺構と重複関係にあり、3号溝に切られ、小溝状遺構を切っていることから、本遺構は3号 溝より古く、小溝状遺構より新しい。方向は、N-47ーEである。溝の上幅は35~60cm、底面 幅は25~45cm、深さは5~20cmを計る。断面形は逆台形を呈している。底面は平坦であるが、 若干西方へ傾斜している。堆積土は2層である。

小溝8号

B-4 グリットで検出された。 7 号溝・11号土壙と重複関係にあり、 7 号溝を切り、11号土壙に切られていることから、本遺構は、 7 号溝より新しく、11号土壙より古い。方向は $N-5^\circ$ 一 E であり、ほぼ南北方向であるが、11号土壙と重複する部分から東へ方向が変わることも考えられる。溝の上幅は $55\sim70\,\mathrm{cm}$ 、底面幅は $40\sim55\,\mathrm{cm}$ 、深さは約 $15\,\mathrm{cm}$ を計る。断面形はゆるやかな「U」字形を呈している。底面は、ほぼ平坦であるが、やや南へ傾斜している。堆積土は、 $10\,\mathrm{Y}\,\mathrm{R}\,\mathrm{M}$ ・黒褐色シルトの単層である。遺物の出土はない。

小溝9号

Fー2グリットから Jー3グリットにかけて検出された。 7 号溝・8 号溝・9 号溝・16号土 壌と重複関係にあり、7 号溝に切られ、他の遺構を切っていることから、本遺構は、7 号溝より古く、他の遺構より新しい。 Fー2グリットではNー25 $^{-}$ Wの方向へ延び、7 号溝と重複する部分から西へ屈曲し、Nー95 $^{-}$ Wの方向で調査区外へ延びている。溝の上幅は $0.8\sim1.2\mathrm{m}$ 、底面幅は $25\sim40\mathrm{cm}$ 、深さは $40\sim50\mathrm{cm}$ を計る。断面形は逆台形を呈している。底面のレベルは、屈曲部分が最も高く、南及び西方へ傾斜している。堆積土は 2 層に大別される。遺物の出土はみられない。



小溝状遺構

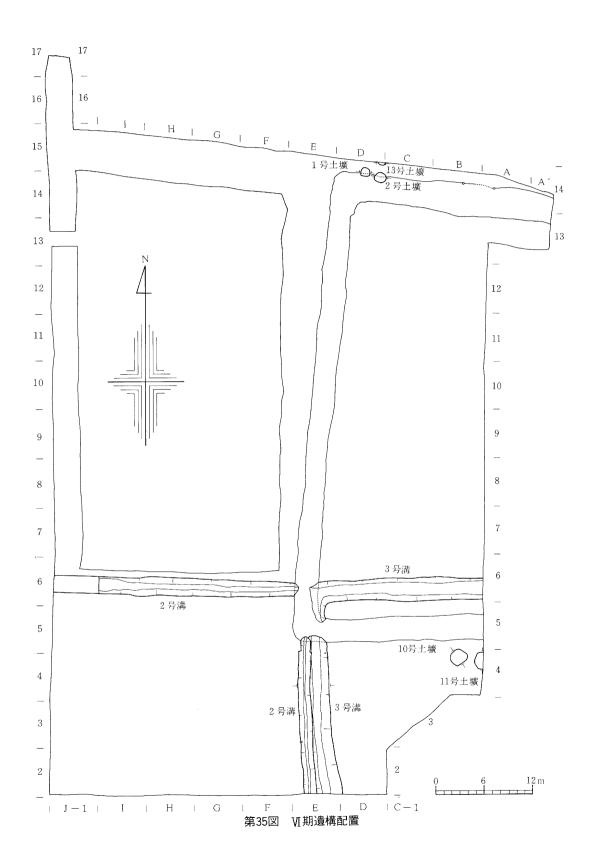
D-3 グリットで検出された。小溝 5 号と重複関係にあり、切られていることから、本遺構が古い。方向は、N-25—Wである。上幅 $15\sim30$ cm、底面幅 $10\sim20$ cm、深さ約12cmを計る。断面形はゆるい「U」字形を呈している。堆積土は、褐色・10 Y R % シルトの単層である。遺物の出土はなかった。

Ⅵ期

鎌倉時代から南北朝時代と考えられるものである。溝跡2条・土壙5基がある。

2号溝

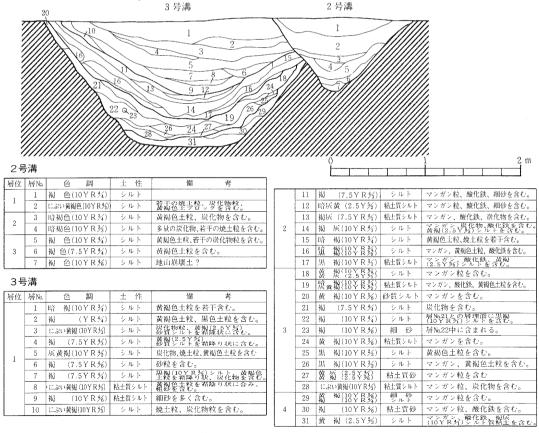
J-6グリットからE-2グリットにかけて検出された。1号溝・3号溝・7号溝・8号溝 9号溝と重複関係にあり、1号溝に切られ、他の遺構を切っていることから、本遺構は、1号溝より古く、他の遺構より新しい。1号溝と重複する部分で、完全に削られ、残存していないが、他の溝との関係・堆積土の状況・遺物の出土状況から連続した一条の溝であると判断した。



平面形は、方形に巡るものと考えられるが、北辺と東辺の一部が検出されているのみであり、正確な規模は不明である。北辺の方向は、 $N-87^{\circ}$ -Wであり、調査区外へ延びている。上幅は $2\sim2.3\mathrm{m}$ 、底面幅は $60\sim150\mathrm{cm}$ 、深さは $60\sim70\mathrm{cm}$ を計り、断面形は「U」字形を呈している。 東辺は、 $N-0^{\circ}$ -Wの方向で調査区外へ延びている。上幅は約 $1.5\mathrm{m}$ 、底面幅は $30\sim40\mathrm{cm}$ 、深さは $70\sim80\mathrm{cm}$ を計り、断面形は逆台形を呈しており、東方がやや細くなっている。底面は、北辺・東辺ともほぼ平坦で、レベル差はほとんどない。堆積土は 3 層に大別される。遺物は、堆積土中より中世陶器の図示資料が 4 点出土している。その他に多量の拳大あるいは、人頭大自然 礫が出土している。

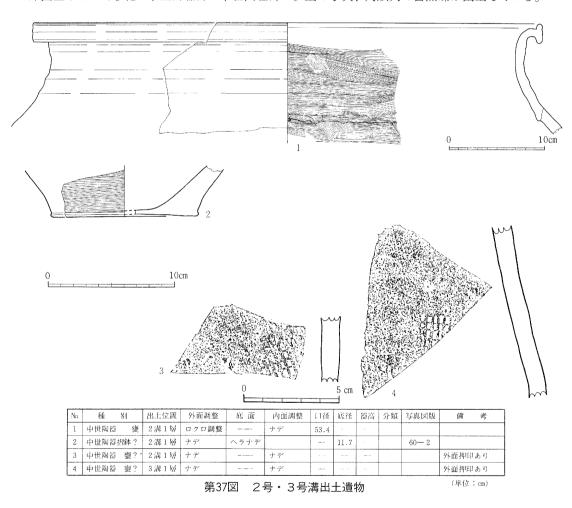
3号溝

調査区南側、B-6 グリットからE-2 グリットにかけて検出された。 1 号溝・ 2 号溝・ 4 号溝・ 7 号溝・ 8 号溝・ 8 号溝・ 8 号土壙・ 9 号土壙・ 9 号土壙・ 9 号土壙・ 9 号土壙に切られており、本遺構は、それらより古く、他の遺構より新しE W = 3.60m



第36図 2号・3号溝断面

い。平面形は、3号溝と同様に、方形に巡るものと考えられるが、北辺と西辺の一部が検出されているのみであり、正確な規模は不明である。北辺の方向は、N-90~Wの方向を示し、調査区外へ延びている。上幅は2.5~3 m、底面幅は1.2~1.7m、深さは80~110cmを計り、E-6グリットで直角に曲がり、N-0°-Wの方向で調査区外へ延びている。西辺は、2号溝と重複しており、上幅は不明である。底面幅は0.8~1.2m、深さは120~145cmを計る。断面形は逆台形を呈している。底面はほぼ平坦であり、北辺のレベルは変わらないが、西辺で若干南側へ傾斜している。堆積土は、4層に大別される。遺物は、堆積土中から、青磁鉢の図示資料が2片出土している。他に、土師器片・中世陶器片・多量の拳大、人頭大の自然礫が出土している。



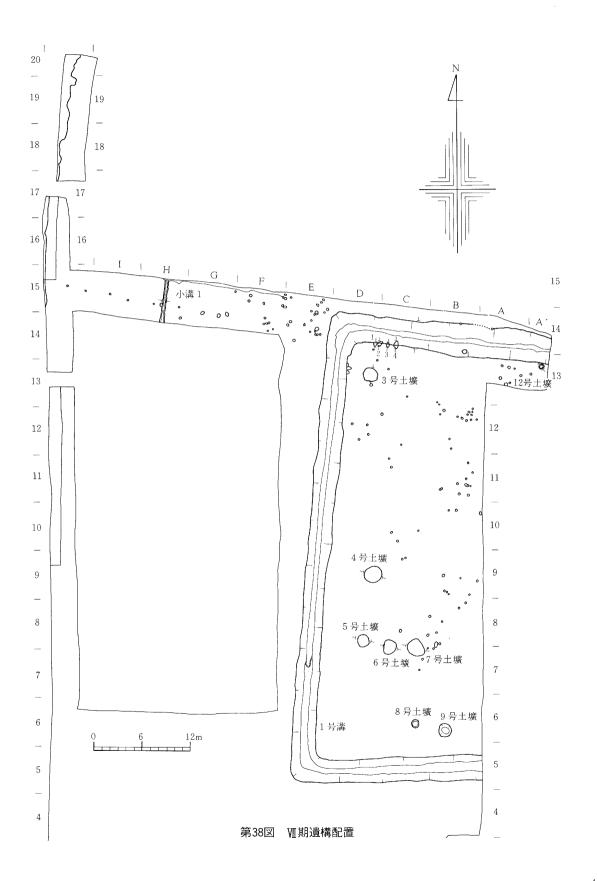
Ⅷ期

南北朝時代から室町時代前半と考えられるものである。溝跡1条・土壙8基・小溝1条・ピット多数・その他がある。

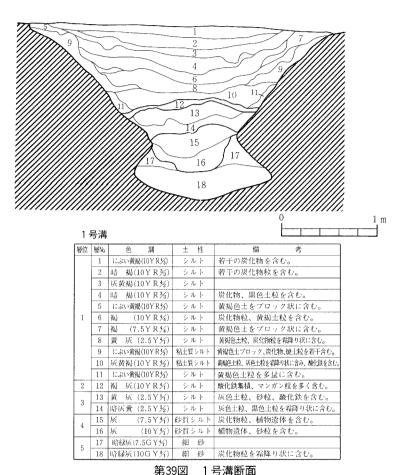
1号溝

調査区東半部、AからEグリットラインにかけて検出された。3号住居跡・方形周溝墓・2 号溝・3号溝・4号溝・5号溝・9号溝・1号土壙・2号土壙・小溝2号・小溝4号・ピット と重複関係にあり、全ての遺構を切っていることから、本遺構が最も新しい。平面形は、方形 に巡るものと考えられる。西辺と南辺・北辺の一部を検出したが、全体の規模は不明である。 また、一部は底面まで掘り下げて精査を行なったが、壁が崩落しやすく、危険なため、3層ま で精査し、4層上面を検出し、以下の掘り下げは行なわなかった。西辺のみ全体が検出された。 N ―6° ―Eの方向でE―5グリットからD・E―14グリットにかけて、全長58m あり、上幅は $2.7\sim3.5$ m とやや北側で広くなっている。底面幅は、底面を検出した部分で、 $0.6\sim1.0$ m、深 さは $110\sim175$ cmを計る。南辺は、 $E-0^{\circ}-S$ と磁北に対して直角の方向で、調査区外に延びて いる。溝の上幅は2.9~3.3m、底面幅は、検出した部分で、0.4~0.6m、深さは170~190cmを 計る。北辺はE-8°-Sの方向で調査区外へ延びている。上幅は3.2~3.5m、底面幅は0.3~1.0 m、深さは160~190cmを計る。壁は、底面から急角度で立ち上がっており、5層の上面部分ま では、断面形逆台形を呈しているが、底面付近では、袋状になっている。これは、壁が砂質土 壌であるため壁が崩落したものと思われ、本来は逆台形であったと考えられる。底面は、ほぼ 平坦であり、レベルは、西辺南寄りがやや高くなっているが、その他の部分はほぼ同一である。 堆積土は4層に大別され、2層(層No.12)は酸化鉄が集積しており、非常に堅くしまっている。 3層、4層はグライ化しており、3層は下層に比べて、有機物が多く含まれ、層№16上面及び 下面はいずれも壁に対して急角度に立ち上がっている。これらの状況から複数の機能面を有し ていたと考えられる。

溝に囲まれた内側は、調査区内だけで950㎡を計り、住居跡・溝・土壙・ピットが検出され多くのものが溝と重複している。この中で溝と重複関係がなく、溝との関連が考えられるものには、土壙8基・ピット多数がある。土壙は、1基を除いて全て井戸跡と考えられる。ピットは削平のため、消失したものも多数あると思われる。ピットは径10~40㎝程の円形を呈し、中には径12~18㎝程の柱痕跡の確認されたものもある。深さは、5~25㎝程を計る。建物として組み合うものはみられなかった。また、調査区北西部Jー15グリットからEー14グリットにかけて、33㎜にわたって13個のピットが1列になって検出された。溝北辺の南壁の延長線上に乗るように、ほぼ北辺と同方向である。径20~50㎝、深さ15~30㎝程を計り、ピットの規模・深さ等は一定せず、ピット間の規則性はみられないが、1号溝と関連の強い施設が存在した可能性がある。遺物は堆積土1層及び3層から出土している。1層から中世陶器5点・粉挽き臼上臼2点・茶臼上臼2点・茶臼下臼5点・3層から古銭16点・銅製笄1点・木製品桶底1点、炭化物が付着した円礫・また層位は不明であるが土師器甕4点・青磁碗の実測資料が出土した。



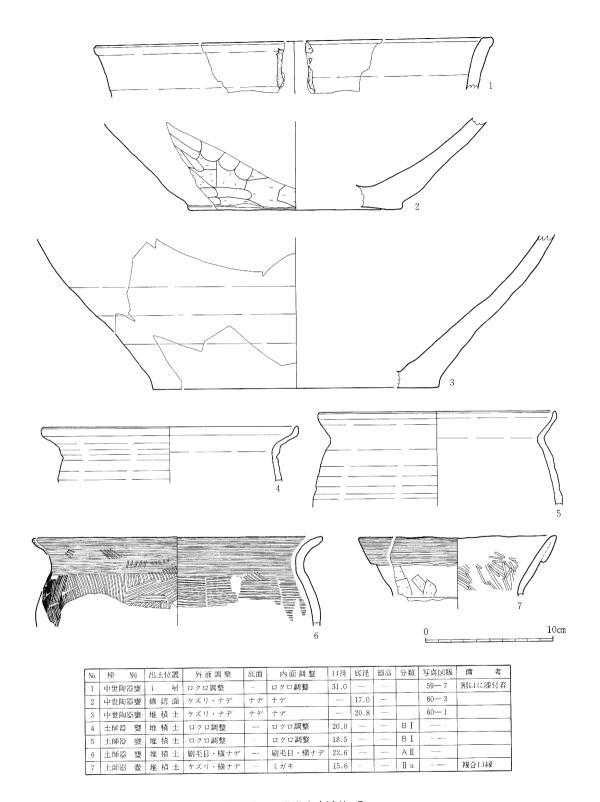
その他に多量の土師器小 片・拳大か ら人頭大の自然礫及びがも ので、擦痕の認められる。 ので、擦痕の認められる。 ので、擦れいりでは、 が出土している。 のでは、 のでいる。 のでいる。 のでいる。 のでいる。 のでいる。 のでいる。 のでいる。 のでいる。 のががががいる。 はには、 のでいる。 のががは土に層 いい。 はい、 のでいる。 のでいる。 のががは上にには、 のでいる。 のでいる。 のでいる。 のがががいかががいる。 はには、 のでいる。 のでいる。 のががいた。 のががいた。 のががいた。 のががいた。 のががいた。 のがががいた。 のがががいた。 のががいた。 のががいた。 のががいた。 のがががいた。 のがいた。 のがががいた。 のがいた。 のがががいた。 のがいた。 のがい。 のが、 のがい。 のがい。 のがい。 のがい。 のがい。 のがい。 のがい。 のがい。



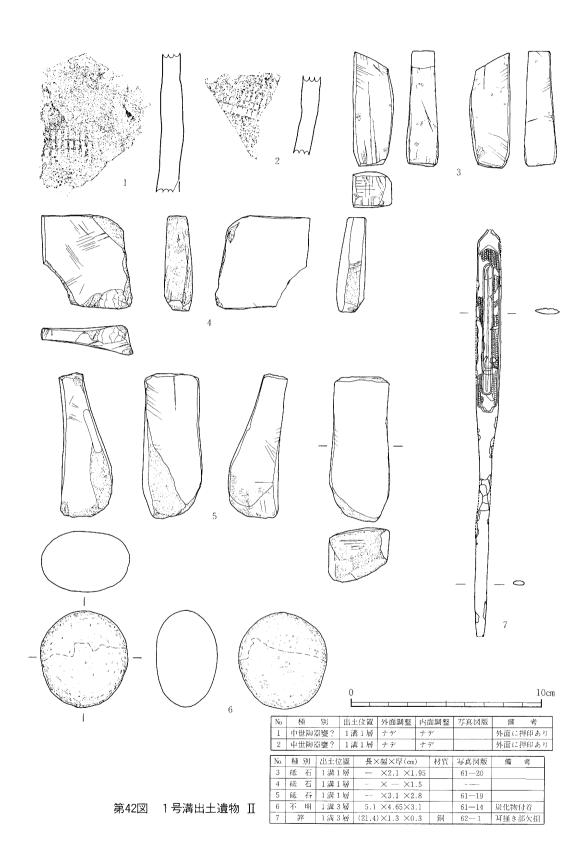
S ├— 3.60m

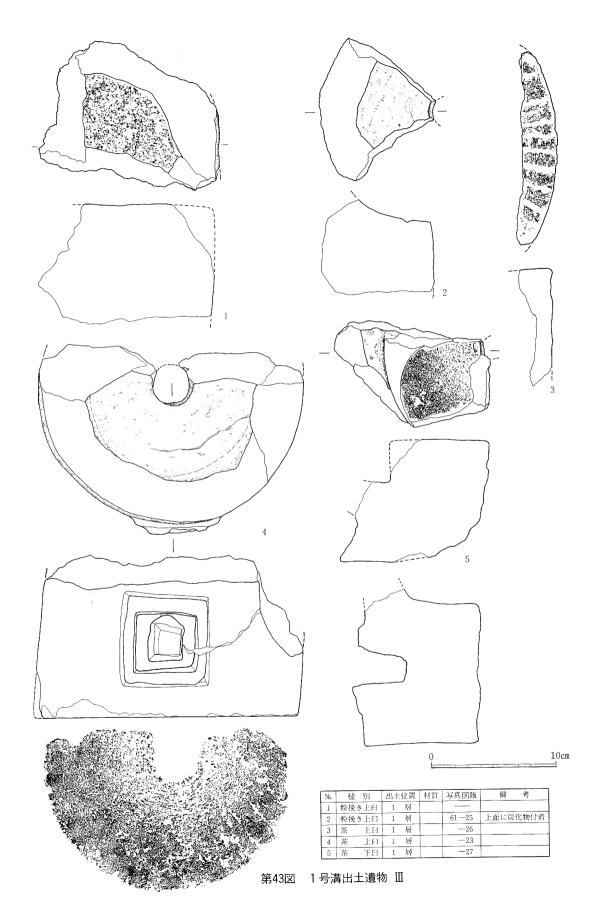
3.20m -3.10 m-ピットNo.1 ピットNo. 2 層Na 色 層No 色 性 暗 裼(10YR¾) 炭化物粒、黄褐色土粒を含む。 シルト 暗裼(10YR¾) 粘土質シルト 黄褐色土粒を含む。 3.00 m -3.10 m ---ピットNo.3 ピットNo. 4 層 Na. 訓訓 灰黄褐(10YR%) 粘土質シルト 黄褐色土粒、炭化物粒を含む。 居No. 2 褐 (10YR%) 粘土質シルト 楊 (10 Y R ⅓) 黄褐色土粒、炭化物粒を含む。 シルト 暗裼(10YR¾) シルト 黄褐色土ブロックを含む。 暗视(10YR%) 黄褐(10YR%) シ ル ト 粘土質シルト 若干の焼土粒を含む。 黑枞(10YR%) 黄褐(10YR%)粗砂ブロックを含む 粘土質シルト

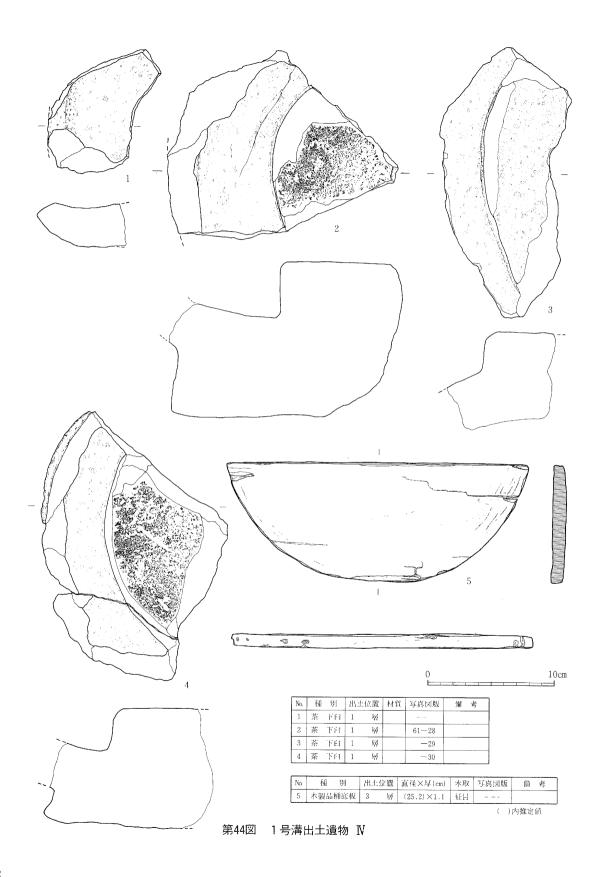
第40図 1号溝北Ⅲピット群断面

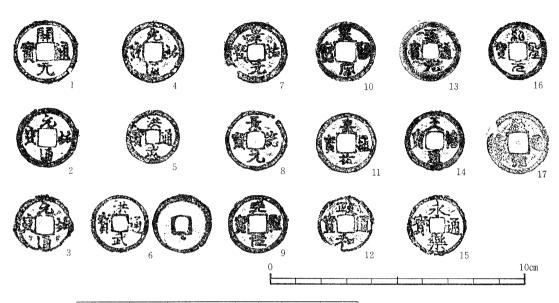


第41図 1号溝出土遺物 I

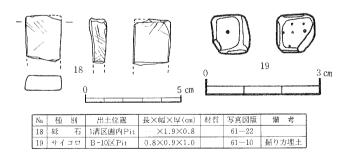








No.	銭名	出土地点	初鋳年	盐体	時代	写真図版	備考
1	開元通宝	1溝3層	武 徳 四(621)年	真	唐	62 4	
2	元祐通宝	1溝3層	元 祐 元(1086)年	篆	北宋	— 5	
3	元祐通宝	1溝3層	元 祐 元(1086)年	篆	北宋	6	
4	元祐通宝	1溝3層	元 祐 元(1086)年	篆	北宋	— 7	
5	洪武通宝	1溝3層	洪 武 元(1368)年	真	明	8	
6	洪武通宝	1溝3層	洪 武 元(1368)年	真	明	9	背点有
7	景祐元宝	1溝3層	景 祐 元(1034)年	真	北宋	-10	
8	景徳元宝	1溝3層	景 徳 元(1004)年	真	北宋	-11	
9	天聖元宝	1溝3層	天 聖 元(1023)年	篆	北宋	-12	
10	皇宋通宝	1溝3層	宝 元 二(1039)年	篆	北宋	— 13	
11	嘉祐通宝	1溝3層	嘉 祐 元(1056)年	真	北宋	-14	
12	政和通宝	1溝3層	政 和 元(1111)年	真	北宋	— 15	
13	至道元宝	1溝3層	至 道 元(995)年	真	北宋	-16	
14	天禧通宝	1溝3層	天禧年間(1017~)	真	北宋	— 17	
15	永楽通宝	1溝3層	永 楽 六(1408)年	真	明	-18	
16	絡聖元宝	V層上面	紹 聖 元(1094)年	篆	北宋	-19	
17	不 明	1溝3層		_	-	-20	



第45図 1号溝出土遺物 V

小溝1号

調査区北西部・ $H-14\cdot15$ グリットで検出された。ピットと重複関係があり、ピットを切っていることから本遺構が新しい。方向はN-10ーEである。上幅は $35\sim60$ cm、底面幅は $25\sim30$ cm、深さは $12\sim15$ cmを計る。断面形は逆台形を呈している。底面は平坦であるが、やや南に傾斜している。堆積土は2層に分かれる。出土遺物はみられない。



第46図 小溝 1号断面

土 塘

土壙は16基検出されている。このうち、8号・9号・12号・14号・15号・16号土壙の6基以外は、壁の崩落の危険があったため、確認面より1 m程の深さまで精査し、以下の掘り下げは

土層断面図のみを示し、平面形態・その他 の概要は表にまとめて一括して示す。

行なわなかった。それらの土壙については、

8号土壙

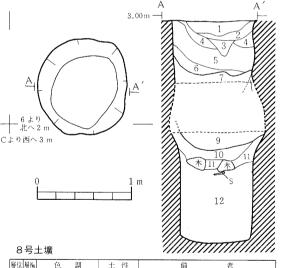
遺構の確認: 調査区のやや南東寄り、C - 6 グリット、3 号溝堆積土上面で確認した。

遺構の重複: 3号溝と重複関係にあり、 3号溝堆積土を切っていることにより、本 遺構は、3号溝より新しい。

形態・規模: 平面形は、径約1m程の円形を呈している。確認面からの深さは2.35mを計る。

堆積土: 上位の堆積土はシルト質である、 中位では粘性のやや強い土になり、下位で はグライした砂質土になる。

壁・底面の状況: 壁は確認面から1.2mの



層位	層隔	色 調	土 性	備考
	1	黒褐(10YR¾)	シルト	黄褐色土粒、炭化物粒を霜降り状に含む。
	2	にぶい黄褐(10Y R %)	シルト	若干の黄褐色土粒、炭化物粒を含む。
١,	3	黒枞(10YR¾)	シルト	若干の炭化物を含む。
1	4	₩ (10 Y R 1/4)	砂質シルト	灰色粘土粒少量を含む。
	5	暗視(10YR¾)	シルト	灰色シルト土、炭化物、黄褐色土粒を霜降り状に含む。
	6	暗褐(10YR¾)	シルト	黄褐色砂粒ブロック、黄褐色土粒を含む。
	7	灰黄褐(10YR½)	シルト	炭化物を含み、層 Na 8 との層種面近くに酸化 鉄、マンガンの集積が層状になっている。
2	8	暗灰黄((2.5Y%)	粘土質シルト	炭化物、砂粒を含む。
	9	オリーブ黒 (10Y¾)	粘土質シルト	暗線派(10G Yが)シルト土ブロック、グライ化した砂を含む。
	10	明緑灰(10G Y ¾)	シルト質粘土	暗縁灰(10G Y幺)細砂ブロックを含む。
3	11	派 (7.5Y½)	シルト質粘土	酸化鉄、植物遺体を若干含む。
	12	オリープ黒((7.5Y光)	シルト質粘土	炭化物、植物遺体を含む。

第47図 8号土壙

ところまでは 3 号溝の堆積土を直接壁としている。以下は V 層以下を直接壁及び底面としている。壁はほぼ垂直であるが、確認面から0.6m から1.2m 付近まで崩落しており、オーバーハングしている。底面は0.8m $\times 0.6$ 5 m の楕円形に近い形状を呈している。

遺物出土状況: 層No11中で木製品が検出され、層No12の上面で加工された痕跡が認められる 木片及び数cm長の草片が多量に検出されている。

性格: 遺構の形態より井戸跡であると考えられる。

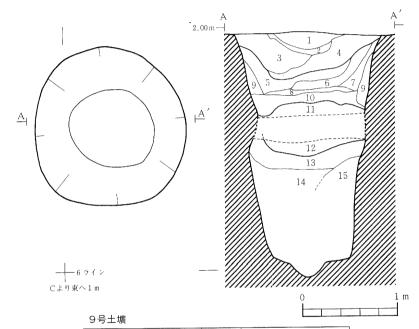
9号土壙

遺構の確認: 調査 区南東寄り、B-6 グリット、8号土壙 の東側5m程の3号 溝堆積土上面で確認 された。

遺構の重複: 3号 溝と重複関係にあり 3号溝堆積土を切っ ていることから、本 遺構は3号溝より新 しい。

形態・規模: 平面 形は、東西1.6m×南 北1.7mのほぼ円形を 呈している。確認面 からの深さは2.6mを 計る。

堆積土: 上位~中 位の堆積土はシルト



層位 層Na 調 儲 (10 Y R 1/4) 炭化物・黄褐色土粒を含む シルト 21.1 20.1 に家い黄褐(2.5Y%)シルトを多量に含み、炭化物を含む 2 福 (10 Y R 1/4) シルト 3 枞 (10 Y R 1/4) 黄褐色土粒、炭化物、焼土粒を含む。 炭化物粒を含む。 英宗い黄襴(10丫R鶯) 黄褐色土粒、焼土粒、炭化物を含む。 5 脉 版 黄 (2.5Y%) にぶい黄(2.5Y外)シルト土を含む。 にぶい黄褐(10YR%) シルト 若干の黄褐色土粒、炭化物を含む。 黄 褐(10YR½) 枞(10YR¾) 多量のマンガン、酸化鉄を含む 多量の砂粒を含む 級(10YR%) シルト マンガン、酸化鉄、炭化物を含む。 10 福 灰(10YR%) シルト 11 時 緑 灰(7.5G Y ¾) シルト 炭化物、マンガンを含む。 粘土質シルト 炭化物粒を含む。 灰(10G Y¾) 間許 粘 土 グライ化した砂粒を含む。 13 暗 緑 灰 (5G%) グライ化した砂粒、植物遺体を含む。 14 暗 縁 灰 (5G½) 粘土 暗線灰 (10G¾) 粘 土 炭化物、植物遺体を含む。

第48図 9号土壙

である。中位は、粘性の強い堆積土であり、グライ化した砂粒を含んでいる。下位は砂あるい は砂質の強い堆積土である。

壁・底面の状況: 壁は8号土壙と同様に、確認面から1.1mのところまで3号溝の堆積土を直接壁とし、以下はV層以下を直接壁及び底面としている。壁はほぼ垂直であるが西側で、確認

面から1.2mのところで壁が崩落し、ややオーバーハングしている。底面は径約0.8mの不整円形を呈する。底面中央部分は、径約30cmで深さ15cm程の凹みがみられる。

遺物の出土状況: 層No.12を検出した段階で、馬の頭骨が検出された。この骨は下層まで続いており、ほぼ1体分の骨が出土した。

性格: 遺構の形態より井戸跡と考えられる。

12号土壙

遺構の確認: 調査区南東端、A'-13グリットV層上面で確認された。

遺構の重複: 小溝7号と重複関係にあり、 小溝7を切っていることから、本遺構が小 溝7号より新しい。

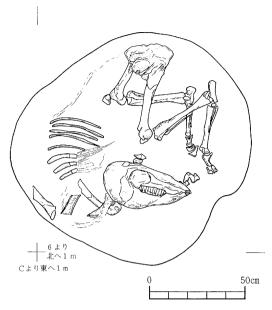
形態・規模: 平面形は、径経0.6mの不整な円形を呈している。

堆積土 : 2層に分かれる。

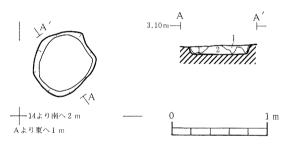
壁・底面の状況: 壁高は10cm程を計り、 底面からほぼ垂直に立ち上がっている。底 面は平坦である。

遺物の出土状況: 遺物の出土はなかった。

性格: 性格は不明である。



第49図 9号土壙 馬骨出土状況



12号土壙

₩ No.	色 調	土 性	備	考	
1	祝 (10YR%)	シルト	炭化物粒を含む。		
2	24,191	シルト			

第50図 12号土壙

14号土塘

遺物の確認: 調査区中央部やや北寄り、D-12グリットで確認された。

遺構の重複: 焼土遺構・小溝10号・ピットと重複関係にあり、焼土遺構・小溝10号を切り、

ピットに切られていることから、焼土遺構・小溝10号より新しく、ピットより古い。

形態・規模: 平面形は、長軸2.1m×短軸0.6mの隅丸の長方形を呈している。

堆積土 : 3層に分かれる。

壁・底面の状況: 壁高は最高20cm程を計り、底面からゆるやかに立ち上がる。底面は、船底状を呈して、東側が1段高くなっいる。

遺物の出土状況: 堆積土中より若干の土 師器片が出土しているのみである。

性格: 性格は不明である。

15号土壙

遺構の確認: 調査区南側、C-3グリットの7号溝と8号溝が重複している部分で、7号溝・8号溝の精査後、両遺構の壁面にまたがって確認された。

遺構の重複: 7号溝・8号溝と重複関係

14号土壙

層No	色 調	上 性	備考
1	黒褐(10YR¾)	シルト	黄褐色土粒を若干含み、土器片を含む。
2	暗褐(10YR¾)	砂質シルト	黄褐色土粒を層Nc.1より多く含む。
3	暗裼(10YR¾)	砂質シルト	黄褐色土粒を多く含む。

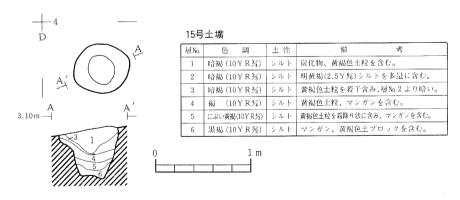
第51図 14号土壙

にあり、両遺構に切られていることにより、本遺構は、7号溝・8号溝より古い。

形態・規模: 残存部分では、径約0.6mの円形を呈しているが、南側及び北側を削平されているため、正確な規模は不明である。

堆積土 : 6層に分かれる。

壁・底面の状況: 壁高は、西側で55cm程を計る。底面からの立ち上がりは急角度である。底面は、中央部がやや高く、壁際が低くなっている。



第52図 15号土壙

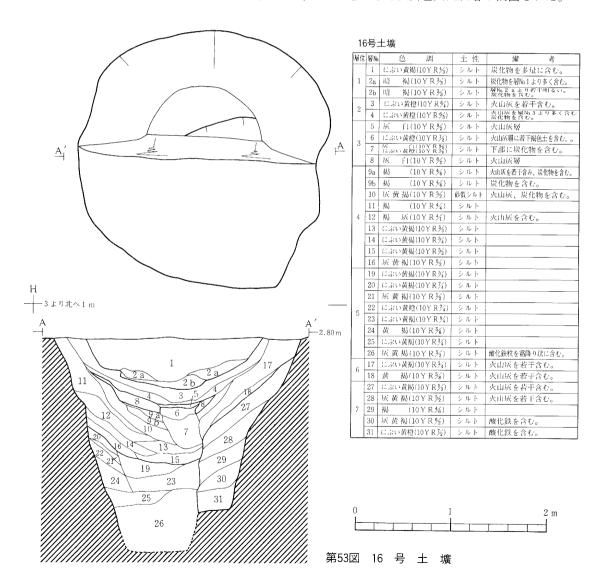
16号土壙

遺構の確認: 調査区南側、G-3グリットの9号溝堆積土上面で確認された。

遺構の重複: 9号溝・小溝9号と重複関係にあり、9号溝を切り、小溝9号に切られていることから、本遺構は9号溝より新しく、小溝9号より古い。

形態・規模: 西半部のみを掘り下げて精査し、東半部は未精査のため、正確な形態・規模は不明であるが、径約2.7mのややゆがんだ円形を呈している。深さは、確認面から2.1mまで掘り下げ、そこからボーリング棒による調査で、確認面から2.3m前後で底面に達することが確認された。

堆積土 : 31層に分かれ、確認面から0.8m下がったところで灰白色火山灰層が検出された。



壁・底面の状況: 壁はかなり急角度に立ち上がっている。西側は段を形成しており、掘り方であると思われる。底面の状況は不明である。

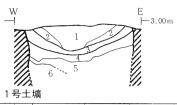
遺物の出土状況: 遺物の出土はない。

性格: この遺構の性格は、形態から井戸跡と考えられる。

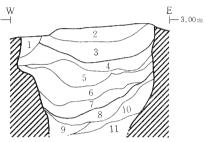
表2 戸ノ内遺跡検出土壙一覧

Na 平面形 規模 深さ 時期 性格 備考 1 楕円形 120×150 — VI 期 井戸跡 未完捆 2 円形 100×110 — VI 期 井戸跡 未完捆 3 不整件円形 165×190 — VI 期 井戸跡 未完捆 4 円形 210×220 — VI 期 井戸跡 未完捆 5 円形 155×140 — VI 期 井戸跡 未完捆 6 不整円形 180×165 — VI 期 井戸跡 未完捆 7 不整備円形 190×220 — VI 期 井戸跡 未完掘 9 円形 160×170 260 VI 期 井戸跡 未完掘 10 不整円形 210×220 — VI 期 井戸跡 未完掘 11 (円形) 210 — VI 期 井戸跡 未完掘 12 円形 70×60 12 VI 期 井戸跡 未完掘 13 (円形) 95 — VI 期 井戸跡 未完細 14 開丸長方形			表2 克	コノ内遺	跡検出土場	一覧	
2 円 形 100×110 — VI 期 井戸跡 未完据 3 不整楕円形 165×190 — VI 期 井戸跡 未完据 4 円 形 210×220 — VI 期 井戸跡 未完据 5 円 形 155×140 — VI 期 井戸跡 未完据 6 不整円形 180×165 — VI 期 井戸跡 未完据 7 不整倍円形 190×220 — VI 期 井戸跡 未完据 8 円 形 105×95 235 VI 期 井戸跡 馬骨一体分出土 9 円 形 160×170 260 VI 期 井戸跡 未完据 11 (円 形) 210×220 — VI 期 井戸跡 未完据 11 (円 形) 210 — VI 期 井戸跡 未完据 12 円 形 70×60 12 VI 期 井戸跡 未完据 14 隅丸長方形 210×60 25 II 期 不 明 15 円 形 60×50 55 III 期 井戸跡 未完据 16 不 整円形 <td>No.</td> <td>平面形</td> <td>規模</td> <td>深さ</td> <td>時 期</td> <td>性 格</td> <td>備考</td>	No.	平面形	規模	深さ	時 期	性 格	備考
不整楕円形	1	楕 円 形	120×150		VI 期	井戸跡	未完掘
4 円 形 210×220 — VI 期 井戸跡 未完掘 5 円 形 155×140 — VI 期 井戸跡 未完掘 6 不整円形 180×165 — VI 期 井戸跡 未完掘 7 不整椅円形 190×220 — VI 期 井戸跡 未完掘 8 円 形 105×95 235 VI 期 井戸跡 場合一体分出土 9 円 形 160×170 260 VI 期 井戸跡 未完掘 10 不整円形 210×220 — VI 期 井戸跡 未完掘 11 (円 形) 210 — VI 期 井戸跡 未完掘 12 円 形 70×60 12 VI 期 井戸跡 未完掘 13 (円 形) 95 — VI 期 井戸跡 未完掘 14 関丸長方形 210×60 25 II 期 不 明 15 円 形 60×50 55 II 期 不 明 16 不整円形 270×270 (230) IV 期 井戸跡 未完掘	2	円形	100×110		VI 期	井戸跡	未完掘
5 円 形 155×140 — VI 期 井戸跡 未完掘 6 不整円形 180×165 — VI 期 井戸跡 未完掘 7 不整楕円形 190×220 — VI 期 井戸跡 未完掘 8 円 形 105×95 235 VI 期 井戸跡 馬骨一体分出土 9 円 形 160×170 260 VI 期 井戸跡 馬骨一体分出土 10 不整円形 210×220 — VI 期 井戸跡 未完掘 11 (円 形) 210 — VI 期 井戸跡 未完掘 12 円 形 70×60 12 VI 期 井戸跡 未完掘 13 (円 形) 95 — VI 期 井戸跡 未完掘 14 隅丸長方形 210×60 25 II 期 不 明 15 円 形 60×50 55 III 期 不 明 16 不整円形 270×270 (230) IV 期 井戸跡 未完掘	3	不整楕円形	165×190		VII 期	井戸跡	未完掘
日	4	円形	210×220		VII 期	井戸跡	未完掘
	5	円形	155×140		VII 期	井戸跡	未完掘
R R R R R R R R R R	6	不整円形	180×165		VII 期	井戸跡	未完掘
9 円 形 160×170 260 W 期 井戸跡 馬骨一体分出土 10 不整円形 210×220 一 V 期 井戸跡 未完掘 11 (円 形) 210 一 V 期 井戸跡 未完掘 12 円 形 70×60 12 V 期 开戸跡 未完掘 13 (円 形) 95 一 V 期 井戸跡 未完掘 14 隅丸長方形 210×60 25 II 期 不 明 15 円 形 60×50 55 II 期 不 明 16 不整円形 270×270 (230) IV 期 井戸跡 未完掘	7	不整楕円形	190×220		VII 期	井戸跡	未完掘
10 不整円形 210×220 — VI 期 井戸跡 未完掘 11 (円 形) 210 — VI 期 井戸跡 未完掘 12 円 形 70×60 12 VI 期 不 明 13 (円 形) 95 — VI 期 井戸跡 未完掘 14 隅丸長方形 210×60 25 II 期 不 明 15 円 形 60×50 55 III 期 不 明 16 不整円形 270×270 (230) IV 期 井戸跡 未完掘	8	円形	105×95	235	VII 期	井戸跡	
11 (円 形) 210 — VI 期 井戸跡 未完掘 12 円 形 70×60 12 VI 期 开戸跡 未完掘 13 (円 形) 95 — VI 期 井戸跡 未完掘 14 隅丸長方形 210×60 25 II 期 不明 15 円 形 60×50 55 II 期 不明 16 不整円形 270×270 (230) IV 期 井戸跡 未完掘	9	円形	160×170	260	VI 期	井戸跡	馬骨一体分出土
12 円 形 70×60 12 VI 期 不 明 13 (円 形) 95 — VI 期 井戸跡 未完掘 14 隅丸長方形 210×60 25 II 期 不 明 15 円 形 60×50 55 III 期 不 明 16 不 整 円 形 270×270 (230) IV 期 井戸跡 未完掘	10	不整円形	210×220		VI 期	井戸跡	未完掘
13 (円 形) 95 — VI 期 井戸跡 未完掘 14 隅丸長方形 210×60 25 II 期 不 明 15 円 形 60×50 55 II 期 不 明 16 不 整 円 形 270×270 (230) IV 期 井戸跡 未完掘	11	(円 形)	210	-	VI 期	井戸跡	未完掘
14 隅丸長方形 210×60 25 II 期 不 明 15 円 形 60×50 55 II 期 不 明 16 不整円形 270×270 (230) IV 期 井戸跡 未完掘	12	円 形	70×60	12	VII 期	不明	
15 円 形 60×50 55 Ⅲ 期 不 明 16 不整円形 270×270 (230) Ⅳ 期 井戸跡 未完掘	13	(円 形)	95		VI 期	井戸跡	未完掘
16 不整円形 270×270 (230) IV 期 井戸跡 未完掘	14	隅丸長方形	210×60	25	Ⅱ 期	不明	
	15	円形	60×50	55	Ⅲ期	不明	
	16	不整円形	270×270	(230)	IV 期	井戸跡	

(単位:cm)

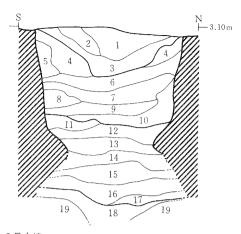


層位	層Na		色	調	土	性	備	考
1	1	椒	(1	OYR%)	シリ	レト	黄褐色土粒を多く着	1降り状に含み、炭化物も含む
1	2	音	褟(1	0Y R¾)	シリ	レト	黄褐色土粒を若っ	F含み、炭化物も含む。
2	3	黒	褟(1	0Y R¾)	粘土質:	ルト	炭化物、焼土粒: 一部黄褐色土粒:	を解状に含み、 を新降り状に含む。
	4	暗	裼(1	0Y R¾)	シリ	レト	黄褐色土粒を新鮮	り状に含み、炭化物も含む。 Rタタ)粘土質シルトを含
3	5	黄	裼(1	0Υ R 5⁄8)	シル	質砂		Y R %) 粗砂を含む。
	6	明貞	貞初(1	OY R%)	粗	砂	黒褐(10YR¾)シルトを含む。



2号土壙

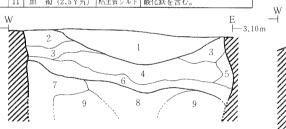
層位	稱Na	色 調	土性	備 考
1	1	黄 褐 (2.5 Y %)	粗 砂	褐(10Y R 知) シルトをブロック状に含む。
2	2	黒 裼(10YR¾)	シルト	砂粒ブロック、灰、炭化物を含む。
-	3	黒 褐(10 Y R ¾)	シルト	炭化物、黄褐(10YR%)シルト土 粒を精降り状に含む。
	4	灰黄褐(10YR%)	シルト	黄楊(10YR列)シルト土を層状、 新降り状に含む。
	5	にぶい黄枞(10YR%) 黄 枞(2.5Y %)	シルト 粘土質シルト	酸化鉄を含む。
3	6	黄 裀(10YR%)	粗砂	酸化鉄、マンガン粒を多く含む。
1	7	にぶい黄褐(2.5Y%)	粗砂	酸化鉄、マンガン粒を少量含む。
	8	黄 灰 (2.5 Y 灯) 黄 枫 (2.5 Y 列)	粘土質シルト	酸化鉄、少量のマンガン粒、炭化物を含む。
	9	明黄褐(10YR%)	シルト	黄灰(2.5YM)シルト土粒を霜降り状に含む。
4	10	褐 灰(10YR%)	シルト	にぶい黄(2.5Y系)粘土をブロック 状、層状に含む。
	11	黒 褐 (2.5 Y ¾)	粘土質シルト	酸化鉄を含む。



3号土壙

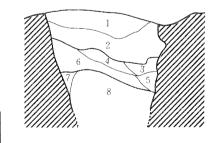
層位	層Na	色 調	土性	備者
	1	初 (10YR%)	シルト	黄褐色土粒、炭化物粒を含む。
1	2	にぶい黄褐(10YR%)	シルト	黄褐色土粒を精降り状に含み、若 子の炭化物も含む。
	3	褐 (7.5YR%)	シルト	黄褐色土粒、ブロックを含み、若 子の炭化物も含む。
	4	黒 褐(7.5YR%)	シルト	黄褐色土粒を部分的に霜降り状に含む。
	5	黄 褐(10YR%)	シルト	地山崩壊土?
	6	灰黄褐(10YR½)	シルト	資拠色土粒、ブロックを含み、特 干の炭化物も含む。
2	7	黒 褐(10YR¾)	シルト	黄褐色土粒、炭化物を含む。
	8	裀 (7.5YR%)	粘土質シルト	地山崩壊土を含む。
	9	黑 裼(7.5YR¾)	シルト	
	10	にぶい黄褐(10YR%)	粘土質シルト	地山崩壊土
	11	オリーブ褐 (2.5 Y¼)	粘土質シルト	黄褐色土粒、炭化物、植物遺体を含む。
	12	暗灰黄 (2.5Y½)	シルト	黄褐色土粘、炭化物を酸化鉄を含む。
	13	暗緑灰(7.5G Y ½)	粘土質シルト	若干の炭化物を含む。
3	14	暗オリーブ灰(5GY%)	シルト	酸化鉄を含む。
	15	暗緑灰(10G Y 🗹)	砂質シルト	植物遺体、炭化物を含む。
	16	暗オリーブ(5GY¾)	砂質シルト	
	17	暗緑灰(50%)	砂質シルト	植物遺体を含む。
4	18	オリーブ黒 (7.5Y乳)	粘土質シルト	オリーブ県(5 Y 34)粘土質砂プロ ック、植物遺体を多量に含む。
*±	19	暗緑灰(7.5G Y 1/1)	細 砂	

E ├—3.00 m



4号土壙

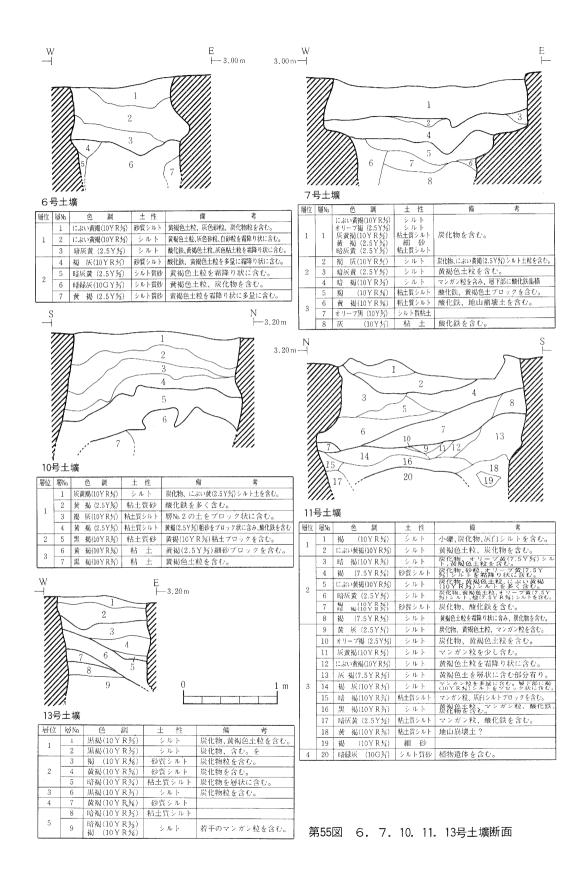
層位	層Na		色	調	土 性	備考
1	1	灰黄	禄(10	Y R 1/2)	砂質シルト	灰層黄褐色土、炭化物を層状に含み、 土器も含む。
	2	Car	い黄褐(1	0YR5%)	シルト	にぶい黄褐(10YR%)シルトを多址に 含み、炭化物も含む。
2	3	暗	福(10	Y R 3/3)	シルト	炭化物、黄褐色土粒を含む。
	4	暗	楊(10	Y R ¾)	粘土質シルト	黄褐色土粒、炭化物、灰黄褐(10YR延) シルト土を多量に含む。
	5	暗	楊(10	Y R ¾)	シルト	黄褐色土粒を霜降り状に含む。
	6	暗	楊(10	Y R ¾)	粘土質シルト	にぶい黄褐(10YR外)砂質シルト土を多量に含む。
3	7	黒	枞(10	Y R 3/2)	粘土質シルト	黄褐色土粒、炭化物粒を含む。
	8	黄	褐(10	Y R %)	シルト質砂	地山崩壞土?
	9	黒	楊(10	Y R ¾)	粘土質シルト	にぶい黄褐(10YR気)シルト土をプロック状に含む。

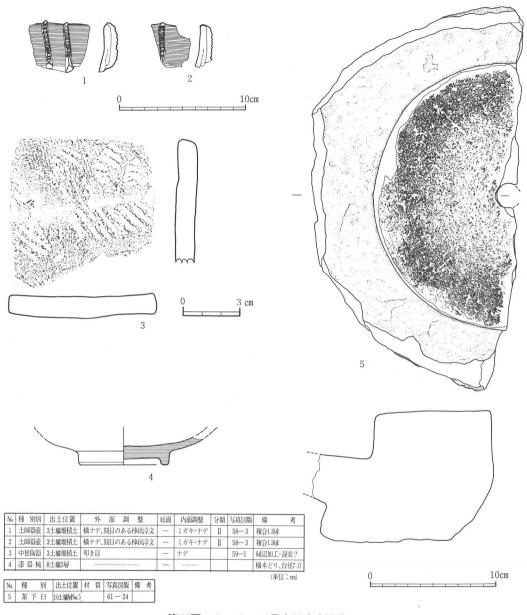


5号土壙

層位	₩No.	色調	.ქ 性	備考
1	1	黄 灰 (2.5Y	垳) 砂質シルト	黄褐色土粒、灰色砂粒、炭化物を鞘降り ブロック状に含む。
	2	暗 祸(10YR	¾) シルト	黄褐色土粒、灰を霜降り状に含む。
2	3	明黄褐(10YR	%) 砂質シルト	灰色砂粒を含む。
	4	灰黄褐(10YR	%) 砂質シルト	酸化鉄、マンガン粒を含む。
	5	灰黄褐(10YR	½) シルト	黄褐色土粒を若干含む。
	6	祝 灰(10YR	幻 シルト	酸化鉄、黄褐色土粒を霜降り状に含む。
3	7	オリーブ黒(7.5Y	3分 シルト	酸化鉄を含む。
	8	灰 (10 Y)	が) 粘土質シルト	酸化鉄、炭化物粒、黄褐色土粒を含む。

第54図 1~5号土壙断面

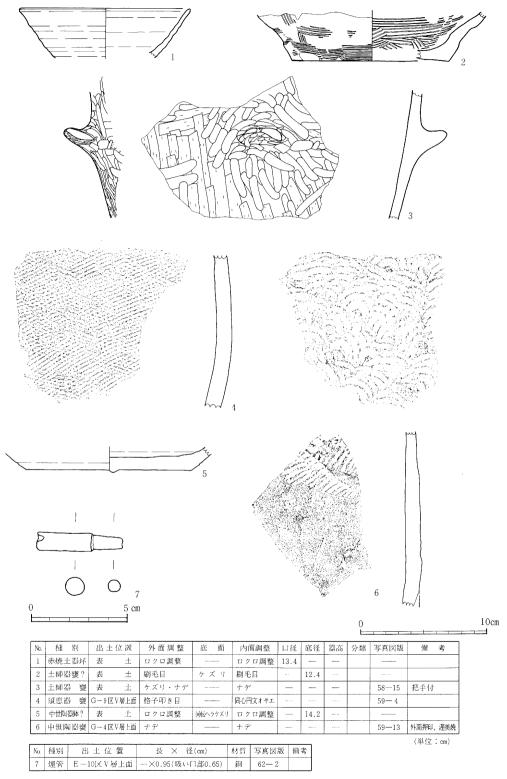




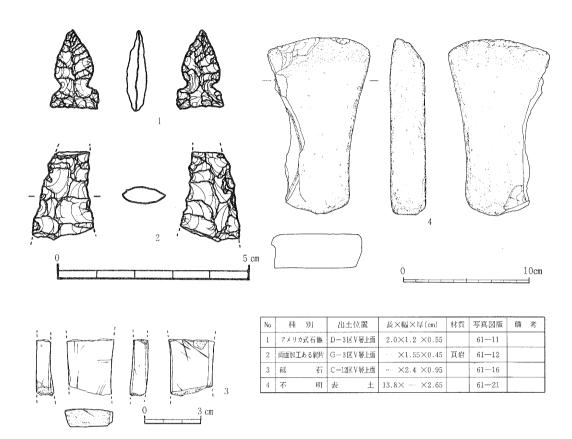
第56図 3・8・10号土壙出土遺物

その他の遺構

調査区北西隅の $J \cdot K - 15 \sim 20$ グリットの西壁に沿って、落ち込みと思われるプランが確認された。大部分が調査区外に延びていると考えられ、掘り下げて精査を加えていないため、詳細は不明であるが、調査区内での方向は、 $N-10^-E$ を示している。遺物の出土はなく、時期も不明である。



第57図 表土出土遺物 I



第58図 表土出土遺物 Ⅱ

Ⅶ. 出土遺物について

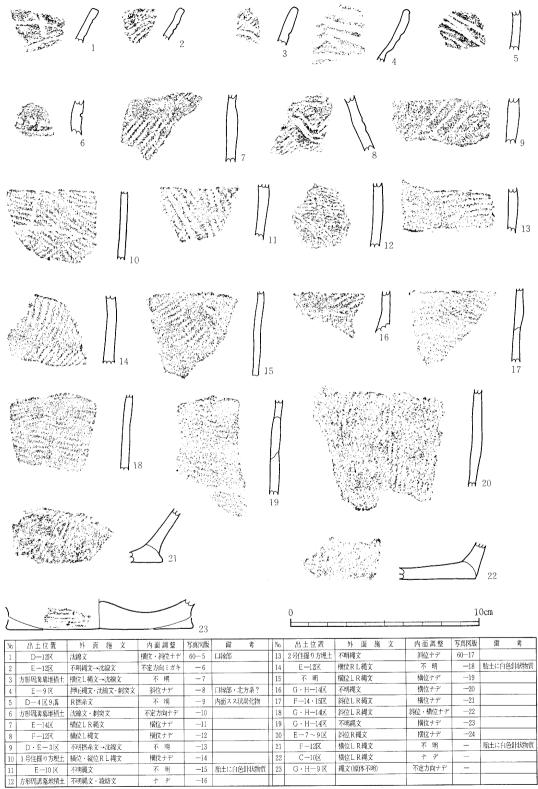
1. 弥生土器

今回の調査では、弥生土器は表土及び遺構内堆積土中より、破片総点数35点出土している。 口縁部破片 4 点、体部破片28点、底部破片は 3 点である。そのうち比較的器面の摩滅が少ない 破片23点を図示した。いずれも小破片であり、全体の器形や文様構成が復元できるものは見られない。

口縁部 (1~4)

1は細い直線状の沈線文が施文され、2・3は地文を施文した後に、曲線状の細い沈線文が 施文されている。4は波状口縁を呈すると考えられる。3条の太い沈線による山形文と「ハ」 字状の刺突文が施文され、横位の沈線によって下部と区画されているものと思われる。また、 沈線文間に押圧縄文が施文されている。

体部 (5~20)



第59図 出土弥生土器拓影

文様が施文されているのは6・8のみである。6は刺突文と曲線状の浅い沈線文が施文され、8は撚糸文施文後、2条の鋸歯状の浅い沈線文が施文されている。また、7は縄文の磨消部分が見られ、12には綾絡文が見られる。他の破片は地文として縄文あるいは撚糸文が施文されているのみである。

底部 (21~23)

いずれも体下部外面に地文のみが施文されている。また、底面は全てナデ調整されており、 木葉痕や網代の痕跡などは確認されなかった。21と23は底部が外側に張り出している。

以上の土器は、全体の特徴を把握できる程の破片がないため、型式名等の詳細は不明であるが、口縁部・体部において沈線文による山形文や鋸歯状文、曲線状の文様が描かれていること、体部に縦走する縄文がみられること、底部が張り出していることなどの細かい特徴が認められる。これらの特徴を有する土器は弥生時代後半に位置づけられることが多いようであるが、今回の調査で出土した土器片からは、それを積極的に裏付けられる資料はみられない。今後の周辺の調査による資料の増加による詳細な分析が必要であろう。

(1) 佐藤甲二氏の御数示による。

2. 古代の土器

種類としては土師器・赤焼土器・須恵器の三種である。器種には土師器で坏・高坏・器台・ 壺・甕・台付甕・ミニチュア土器・鉢があり、赤焼土器は坏のみで、須恵器には坏・壺・甕・ 提瓶がある。また、土師器には製作に際しロクロを使用するものと使用しないものがみられ、 ロクロ不使用の土師器の中には強い共伴関係のみられるものがある。以下、器種ごとに分類を 試み特徴を記述する。

土師器

‡不

図示資料は8点である。製作に際しロクロ不使用(A)とロクロ使用(B)の二種がみられる。形態の特徴から下記に分けられる。

坏AI類:体部は底部より丸みをもちながら立ち上がり、口縁部との境で外面にかるい屈曲を、内面に稜をみせ、口縁部は内弯気味に外傾するがほぼ直立するものである。平底である。器高に対する口縁部高の比率は2対1程である。最大幅は口縁部に位置している。器面調整は外面で口縁部がヨコナデ・体部は下端にヘラケズリがみられるが主体はヘラミガキである。内面は口縁部がヨコナデ、体部にはヘラナデがみられる。

坏AⅡ類:底部が欠損し全容は不明であるが、体部は丸みをもちながら立ち上がり、口縁部

でかるく外反するものである。器高に対する口縁部高の比率は8対1弱を計り、最大幅は体部 に位置している。器面調整は外面で口縁部がヨコナデ、体部にはナデがみられる。内面は口縁 部がヨコナデ、体部にはヘラナデが施こされている。

坏BI類:底部から口縁部にかけて内弯ないし外傾気味に立ちあがるもので、底部に回転糸切り痕がみられる。内面にはヘラミガキ・黒色処理が施される。

a:口径・底径に較べて器高値が小さく全体的に偏平な器形である。無調整である。

b: a に較べて器高値が大きいものである。体部下端に手持ちヘラケズリ調整のみられるものもある。

高坏

図示資料は9点であるが、全体的な器形の判明するものは2点のみである。形態の特徴から 下記の三種に分けられる。

高坏 I 類: 坏部は底部から外方へ内弯しながら立ち上がり、口縁部と体部の境で内面に稜、外面に屈曲をみせ、さらに外傾気味に内弯し口縁部へおさまる。脚部は外反しながら裾部が末広がりに円錐台状に開くものである。坏部は大きさの違いから大(a)・小(b)の二種がみとめられる。(a)は脚部形態が不明であるが(a)・(b)は相似形であることからも、(b)同様に末広がりの脚部と考えられる。脚部には径6~9mmの円窓がみられ、1段3個のものと二段(3+6)9個のものがある。器面調整は坏部外面がヨコナデ・縦位方向のヘラミガキ、内面はヨコナデ・浅いケズリ・縦位方向と方射状のヘラミガキが施され、脚部外面では縦位方向のヘラミガキ、内面にはヘラナデが施されている。丹塗が施されているものがある。全体的に最終行程としてのヘラミガキ調整が入念に行われ端正な作りである。

高环 Ⅱ 類:坏部は底部から外方へゆるく内弯しながら口縁部へおさまる。脚部は Ⅰ 類同様外反しながら開くものである。 Ⅰ 類と較べて坏部と脚部の比率が逆転し坏部が大きくなる特徴がある。脚部に円窓を有するもの(a)と無窓のもの(b)がある。器面調整は坏部外面がヨコナデ・ナデ・縦横位方向のヘラミガキ、内面はヨコナデ・横位方向と方射状のヘラミガキが施され、脚部外面ではナデ・縦位方向のヘラミガキ、内面にはヘラナデ・ナデが施されている。全体的に端正な作りで、丹塗されているものもある。

高坏Ⅲ類:欠損品である。坏部下方に粘土貼り付けがみられ、複合口縁様になるものと考えられる。脚部は外方へ開くものである。器面調整は内面でヘラナデ、外面にはハケ目・ミガキ状のナデが施されている。丹塗されている。

器台

図示資料は4点のみである。器形の判明するものは2点あり、他は脚部資料である。受け部と脚部の接合面に径1cm程の貫通孔が一個みられる。形態の特徴から下記の二種に分けられ、

両類とも端正な作りである。

器台 I 類: 受け部は内弯しながら立ち上がり口縁部へおさまる。脚部は外傾気味に開き末広がりの円錐台状を呈し、裾端部でかすかに内弯するものである。脚部には二段 (3+3) 計 6 個の円窓がみられる。器面調整は受け部外面がヨコナデ・縦位方向のヘラミガキ、内面はヨコナデ・方射状のヘラミガキが施され、脚部外面は裾部にヨコナデがみられ、全体的にナデ・縦位方向のヘラミガキが施され、内面も同様である。丹塗が施されている。

器台Ⅱ類:受け部は外傾しながら立ち上がり口縁部へおさまる。脚部は外反しながら末広がりに開き円錐台状を呈する。脚部には二段(3+3)計6個の円窓がみられる。器面調整は受け部外面でヨコナデ・縦位のヘラミガキ、内面はナデ・横位のヘラミガキが施され、脚部外面はナデ・縦位のヘラミガキ、内面にはヘラナデが施されている。丹途が施されている。

壺

図示資料は12点である。口縁部の形態から大きく下部の三種に分けることができる。

壺 I 類:二重口縁の大形の壺である。口縁部は上・下部とも外反気味に立ち上がり、中央部には隆帯を貼り巡らしたように外方に張り出した段がみられる。頸部には5mm間隔程の斜行した刻目(櫛歯状の圧痕)をもつ隆帯が全周している。体部は球形を呈し最大幅は体部中央部に位置する。平底である。器面調整は外面で口縁部上部にヨコナデ・ヘラミガキ、下部にはミガキ状の浅いヘラケズリがみられる。体部にはハケメ・ヘラケズリ・ヘラミガキが施されるが主体はヘラミガキである。内面はナデが主体であるが一部ヘラナデが観察される。なお、この壺には体部中央から下部にかけて籠目と考えられる痕跡が確認されている。痕跡の幅は5~9mm程のもので、斜位の格子目状に延びるもの42条、横位方向に巡るもの2条がみられ、組み合わせの上下関係の確認される部分がある。体部調整は上述したようにヘラミガキが主体であるが細かく観察すると小さな剝落がみられる。しかし、籠目部分には剝落はみられず他の部分に較べて光沢さえみられる。これは籠に包まれていたために器面が保護され、本来施されていたへラミガキが残存しているものと考えられる。

壺 ■ 類:複合口縁の壺である。口縁部外面・体部上方に装飾のつくものがある。口縁部の形 状から二種に分かれる。

a:口縁部が外傾または外反気味に立ち上がるものである。壺上半部の資料が多く全容の判明するものは1点のみである。器形の判明するものは体部が球形を呈し底部は平底であるが中央部分に凹面がみられる。最大幅は体部中央部に位置している。頸部直下に径1cm程の円形浮文が一ケ貼り付けられている。器面調整は外面で口縁部上部がヨコナデ、下部から頸部にかけてハケ目・縦位のヘラケズリ、体部はナデ・ヘラミガキ・ヘラケズリがみられ主体はヘラミガ

キである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデ・ナデ・ハケ目・ヘラミガキがみられ、体部はミガキ状のナデが施されている。他の土器も同様な調整であるが、内外面とも粗いヘラミガキが施されているものもある。

b:口縁部が内弯気味に立ち上がるものである。全容を知り得るものはない。口縁部外面に長さ $3\sim 4$ cm、幅 5 mm程の棒状浮文がみられる。口縁部面に対しやや斜めに貼りつけられており、外面には刻目がみられる。刻目には縄状や棒状工具の圧痕が観察される。残存部から $2\sim 3$ 個が組み合わせの単位となっていると考えられる。器面調整は外面がヨコナデが主体となっており、内面はヘラナデ・ナデが観察される。

壺Ⅲ類:単純口縁の壺である。口縁部は頸部でかるく屈曲し外反気味に立ち上がり、体部は球形を呈すると考えられるが体部下方が欠損しており詳細は不明である。最大幅は体部中央に位置する。器面調整は外面で口縁部がハケメ・ヨコナデ・ヘラケズリ、体部はハケメ・ヘラケズリ・ナデが施され、内面は口縁部でナデ・ヘラミガキ、体部にヘラナデが観察される。

甕

図示資料は11点である。製作に際しロクロ不使用(A)とロクロ使用(B)の二種がみられる。形態の特徴から下記に分けられる。

甕A I 類:単純口縁のもので、口縁部径9.6~14.8cmと全体的に小ぶりのものである。口縁部の形状から二種に分けられる。

a:体部は丸みをもちながら立ち上がり、口縁部はくの字状に強く外傾し口唇部にいたる。 内面の口縁部と体部の境は鋭角的に屈曲している。平底である。口縁部径・器高に対し口縁部 高が小さい特徴がみられる。器面調整は外面で口縁部がヨコナデ、体部がナデ・ヘラケズリが 施され、内面には口縁部でヨコナデ、体部にヘラナデが施されている。

b:欠損品であるため全容は不明である。体部は内弯しながら立ち上がり、口縁部はくの字状に外傾し立ち上がるがさらに口唇部が外反するものもある。 a に較べると全体部に肉厚で口縁部高も大きい。内面の口縁部と体部の境は a 同様鋭角的である。器面調整は外面で口縁部にハケメ・ヨコナデ、体部はハケメ・ヘラケズリが施され、内面には口縁部にハケメ・ヨコナデ、体部にはナデ・ハケメ・ヘラナデが施されている。

甕AⅡ類:体部下方が欠損している。体部はやや内弯しながら立ち上がり、口縁部との境に かるい稜がみられる。口縁部は強く外弯しながら立ち上がり口唇部は丸くおさまっている。器 面調整は外面で口縁部にハケメ・ヨコナデ、体部はハケメが施され、内面は口縁部でハケメ・ ヨコナデ、体部にはハケメが施されている。

甕B Ⅰ類:口縁部を中心とした資料である。体部はやや丸みをもって内弯気味に立ち上がり口縁部はくの字状に外傾し口縁端部が上方に突き出している。器面調整はロクロ調整のみの確

認である。

台付甕

台部のみの資料であるが、形状から台付甕と判断した。台部はハの字状に外弯しながら立ち上がる。残存高は4.9cm・裾部径は9.4cmを計る。全体的に肉厚で、裾部接地面は平坦となっている。器面調整は外面がナデ・ヘラケズリ、内面にヘラナデが施されている。

ミニチュア土器

高坏または器台を模していると考えられ、脚部のみの残存である。径 5 mm程の円窓が 4 個穿がたれている。裾部径は4.7cmである。

鉢

破片であるため全容が不明であるが、立ち上がりの形状や口径が坏類に較べて大であり鉢と 判断した。体部から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がり、かるく口縁部が外反している。器 面調整は外面がケズリ・ナデ、内面はナデが施されている。

赤焼土器

t不

ここで赤焼土器としたものは酸化炎焼成のもので、黒色処理・ヘラミガキの施されていない ロクロ使用の土器をさす。器種は坏のみに限定している。図示し得たものは1点であり、破片 資料であることからも特徴をみい出し得なかった。

須恵器

朩

図示資料は1点のみである。底部から口縁部にかけて外傾気味に立ち上がり、口唇部はかる く外反する。内外面ともロクロ調整のみである。底部に回転糸切り痕がみられる。

壺

図示資料は2点で、長頸壺と考えられるものと丸底のものである。前者は体部下方のみの資料で体部は高台部より内弯気味に立ち上がるもので、内外面ともロクロ調整のみである。付高台である。後者は破片であるため全容は不明であるが、全体的に丸みをもつものである。調整は外面で底部が回転へラケズリ、体部がロクロ調整、内面はロクロ調整である。

罋

口縁部の破片資料である。口縁径は40cm程で大形のものである。口縁部はくの字に外傾し、口唇端部は上・横・下方へ三角形を呈する突き出しがみられる。調整は口縁中央に平行タタキ目がみられ、他はロクロ調整である。

提瓶

口縁部と体部の一部が欠損している。口縁部は体部から外傾気味に立ち上がりラッパ状を呈する。調整は内外面ともロクロ調整である。体部は広端面がほぼ円形で狭端面は楕円形を呈している。外面にはカキ目調整が全体に施されている。内面はロクロ調整がみられ、中央部には粘土板の貼り付痕跡が一ケ所観察される。口縁部との接合面には斜方向のナデがみられる。頸部下方に斜行した櫛歯状の刺突が全周している。耳環等の貼り付けはみられない。

a. 土器類の組み合わせと編年的位置

今回出土した土器類は遺構での共伴関係・器形の特徴から大きく 3 群(I・II・II)に分けることが可能である。以下、群ごとに記述する。

I群土器:3号住居・4号住居・方形周溝墓から出土した土器を中心に構成される。器種には坏・高坏・器台・壺・甕・台付甕・ミニチュア土器がある。遺構ごとに強い共伴関係が認められるが、ここで共伴関係としたものは床面・底面・ピットから出土したものを主とするが、堆積土中のものでもより床面・底面に近いものや特徴をもつものも含め大きく共伴関係として把えている。また、破片・欠損資料は図上で復元しているものがある。遺構ごとの器種分類をみると下記の通りになる。

3 号住居:高坏Ⅱ類、器台、壺Ⅱb類

4 号住居: 坏A I 類・A II 類、高坏 I a 類・I b 類・II 類・II 類、器台 I 類・II 類、壺、 甕A I a 類、台付甕、ミニチュア土器

方形周溝墓:高坏Ⅰa類、壺Ⅰ類・Ⅱa類・Ⅲ類、甕AⅠb類

I 群土器は上記の3遺構に代表されるが、器形の特徴からみて土師器編年における塩釜式に比定される土器群である。各遺構間には器種の欠落が相互にみられるが、器形・調整を同じとする器種(3号住居と4号住居の高坏Ⅱ類・4号住居と方形周溝墓の高坏Ⅰa類・全体的に端正な作りの土器群)がみられ、大きく同時期のものと考えられる。しかし、4号住居と方形周溝墓は位置的に近接しており住居の上屋構造を考えると同時期の存在は考えられない。近年、塩釜式土器は器形的な特徴から細分が試みられ変遷案が提示されている。ここでは便宜的に住居跡の土器群についてのみ塩釜式期内での位置関係について検討してみたい。

○住居跡出土の土器群

3号住居の土器は、図示資料であるが、高环1点・器台1点・壺1点と器種の員数は少ないが強い共伴関係にある。4号住居は坏3点・高坏7点・器台3点・壺1点・甕3点・台付甕1点・ミニチュア土器1点があり、器種構成として大型品が少なく小型品の坏などが多く、高坏は7点と偏った器種構成となっている。3号住居同様強い共伴関係がみられる。各器種の特徴

は前頁の器種分類で述べたが要約してみると、坏は庭部より丸みをもって立ち上がり、軽い屈 曲・綾をみせ口唇部にいたる。AI類とAⅡ類では口縁部の形状に大きな違いがみられ、器高 に対する口縁部高の比率は2対1・8:1弱を計り、最大径は口縁部・体部に位置しほぼ同じ である。底部は平底のものが確認されている。器面調整はヨコナデ・ナデ・ミガキ・ヘラナデ が施される。高坏は坏部の形状から、坏部中央部に屈曲・綾をもち内弯気味に立ち上がるもの (Ⅰ類)・単純に内弯気味に立ち上がるもの(Ⅱ類)・複合口縁様になるもの(Ⅲ類)の3種に 分けられる。脚部は坏部から大きく外方へ広がるもので、I類は裾部径が口縁部径より大きく なると考えられ、Ⅱ類は逆に口縁部径が大となる可能性があり、特徴的である。円窓がほぼ全 器種にみられ3個を1単位としているようで、1段3個のものと2段9個(3+6)のものが ある。器面調整はヨコナデ・ナデ・ヘラミガキ・ヘラナデが施され、主体はヘラミガキであり 端正な作りである。丹塗りが確認されるものがある。器台は受け部の形状から、内弯しながら 立ち上がるもの(Ⅰ類)と外傾的に立ち上がるもの(Ⅱ類)の2種に分けられ、受け部中心部 に径1cm程の貫通孔が穿がたれている。脚部は貫通孔下部付近から大きく外方へ広がっている。 円窓がみられ1段3個・2段6個(3+3)のものがある。器面調整はヨコナデ・ナデ・ヘラ ミガキ・ヘラナデがみられ、高坏同様ヘラミガキが主体である。丹塗りが確認されるものがあ る。壺は全容を知るものはなく、頸部から内弯気味に立ち上がる複合口縁のもの(Ⅱa類)と 体部のみのものがある。Ⅱ a 類のものは刻目をつけた棒状浮文が口縁部に縦に付されている。 器面調整にはヨコナデ・ナデ・ヘラナデ・ヘラミガキが施されている。甕は全容を知り得るも のは小型のもので、口縁部は短かく外傾気味に立ち上がり、体部は下膨れ気味である。最大径 は体部中央に位置する。底部は平底でわずかに凹面となるものもある。器面調整はヨコナデ・ ハケメ・ナデ・ヘラナデ・ヘラケズリが施されている。坏AⅡ類と相似形とも考えうるが器高 の点などから区別している。台付甕は脚部のみの破片で、ハの字状に軽く外反している。他の 器種に較べて器厚があり、裾部の接地面は平坦となっている。器面調整はナデ・ヘラケズリ・ ヘラナデが施されている。ミニチュア土器は手捏ねのもので、3~4mmの円孔が4個穿がたれ ており高坏又は器台を模していると考えられる。

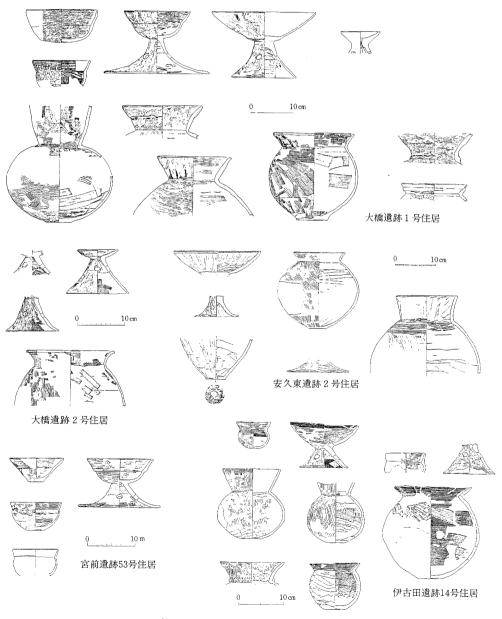
以上が住居跡出土土器群各器種の概ねの特徴である。このような特徴をもつ土器群は各遺跡で発見例が増加しているが、ここでは当遺構で員数・特徴の最っとも顕著である高环・器台を器種構成としている他の遺構と比較検討してみたい。同様の特徴をもつ土器群としては仙台市伊古田遺跡・同市安久東遺跡・亘理町宮前遺跡・蔵王町大橋遺跡等の住居跡出土土器群があげられる。伊古田遺跡の14号住居跡では床面資料に坏・高坏・壺があり、堆積土資料を含めると器台・甕が補足される。坏は坏AI類に類似するもので、口縁部下端のくびれがやや強くなっており、器面調整はヘラミガキが主体である。高坏は器厚があることを除けば高坏Ⅱa・Ⅱb両

第60図 I群土器器形分類

類に類似している。壺では類似するものはみられないが、単純口縁で下部に刺突をもつ隆帯の 巡ぐるものがあり装飾性の面からみると壺Ⅱb類の棒状浮文と共通する点はみられる。器台は 受け部が欠損しているが調整をも含めて器台Ⅰ・Ⅱ類に類似するものである。安久東遺跡の2 号住居跡では床面資料として高坏・甕・甑があり貼床下層資料として高坏・壺がある。高坏は 両資料とも欠損品で全容は知り得ないが脚部には円窓が穿がたれ、器面調整もヘラミガキが主 体となっており、坏部資料は高坏Ⅱ類に脚部資料は高坏Ⅰ又はⅡ類に類似するものである。甕・ 甑・壺については類似するものは認められない。宮前遺跡では同式期の住居跡が23軒確認され ているが、その中の第53号住居跡に類似資料がみられる。床面・貯蔵穴資料として坏・高坏・ 鉢がある。高坏は坏部上部が外反し立ち上がるもので、この点を除けば高坏Ⅰ類に調整共類似 するものである。坏としているものは平底で口縁部下部にかるい屈曲・綾をみる鉢形のもので、 鉢としているものは単純口縁と複合口縁のものがみられ甕を小形にしたような器形で、両器種 とも類似するものはみられない。大橋遺跡では3軒の同式期の住居跡が確認されており、1・ 2号住居跡より類似資料が出土している。1号住居跡の床面・貯蔵穴資料として坏・高坏・器 台・帝・甕・台付甕があり、2号住居跡床面資料としては坏・高坏・器台・甕がある。1号住 居跡出土の高坏二種は高坏Ⅰb類・Ⅱa類に器面調整を含めて非常に類似しており、2号住居 跡の器台も同様に器台Ⅱ類に類似するものである。坏は2種類みられ、底部に浅い凹面がみら れ口縁部下部にかるい屈曲・綾がみられ口唇部が直立気味になり、内外面ともヘラミガキ調整 が施されるもの、口縁部が外傾気味に立ち上がる点を除けば坏AI類に類似するものがある。 壺は複合口縁で外傾気味に立ち上がり壺Ⅱa類に分類されるもの、口縁部が直立気味に立ち上 がるものがあるが住居跡内での分類では類似するものはみられない。甕は単純口縁で体部が球 形を呈し器面調整がハメケを主体とするもの、壺形のもので口縁部は単純口縁で体部が球形を 早しヘラミガキ調整が主体を占めるものがあるが類似するものはみられない。台付甕は脚部の みのもので内弯気味におさまるハの字状でハケメ調整が施され、類似点はみい出せない。また、 1 号住居跡では柱穴中より複合口縁で頸部に刻目をもつ隆帯が巡ぐる壺破片資料が出土してい る。壺 I 類と II a 類の一部分の特徴を併せもつもので、調整はハケメ・ヘラミガキで後者が主 体を占めている。

このように、高环・器台の器種に着目し各遺構の土器群との類似性をみてみたが、当遺跡住居跡出土土器群は器種構成に欠落が多くみられ不明とせざるおえない面が多々みられるが、強い類似性をみるものなどが確認された。特に、大橋遺跡の住居跡出土土器群は器形・調整共類似点の多い器種があり、塩釜式期の中でも非常に近い時期設定が考えられるものである。大橋遺跡の報文では、概要は略するが、高坏の形態と脚部の孔の有無・複合口縁の壺の突帯の有無・甕の体部の形態と器面調整の点から他の遺跡の土器群と比較を行ない、「塩釜式」の中でも比較

的古い時期のものと考えられるとしている。また、宮前遺跡の報文では塩釜式土器をA・B・Cの三つの土器群に分け、各群の変遷として高坏では円窓の消失化・器台では貫通孔と円窓の消失化・壺では複合口縁・有段口縁の退化傾向・甕では胴中央部の脹みと張りの消失と下脹み傾向がみられるとし、次の土器型式の「南小泉式」との連続性をうかがわせるものとしている。また、壺頸部にみられる刻目をもつ凸帯は弥生土器末期にみられる壺口縁下部の刻目と通ずるものがあるとしている。



第61図 I群土器に類似する各土器群

以上の点からみると、当遺跡住居跡出土土器群は塩釜式土器群の中でも古手の時期に比定されるが、1号住居跡からは弥生土器から系譜される棒状浮文をもつ壺(退化形態もみられなく端正な作り)が出土しており、器種構成に欠落があり詳細についての検討は無理であるが、現段階として宮城県内では最古式形態の一つとして把えることが可能であると考えられる。

Ⅱ群土器:Ⅰ群・Ⅲ群土器に属し得ない土器をⅡ群土器とした。そのため遺構・遺物にまとまりはなく、本来群として把えられるものではない。器種には1号溝出土の土師器甕、方形周講墓出土の須恵器壺・提瓶がある。土師器甕はロクロ不使用のもので内外面とも口縁部がヨコナデ・体部がハケメ調整で、口縁部と体部の境にかるい綾がみられる。このような特徴から栗囲式ないし国分寺下層式の範疇に属するものと考えられる。須恵器壺は破片資料で詳細は不明であるが底部は丸底で回転ヘラケズリが施され、短頸壺と考えられるものである。提瓶は口唇部付近が欠損しているが直線的に立ち上がりおさまるものと考えられる。体部全面にカキメが施され、頸部には刺突による列点文が全周している。刺突による装飾はみられるが把手やボタン状の粘りつけはみられなく退化形態のものと考えられ、古墳時代でも後期頃に属するものと考えられる。

Ⅲ群土器:5号溝・8号溝・1号溝から出土したロクロ使用の土師器坏・甕を主とし、それに伴うと考えられる須恵器坏・壺・甕を含めⅢ群土器として把えた。全て堆積土中からのもので各器種に強い共伴関係がみられるものではない。土師器坏は回転糸切りで無調整のものと体部下端に手持ちヘラケズリが施されるものがあり、立ち上がりは内弯ないし外傾気味のものである。甕は土半部資料のみで、口縁部はくの字に外傾し端部が上方に突き出す形のものである。須恵器坏は土師器坏とほぼ同形で、底部には回転糸切り痕がみられ、立ち上がりは外傾気味で口唇部がかるく外反している。壺は体部資料のみのものであるが残存部から長頸壺と考えられる。胎土・色調が他のものと若干違い在地産の可能性もあるが東海系とも考えうる。甕は大形のもので口縁部周辺の資料で、口縁部はくの字に外傾し口唇端部は三方向へ三角形を呈する突き出しがみられる。外面には平行タタキがみられる。

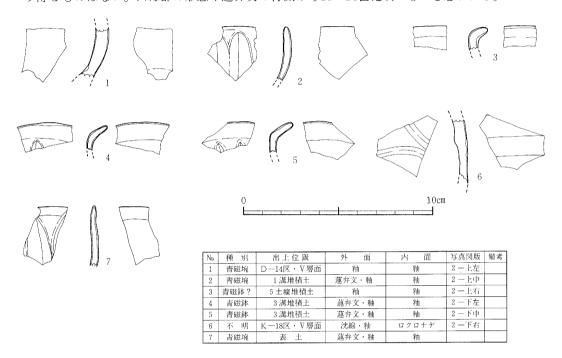
ロクロを使用した土師器は東北地方における編年で「表杉ノ入式」とされるもので、Ⅲ群土器としたものはこの表杉ノ入式期に位置づけられるものである。また、表杉ノ入式の土器は坏を中心として細分される指適があるが、当Ⅲ群土器は量的にもまとまりにも欠け細分の位置づけは不能である。しかし、上記遺構には宮城県内の平安期の遺構でよく検出される灰白火山灰がみられる。同一の火山灰であるかの検証はし得なかったが、同一であるとすればⅢ群土器は10世紀前半頃を中心とした年代が考えられよう。

3. 陶磁器

陶器は全て中世陶器で潰構からの出土量も少なく、図示資料は破片も含めて12点のみである。

器種は甕・摺鉢?・鉢?があり、多くは無釉のものである。大くのものは1号~3号溝からのもので常滑産の製品と考えられるものが大半を占めている。3号土壙より出土した陶器片は断面に使用痕が確認された。渥美産である。年代に関しては不明なものが多いが、N字状を呈した口縁部をもつ甕などがあり、南北朝時代から室町時代前半に位置づけられよう。

磁器は全て青磁で中国産のものである。碗や鉢と考えられるが全てが口縁部資料で全容を知り得るものはない。口縁部の形態や蓮弁文の特徴から13~14世紀頃のものと思われる。



第62図 青磁実測図

4. 土製品

土錘が8点出土したのみで、一括資料である。長さ3.5~4 cm 程のもので中央部が中脹みとなっている。中心部は径2mmの孔がみられ中空となっている。成形は指オサエ・ナデがみられる。胎土・焼土とも土師質である。

5. 木製品

椀と桶の破片資料がある。椀は台部から体部下半にかけてのもので部分的に黒漆がみられた のみのものである。桶は底板と考えられ、復元径は25cm程となる。征目材である。

6. 金属製品

鉄製品には鏃・刀子・鎌様のものがあり、銅製品には古銭と笄がある。鏃は銹化のため遺存が不良であるが、有茎のもので残存長は約8cmを計る。尖端部は菱形を呈し断面も歪んだ菱形

となっており、茎の部分は方形である。刀子は刃部・柄部とも両端が欠落している。刃部は平棟平造りのものである。柄部は銹化のため木質部が遺存していた。断面は楕円形を呈している。鎌様のものは刀子とも考えうるが、大形であり刃部がかすかに反っていることもあり鎌とも考えうるものである。両端は欠損しており断面は逆三角形を呈する。古銭は不明銭を含めて13種類17枚出土している。絡聖元宝を除き一括出土品である。唐銭1枚・明銭2枚・北宋銭が13枚をかぞえる。笄は耳搔き部と穂先部が欠損している。残存長は約22cmを計る。胴部には円形の凸と緑刻による装飾がみられる。胴部幅は1.3cm程を計り、竿から穂先にかけては6mm程と一段細くなっている。厚さは2mm程で均一である。鍍金は確認されない。

7. 石製品

石器(石鏃・剝片)・砥石・臼・サイコロ・用途不明の礫がある。石鏃はアメリカ式石鏃で完形品である。剝片には徴細剝離痕・両面加工のみられるものである。砥石は10cm前後のもので小形である。棒状のものや板状のものがみられる。多くは4面が砥面となり細かな溝がみられる。材質はシルト岩や粘板岩がある。臼には粉挽き臼と茶臼の二種がみられた。1号溝と10号土壌で出土している。炭化物が付着しているものや火を受けているものがある。材質は安山岩系のものである。サイコロは凝灰岩質のもので、磨滅のため角がとれ丸みを帯びている。数は刺突により付けられているが、刺突の位置は様々で全体的に雑な作りである。用途不明の礫は砥石様のものと球形のものである。砥石様のものは面が磨られたようにはなっているが材質が砥石とは違い堅い。球形のものは炭化物が付着しているが、大きさ等から投てき用のものとも考えられたが断定にはいたらなかった。

8. 動·植物遺体

動物には馬・昆虫が、植物では種子・草がある。昆虫・種子・草については同定を行なってあらず明らかにすることができない。12号土壙より出土した馬骨は頭蓋骨・四肢骨・肋骨の一部が遺存していた。四肢骨の骨端は骨幹と融合しており、歯の磨耗痕からみても成馬であり老齢に達していたと考えられる。体高は129cm位で鎌倉時代馬(129.47cm)や御崎馬(132.6cm)の平均値に近い。足先には打撲等による細菌性の炎症や骨増殖が認められるが死に至る程のものではないとのことである。蹄鉄はない。

Ⅷ. 発見遺構について

1. 住居跡

住居跡は4軒検出され全て竪穴式のものである。3号・4号住居跡は出土遺物から古墳時代前期塩釜式期のものであることが確認されるが、1号・2号住居跡も堆積土中の遺物や配置関係から上記の年代が想定され、全てII期に位置づけられる。平面形は4軒とも隅丸方形と考え

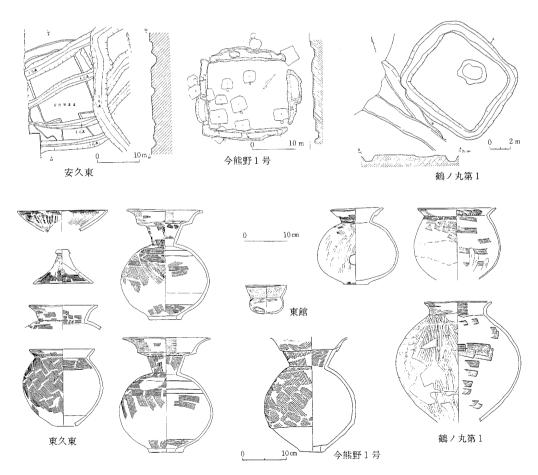
られ周溝は確認されていない。住居軸方向をみると3号と4号住居跡がほぼ同一方向である。4軒とも貼床が確認されたが、主柱穴と考えられるものは4号住居跡のみに確認されているにすぎず、4号住居跡でも北側に対になる2本のみであった。削平や重複関係のため全体を把握できたものは2号・4号住居跡である。2号住居跡は一辺約2.6mと小規模であるが、他は一辺5m前後のものと考えられ、各時代一般的にみられる大きさと考えられる。4号住居跡では炉跡が確認されているが土師器壺体部片を使用した土器埋設炉であった。3号・4号住居跡からは住居に伴う大くの遺物が出土しているが4号住居跡では図示資料であるが19点の土器がみられ、そのうち小形品の高坏・器台が10点を占めるという土器構成に片寄りがみられた。発見された住居跡の数も少なく良好な土器構成も他にみられなく比較ができないが、集落内における機能の違いからくるものであろうか。

2. 方形周溝墓

概要を改めて記述してみると、平面形態は隅丸の方形を呈し、東西軸約26m・南北軸約24.5 mを計る。周溝部は途切れることなく全周し台状部が形成されている。周溝幅は約3.5~6 m で底面幅は約0.7~2.5 m を計る。周溝部の深さは約0.8~1.2 m とほぼ均一である。周溝内堆積土は大きく5層に大別されゆるやかなレンズ状堆積を示している。堆積土中央部に黒色土層が確認され、この土層の上部と下部では遺物に時間的差がみられる。断面はゆるやかな皿状を呈している。周溝部東辺北側の底面において50×70cm程の焼土・炭化物面が確認されている。出土遺物には黒色土上部で須恵器壺・提瓶、鉄鏃があり、下部では土師器高坏・壺・甕があり台状部においても土師器甕が出土している。方形周溝墓に伴う遺物は黒色土下部と台状部の土器群である。特異な施設として周溝部北辺東側において土師器壺を据えるための土壙が一基確認されている。主体部は確認されていない。出土遺物から古墳時代前期塩釜式期のものであることが確認されている。 [期に位置づけられる。

次に宮城県内で発見された方形周溝墓についてみてみたい。現在までに名取市今熊野・高清水町東館・多賀城跡五万崎地区・志波姫町鶴ノ丸・仙台市安久東の計5遺跡、総数15基が確認されている。時期は全て塩釜式期のものである。立地として、安久東遺跡が沖積地であるのに対し他のものは丘陵または台地に位置している。形態としては安久東遺跡が前方後方形を呈しており特異な面を示すが他は方形に巡ぐるものである。周溝部は全周するものが多く周溝部が途切れるブリッジをもつものは少ない。規模は一辺10m前後のものが多く、20m前後あるいはそれ以上の大形のものは今熊野・五万崎地区・安久東遺跡にみられるのみである。台状部において土壙等の検出はあるが主体部が発見された例はない。遺物は周溝部からの出土で、堆積土中からのものが多い。中でも今熊野・安久東・東館・鶴ノ丸遺跡では土器体部や底部に穿孔がみられ、今熊野・安久東遺跡では焼成前に穿孔がみられ、今熊野・安久東遺跡では焼成前に穿孔がみられ供献品としての意識的な作りがある。

以上が宮城県内において発見された方形周溝墓の概略であるが、当遺跡の方形周溝墓と比較してみると、立地は沖積地自然堤防上で類例は安久東遺跡のみにみられ、形態は多くのものと同じ周溝部が全周するものであるが規模は県内最大のものである。遺物は周溝部はもとより台状部からも出土している。穿孔された土器などは確認されなかったが壁面に壺を据えるための土壙がみられ供献形態として特異な面がみられた。また、墓制としての方形周溝墓と共に近接して同時期の集落の存在が確認されている。今熊野・安久東遺跡においては両者に距離的な隔たり、墓域と生活空間、が認められているが当遺跡では極めて近接しており、状況から同時期存在はあり得ないと考えられた。古墳時代後期頃においても方形周溝墓は埋まりきっておらず古墳時代前期においては確実に墓としての形態が保たれていたと考えられ、意識的な点からであるので断定の域を出ないが住居跡(住居跡群としては明らかにすることができないが4号住居跡単体として)は方形周溝墓に先行するものではないかと考えられる。



第63図 宮城県方形周溝墓・出土土器

3. 溝跡

溝跡は8条確認され、出土遺物・重複関係から各々Ⅲ~Ⅷ期に分けることが可能である。ここでは性格がある程度把握できる1号・2号・3号溝についてみる。これらの溝は軸方向がほぼ同じで重複する地点も1箇所に集中するもので時間的な幅は存在するが一つの規格をもって構築されているものと考えられる。重複関係からみると3号→2号→1号と新しくなっている。断面形からみると2号溝が他の溝に較べて規模が小さくなっている。1号溝のみが一辺が確認され約58mを計る。出土遺物には中世陶器・青磁・古銭・臼・笄などがあり、これら遺構の形態や出土遺物から堀跡と考えられ、館跡に関する遺構であると判断される。これら堀跡に関連する遺構は数基の土壙(井戸跡)やピットのみであるが、調査区丁一16~20区には南北に延びる落ち込みがみられほぼ堀跡と平行関係にあり、また調査区南側には堀的な凹面が観察されるなど、調査区内の堀を囲むような外堀的なものがみられる。調査区南側には堀的な凹面が観察されるなど、調査区内の堀を囲むような外堀的なものがみられる。調査区南側には堀的な凹面が観察されるが築かれていたと伝えられる地がある。現在の善徳寺周辺を疑定地としているもので、藤原秀衡の臣名取四郎の居城で、後に曾我氏の居城となり、室町時代末に伊達家臣、菅井和泉守実国が四郎丸四十町を施行している。現在も天正十七年と紀年された菅井氏の墓が残っている。これらからすると、断定はし得ないが1号~3号溝は四郎丸館跡と強い関連をもつものと考えられる。

区.ま と め

戸ノ内遺跡は名取川が形成した自然堤防上に立地している。地形的な面・遺物の散布状況から当初考えられた遺跡範囲を大きく超え、東西で300m・南北で400mを超える大きな範囲をもつ遺跡であることが確認された。

検出された遺構には、住居跡・方形周溝墓・溝跡・土壙等がある。重複関係や出土遺物から 7期に分けたが、遺構を中心にみると大きく古墳時代・平安時代・中世の三時期に分けること が可能である。この中で注意されるものとして、古墳時代の住居跡と方形周溝墓・中世の溝跡 (堀跡) の発見がある。

仙台平野における古墳時代前期の集落と墓跡の発見は、現在今熊野遺跡と安久東遺跡を含めて三例にすぎず、名取川以南の周辺にかぎられており、大型古墳の存在とともに注意されよう。 方形周溝墓は規模の面では県内最大のもので、周溝内より出土した壺は特異な出土状態をみるものであった。

中世の堀跡は明らかに方形区画を示すもので、東・西・南に延びており全容は把握しきれなかったが、当遺跡南側に位置すると伝えられる四郎丸館跡との関連が考えられる。また、調査 区周辺には外堀的な凹地面等が観察され、断定はし得ないが当堀跡は四郎丸館跡の一部とも考 えられるものである。

出土遺物には弥生土器・土師器・須恵器・中世陶器等があるが、主たるものは古墳時代前期に属する土器群である。住居跡・方形周溝墓から出土した土器群には弥生土器から系譜されると考えられる装飾をもつ土器(棒状浮文・円形浮文・隆帯)が共伴しており、一つの土器構成を示すものと考えられ、宮城県内においては塩釜式最古のグループに位置づけられるものと考えられた。

註

註10 氏家和典:「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯 東北史学会 1957年

註11 丹羽 茂:『宮前遺跡』宮城県文化財調査報告書第96集 1983年

註12 篠原信彦他:『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅲ-伊古田遺跡』仙台市文化財調査報告書第69集 1984年

註13 岩渕康治・田中則和:『安久東遺跡発掘調査概報』仙台市文化財調査報告書第10集 1976年

註14 註11に同じ

註15 大田昭夫:『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ一大橋遺跡』宮城県文化財調査報告書第71集 1980年

註16 註10に同じ

註17 丹羽·小野寺祥一郎·阿部博志:『東北新幹線関係遺跡調査報告書V-清水遺跡』寄城県文化財調査報告書第77集 1981年

森 貢喜:『水入遺跡』宮城県文化財調査報告書第71集 1982年

註18 白鳥良一:「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要¶』宮城県多賀城跡調査研究所 1980年

註19 宫城県教育委員会:『今熊野遺跡調査概報』宮城県文化財調査報告書第33集 1973年

註20 加藤道男:『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅲ-東館遺跡』宮城県文化財調査報告書第65集 1980年

註21 宫城県多賀城跡調査研究所:『多賀城跡』宮城県多賀城跡調査研究所年報1977

註22 手塚 均:『東北自動車道遺跡調査報告書V一鶴/丸遺跡』宮城県文化財調査報告書第81集 1981年

註23 土岐山武:『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ-安久東遺跡』宮城県文化財調査報告書第72集 1980年

註24 方形周溝墓の員数は台状部の土壙・出土土器の有無を基準とし、出土土器を主体に考えた。そのため、 志波姫町所在宇南遺跡の方形周溝墓としているものは割愛している。また、今熊野遺跡では9基の方形 周溝墓のうち4基のみの精査であるが、上記の土壙・古式土師器が確認されており、他も同様と考えら れるため9基全てを員数に加えた。

- 註25 安久東・今熊野遺跡の方形周溝墓出土土器には壺底部に焼成以前の穿孔が、鶴ノ丸・東館遺跡では壺・环の体部に焼成後に穿孔がされるものがある。これらは仮器化し供献用の土器としての性格がうかがわれる。当遺跡周溝墓の土器はP.23の遺構に伴う施設で記述したように、壺口縁部が内側に重なりあった状態で検出されている。二重口縁の上部のみが内側に入り込んでおり、意識的に打ちかいたものかとも考えられた。口縁部片は蓋状に遺存させていたものかどうか、両者に関して判断はし得なかった。また、この壺の体部には籠目痕跡がみられるが、籠目が確認される例は極めて珍しく、宮城県周辺では福島県新地町三貫地遺跡(小型壺)、青森県南郷村松石橋遺跡(弥生壺)にみられ、他には東京都八王子市宇津木向原、中田、神谷原遺跡、熊本県益城町古閑遺跡などにみられる。
- 註26 これら装飾をもつ土器を宮城・福島・山形の三県でみてみると、棒状浮文一宮城県名取市清水、福島県河東町南原、北会津村田村山古墳、郡山市正直B、いわき市応時・原高野・朝日長者、山形県山形市川原田・桧葉ノ木・山形西高敷地内にみられ、田村山古墳の壺肩部付近には鋸歯状の沈線が、川原田・桧葉ノ木遺跡の壺には頚部に刻目をもつ隆帯と体部上部に平行と波状の沈線がみられる。また、棒状浮文自体を観察すると退化型態と考えられるものもみられるようである。当遺跡の棒状浮文には縄状と刻目状の圧痕がみられるが、当地域においてはこのような例は未だ確認されていない。円形浮文一宮城県蔵王町大橋、仙台市岩切鴻ノ巣遺跡にみられ、大橋遺跡のものはリング状になる押圧がみられる。隆帯一宮城県仙台市南小泉・下ノ内・中田畑中、名取市清水、丸森町越田・前並、角田市田町裏、蔵王町大橋、福島県いわき市朝目長者、鹿島町天神沢遺跡にみられ、刻目が付されるものが大半であるが天神沢のように隆帯のみのみのものもみられる。越田遺跡のものは体部に鋸歯状の沈線がみられる。

参考文献

加藤道男·阿部博志:『東北新幹線関係調査報告書-観音沢遺跡』宮城県文化財調査報告書第72集 1980年

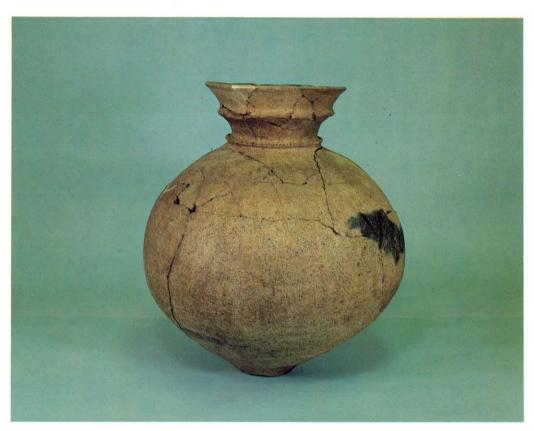
鈴木克彦:「青森県松石橋遺跡出土の弥生式被籠土器」『考古風土記』第8号 1983年

八王子市郷土資料館:特別展図録『三~四世紀の東国』 1983年

山形県:『山形県史』第一巻 1982年

石橋新次:「中九州における古式土師器」『古文化談叢』 1983年

写 真 図 版



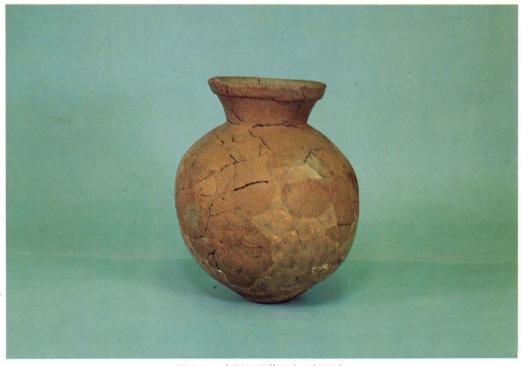


写真 1 方形周溝墓出土土師器壺

ζ. .





写真2 出土遺物 (中世陶器・青磁)

ζ. .

写真3 遺跡周辺航空写真(南東より)



写真 4 調査区全景 (調査前・南より)



写真 5 1 号住確認 (西→東)



写真6 1号住床面検出(南より)

写真7 2号住確認(南→北) 写真8 2号住全景(南→北) 写真9 3号住全景(北→南)

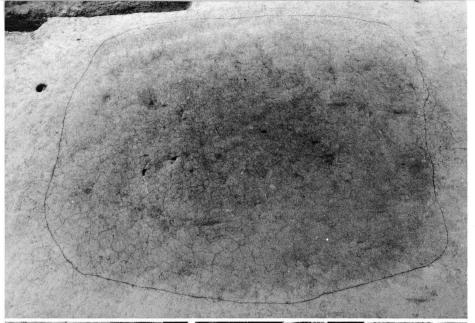


写真10 4号住確認 (東→西)



写真11 4号住堆積土状況(東→西)

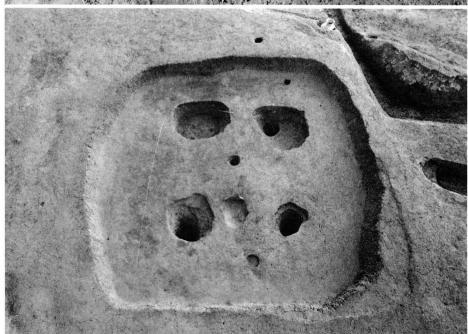


写真12 4号住全景(北→南)

写真13 4号住ピット2断面(東→西)

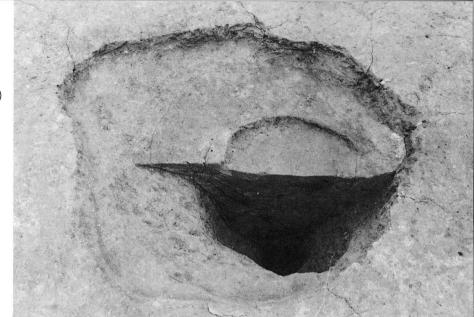


写真14 4号住炉断面(東→西)

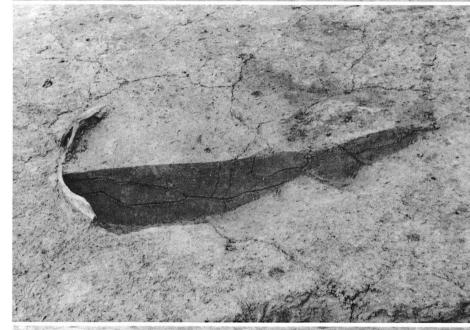


写真15 4号住炉全景



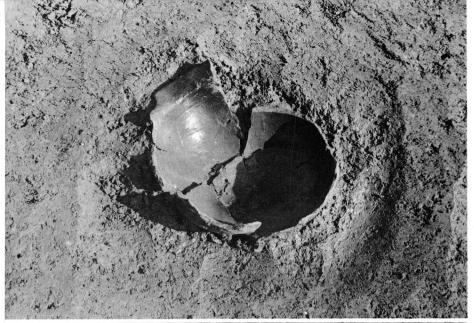


写真16 4号住土器出土状況(甕)



写真17 4号住ピット4 坏・高坏出土状況



写真18 4号住ピット4 高坏・器台出土状況

写真19 方形周溝墓全景(北西から)



写真20 方形周溝墓東辺断面(北→南)



写真21 方形周溝墓西辺断面(東→西)



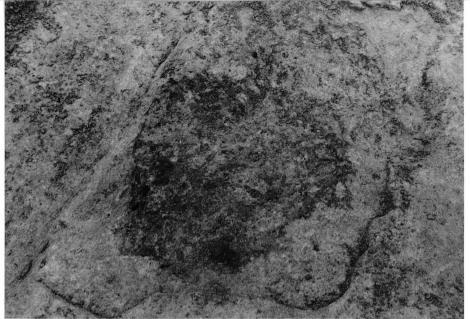


写真22 方形周溝墓西辺底面 焼土・炭化物検出状況

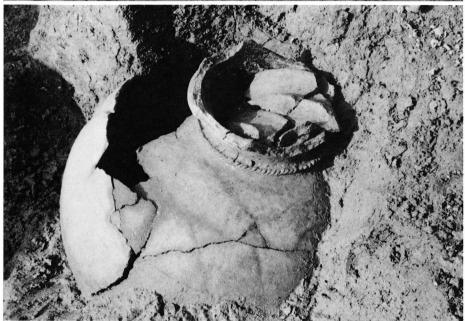


写真23 方形周溝墓北辺壁 壺検出状況



写真24 方形周溝墓東辺底面 壺出土状況

写真25 方形周溝墓東辺 甕出土状況



写真26 方形周溝墓西辺黒色土上面 提瓶出土状況



写真27 焼土遺構断面(南→北)

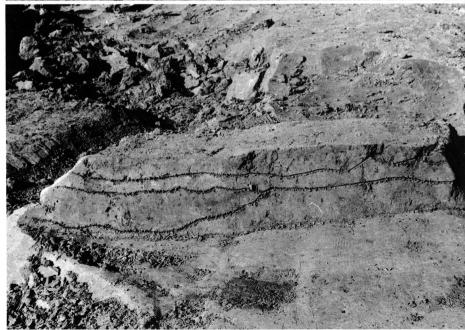




写真28 4号溝(西→東)

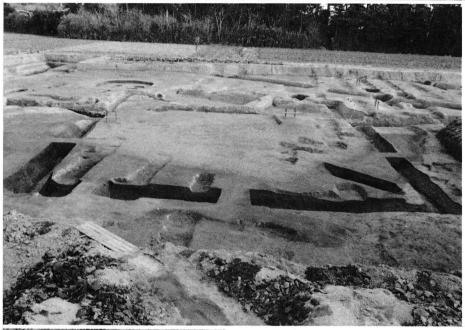


写真29 5号溝全景(西→東)



写真30 5号溝北西壁断面

写真31 5号溝確認面¹不出土状況 (D-9区)

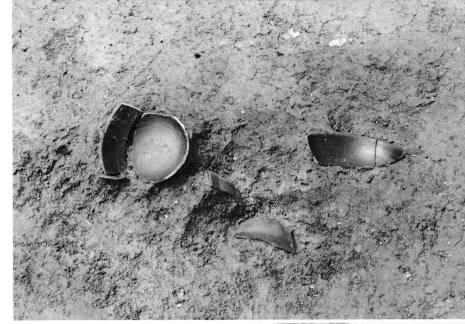


写真32 8号溝全景(東→西)



写真33 8号溝断面(東→西)



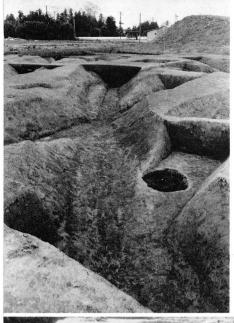


写真34 9号溝全景(東→西)

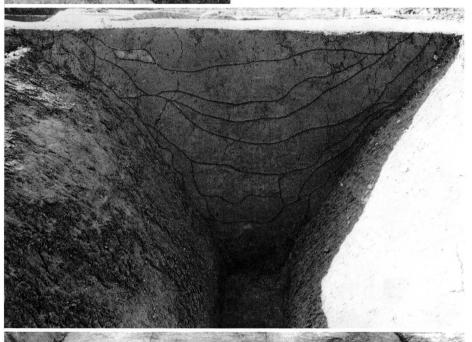


写真35 7号溝断面(東→西)

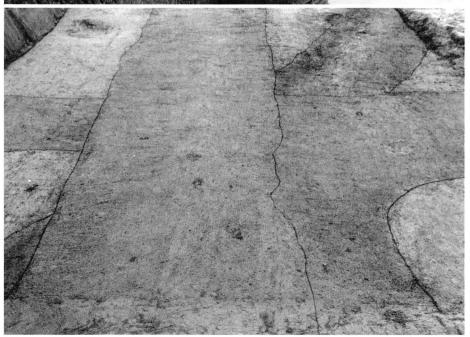


写真36 E-6区溝重複状況 (南→北)

写真37 2号・3号溝全景(北西より)



写真38 2号・3号溝断面(北→南)

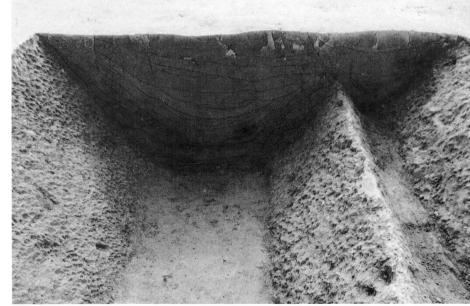


写真39 2号溝南側全景(北→南)





写真40 2号溝北側断面(西→東)



写真41 1号溝全景(南西コーナー)



写真42 東西トレンチ・小溝 1 ・ピット (西→東)

写真43 1号溝北辺断面(西→東)



写真44 1号溝 E-14区 馬歯出土状況

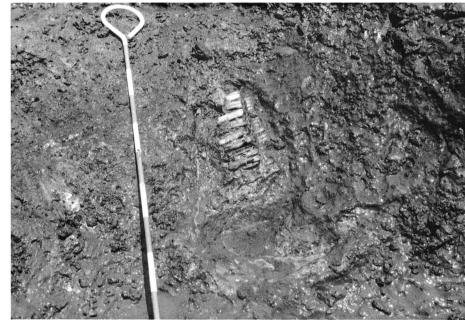


写真45 1号溝南辺グライ層 古銭出土状況



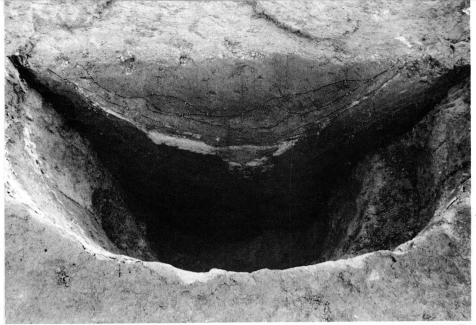


写真46 16号土壙断面(北→南)



写真47 10号土壙断面(東→西)



写真48 10号土壙石臼出土状況 (東→西)

写真49 8号土壙木片出土状況(東→北)



写真50 8号土壙ワラ?出土状況

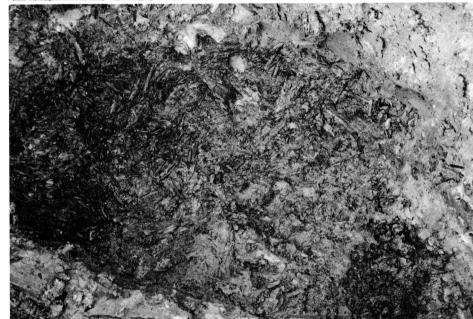


写真51 9号土壙馬骨出土状況





写真52 9号土壙全景(南→北)

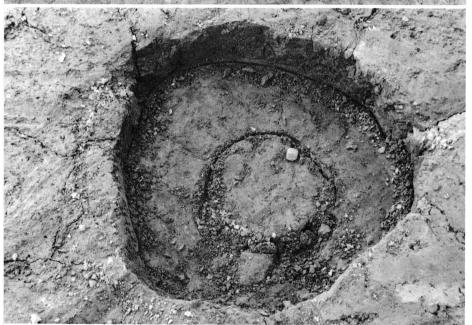


写真53 B-10区ピット サイコロ出土状況(南→北)



写真54 調査区外南側 外堀跡?(北→南)



写真55 4号住居出土土器



写真56 方形周溝墓出土土器



写真57 出土遺物 [(土師器一坏・高坏・器台・壺)



写真58 出土遺物Ⅱ (土師器一壺・甕・台付甕・ミニチュア土器・坏)

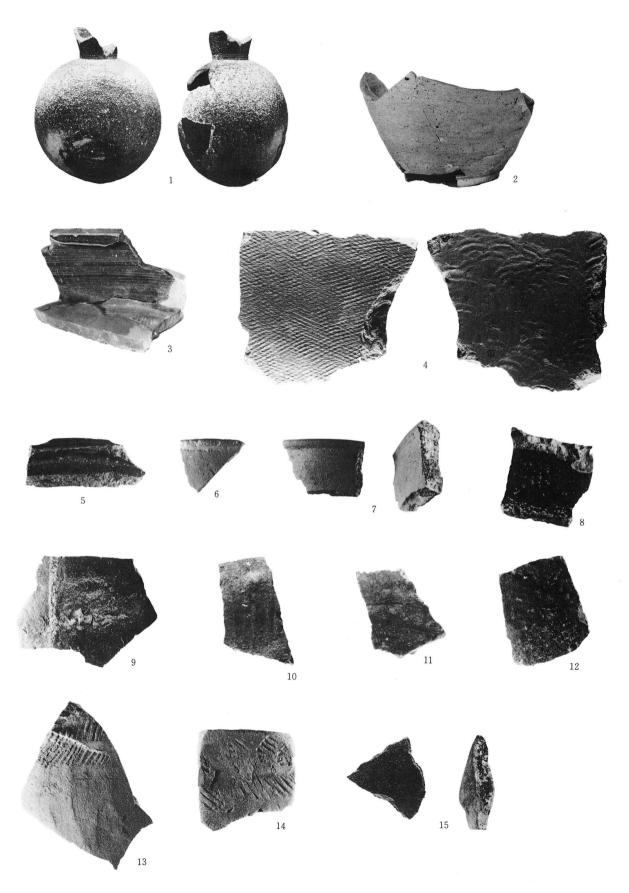


写真59 出土遺物Ⅲ (須恵器ー提瓶・甕、中世陶器一甕・鉢)



写真60 出土遺物▼(中世陶器一甕・鉢、縄文土器、弥生土器)

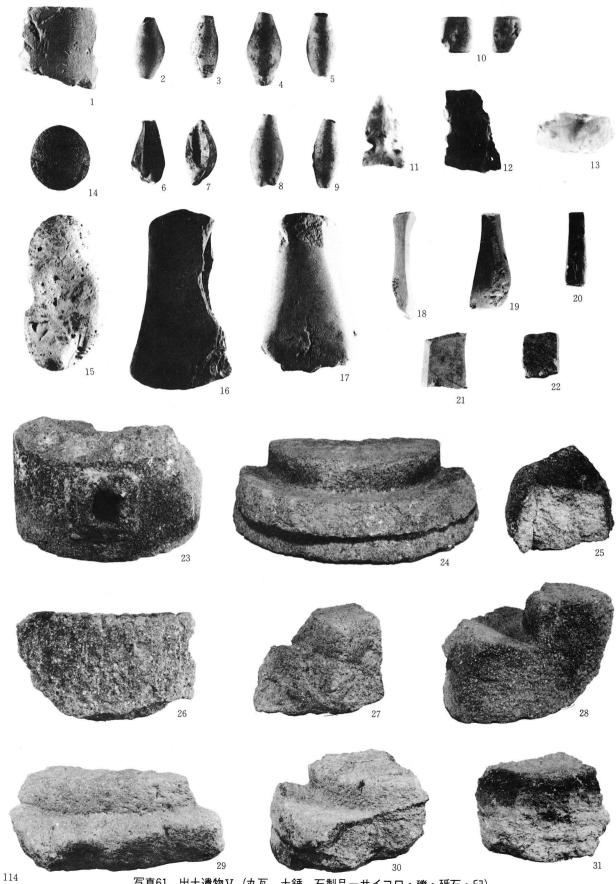


写真61 出土遺物Ⅴ (丸瓦、土錘、石製品ーサイコロ・礫・砥石・臼)

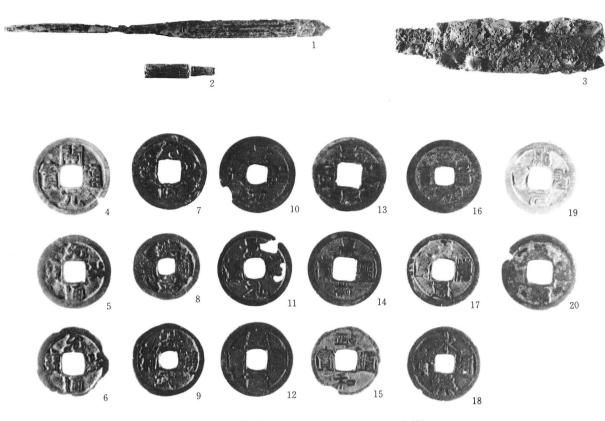


写真62 出土遺物Ⅵ (笄・キセル・刀子・古銭)

職 員 録

仙台市文化財調査報告書刊行目録

第52集 南小泉遺跡一都市計画街路建設工事関係第2次調査報告(昭和58年3月)

第55集 南小泉遺跡一青葉女子学園移転新営工事地内調査報告(昭和58年3月)

第53集 中田畑中遺跡発掘調査報告書(昭和58年3月) 第54集 神明社窯跡発掘調査報告書(昭和58年3月)

	44 △	·教育課	第1集	天然記念物霊屋下セコイヤ化石林調査報告書(昭和39年4月)
	11. 云	狄月环	第2集	仙台城(昭和42年3月)
課	長	永野昌一	第3集	仙台市燕沢善応寺横穴古墳群調査報告書(昭和43年3月)
主	幹	早坂春一	第4集	史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書(昭和44年3月)
			第5集	仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書(昭和47年8月)
	文化	財管理係	第6集	仙台市荒巻五本松窯跡発掘調査報告書(昭和48年10月)
係	長	大沢隆夫	第7集	仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書(昭和49年3月)
主	事	岩沢克輔	第8集	仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書(昭和49年5月)
土	•		第9集	仙台市根岸町宗禅寺横穴群発掘調査報告書(昭和51年3月)
	"	山口 宏	第10集	仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報(昭和51年3月)
	文化財調査係		第11集	史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報(昭和51年3月)
			第12集	史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報(昭和52年3月)
係	長	佐藤 隆	第13集	南小泉遺跡―範囲確認調査報告書―(昭和53年3月)
教	諭	渡辺忠彦	第14集	栗遺跡発掘調査報告書(昭和54年3月)
	"	佐藤 裕	第15集	史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報(昭和54年3月)
主	事	田中則和	第16集	六反田遺跡発掘調査(第2・3次)のあらまし(昭和54年3月)
	"	結城慎一	第17集	北屋敷遺跡(昭和54年3月)
教	諭	成 瀬 茂	第18集	枡江遺跡発掘調査報告書(昭和55年3月)
	"	菅 原 和 夫	第19集	仙台市地下鉄関係分布調査報告書(昭和55年3月)
	"	青沼一民	第20集	史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報(昭和55年3月)
主	事	柳沢みどり	第21集	仙台市開発関係遺跡調査報告 1 (昭和55年 3 月)
	"	木村浩二	第22集	経ヶ峯(昭和55年3月)
	"	篠原信彦	第23集	年報 1 (昭和55年 3 月)
	,	佐藤洋		今泉城跡発掘調査報告書(昭和55年8月)
	"	金森安孝	第25集	三神峯遺跡発掘調査報告書(昭和55年12月)
			第26集	史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報(昭和56年3月)
	"	佐藤甲二	第27集	史跡陸奥国分寺昭和55年度発掘調査概報(昭和56年3月)
	"	吉岡恭平	第28集	年報 2 (昭和56年 3 月)
	"	工藤哲司	第29集	郡山遺跡 I 一昭和55年度発掘調査概報一(昭和56年3月)
	"	渡部 弘美	第30集	山田上ノ台遺跡発掘調査概報(昭和56年3月)
教	諭	渡 辺 誠		仙台市開発関係遺跡調査報告 2 (昭和56年3月)
主	事	主浜光朗	第32集	鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書(昭和56年3月)
	"	斎 野 裕 彦	第33集	山口遺跡発掘調査報告書(昭和56年3月)
	"	長島栄一	第34集	六反田遺跡発掘調査報告書(昭和56年12月)
	"	荒 井 格	第35集	南小泉遺跡一都市計画街路建設工事関係第1次調査報告(昭和57年3月)
派计	遣職員	高橋勝也	第36集	北前遺跡発掘調査報告書(昭和57年3月)
,,,,,,	,		第37集	仙台平野の遺跡群I一昭和56年度発掘調査報告書一(昭和57年3月)
			第38集	郡山遺跡Ⅱ一昭和56年度発掘調査概報一(昭和57年3月)
			第39集	燕沢遺跡発掘調査報告書(昭和57年3月)
			第40集	仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報 I (昭和57年3月)
			第41集	年報 3 (昭和57年 3 月)
			第42集	郡山遺跡―宅地造成に伴う緊急発掘調査―(昭和57年3月)
			第43集	栗遺跡(昭和57年8月)
			第44集	鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書(昭和57年12月)
			第45集	茂庭一茂庭住宅団地造成工事地内遺跡発掘調査報告書一(昭和58年3月)
			第46集	郡山遺跡Ⅲ一昭和57年度発掘調査概要一(昭和58年3月)
			第47集	仙台平野の遺跡群Ⅱ一昭和57年度発掘調査報告書一(昭和58年3月)
			第48集	史跡遠見塚古墳昭和57年度環境整備予備調査概報(昭和58年3月)
				仙台市文化財分布調査報告 [(昭和58年3月)
				岩切畑中遺跡発掘調査報告書(昭和58年3月) (4)台末立化財公本地図(四和58年3月)
			第51集 第59集	仙台市文化財分布地図(昭和58年3月) 南小泉潰跡—都市計画街路建設工車関係第2次調查報告(昭和58年3月)

```
第56集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報 Ⅱ (昭和58年3月)
```

- 第57集 年報4 (昭和58年3月)
- 第58集 今泉城跡 (昭和58年3月)
- 第59集 下ノ内浦遺跡 (昭和58年3月)
- 第60集 南小泉遺跡―倉庫建築に伴う緊急発掘調査報告書―(昭和58年3月)
- 第61集 山口遺跡Ⅱ一仙台市体育館建設予定地一(昭和59年2月)
- 第62集 燕沢遺跡 (昭和59年3月)
- 第63集 史跡陸奧国分寺跡昭和58年度発掘調査概報(昭和59年3月)
- 第64集 郡山遺跡Ⅳ一昭和58年度発掘調査概要— (昭和59年3月)
- 第65集 仙台平野の遺跡群Ⅲ一昭和58年度発掘調査報告書一(昭和59年3月)
- 第66集 年報5 (昭和59年3月)
- 第67集 富沢水田遺跡-第1冊-泉崎前地区(昭和59年3月)
- 第68集 南小泉遺跡一都市計画街路建設工事関係第3次調査報告(昭和59年3月)
- 第69集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅲ (昭和59年3月)
- 第70集 戸ノ内遺跡発掘調査報告書(昭和59年3月)

仙台市文化財調查報告書第70集

戸 ノ 内 遺 跡

昭和59年3月

発行 仙 台 市 教 育 委 員 会 仙台市国分町 3 一 7 一 1 仙台市教育委員会社会教育課

印刷 (株) 東 北 プ リ ン ト 仙台市立町24-24 TEL63-1166

